秋田県文化財調査報告書第110集

三十刈（さんじゅうがり）Ⅰ・Ⅱ遺跡

発掘調査報告書

―― 秋田県男鹿市における縄文・弥生・平安時代遺跡の調査 ――

1984・3

秋田県教育委員会

三十刈（さんじゅうがり）Ⅰ・Ⅱ遺跡

発掘調査報告書

―― 秋田県男鹿市における縄文・弥生・平安時代遺跡の調査 ――

秋田県教育委員会

序

秋田県には先人の残した多くの文化財があります。これら過去の文化遺産を保護し、研究を進めることは、私たちの重要な責務の一つであります。

このほど、秋田県土木部により、男鹿市五里合地内を通る県道潟西・北浦線の改良工事が計画されました。事前に路線内の埋蔵文化財の分布調査を行ったところ、三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡の存在が判明し、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代中期の竪穴住居跡や弥生時代の籾痕土器、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが発見されました。

本書は、この調査結果をまとめたものでありますが、県民各位の文化財保護に対する御理解と、歴史研究の上で、いささかでも役立つことを願ってやみません。

最後に、秋田県土木部秋田土木事務所、男鹿市教育委員会、地域住民の皆様をはじめ、調査にあたり御指導、御協力下さった多くの方々に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和59年３月

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1．本書は秋田県教育委員会が昭和58年６月１日から８月31日に渡って実施した、秋田県男鹿市三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の編集、執筆は児玉　準が行い、三嶋隆儀がこれを補佐した。

3．遺構・遺物の実測、計測、トレースは調査補佐員及び整理作業員があたった。

4．遺構は種類ごとに発見順の一連番号を付したが、ＳＫ15、16は欠番である。各遺構ごとの総数は第４章に記してある。

5．土層図中の土色の標記は農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修『新版　標準土色帖』によった。

6．遺構に使用した略記号は下記のとおりである。

ＳＩ……竪穴住居跡　ＳＫ……土壙　ＳＫ(F)……フラスコ状ピット

ＳＫ(T)……Ｔピット　ＳＮ……焼土遺構・屋外炉　ＳＡ……柱列

ＳＢ……掘立柱建物跡　ＳＤ……溝

7．石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事、嵯峨二郎氏にお願いした。

三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書

目　　次

第1章　は　じ　め　に …… 1

第1節　発掘調査に至るまで …… 1

第2節　調査の組織と構成 …… 1

第2章　遺跡の立地と環境 …… 3

第1節　地形・地質と周辺の遺跡 …… 3

第3章　発掘調査の概要 …… 6

第1節　遺跡の概観 …… 6

第2節　調査の方法 …… 6

第3節　調査の経過 …… 7

第4章　調　査　の　記　録 …… 8

第1節　検出遺構と遺物 …… 8

第5章　ま　　と　　め …… 69

第1節　遺構・遺物の検討 …… 69

挿　図　目　次

第1図　三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡付近の地形と周辺の遺跡 …… 4

第2図　土層模式図 …… 6

第3図　調査区と隣接遺跡 …… 7

第4図　三十刈Ⅰ遺跡遺構配置図 …… 9・10

第5図　三十刈Ⅱ遺跡遺構配置図 …… 11・12

第6図　ＳⅠ10竪穴住居跡 …… 13

第7図　ＳⅠ10出土遺物(1) …… 14

第8図　ＳⅠ10出土遺物(2) …… 15

第9図　ＳⅠ11・12竪穴住居跡 …… 16

第10図　ＳⅠ11出土遺物 …… 18

第11図　ＳⅠ12出土遺物(1) …… 19

第12図　ＳⅠ12出土遺物(2) …… 20

第13図　ＳⅠ13・14竪穴住居跡 …… 21

第14図　ＳＩ13出土遺物……22
第15図　ＳＩ15竪穴住居跡……23
第16図　ＳＩ15出土遺物……24
第17図　ＳＫ13・26土壙……25
第18図　ＳＫ26出土遺物……25
第19図　ＳＫ(F)01フラスコ状ピット……26
第20図　ＳＫ(F)01出土遺物……27
第21図　ＳＫ(F)02・03フラスコ状ピット……28
第22図　ＳＫ(F)03出土遺物……28
第23図　ＳＫ(F)04・05フラスコ状ピット……29
第24図　ＳＫ(F)04出土遺物……30
第25図　ＳＫ(T)01・02Ｔピット……31
第26図　ＳＮ05屋外炉……33
第27図　ＳＮ06・07屋外炉……34
第28図　遺構外出土遺物（縄文）……35
第29図　ＳＫ16・19・20・21・25土壙……37
第30図　ＳＫ16・19・20・21・25出土遺物……38
第31図　遺構外出土遺物（弥生）……39
第32図　ＳＩ01竪穴住居跡……41
第33図　ＳＩ01出土遺物(1)……42
第34図　ＳＩ01出土遺物(2)……43
第35図　ＳＩ02竪穴住居跡……44
第36図　ＳＩ02出土遺物……45
第37図　ＳＩ03竪穴住居跡……46
第38図　ＳＩ04竪穴住居跡、ＳＤ11・12溝……47
第39図　ＳＩ05竪穴住居跡……49
第40図　ＳＩ06竪穴住居跡……51
第41図　ＳＩ07竪穴住居跡……52
第42図　ＳＩ08竪穴住居跡……52
第43図　ＳＩ09出土遺物……53
第44図　ＳＩ09竪穴住居跡……54
第45図　ＳＫ04・05・09土壙、ＳＮ01～04焼土遺構56
第46図　ＳＫ04・05、ＳＮ03出土遺物……57
第47図　ＳＡ01～05柱列……58
第48図　ＳＢ01・02掘立柱建物跡……59
第49図　ＳＢ03～05掘立柱建物跡……61
第50図　遺構外出土遺物（平安）……62
第51図　ＳＫ01～03・06～08土壙……63
第52図　ＳＫ10～12・14・18・22土壙……64
第53図　ＳＫ23・24土壙……65
第54図　ＳＤ01～08溝……67
第55図　ＳＤ09～10溝……68

図　版　目　次

第１～３図版　遺跡　空から見た三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡
第４図版　遺跡　竪穴住居跡と掘立柱建物跡
第５図版　遺跡　ＳＩ01～05竪穴住居跡
第６図版　遺跡　ＳＩ05～09竪穴住居跡
第７図版　遺跡　ＳＩ10～15竪穴住居跡
ＳＢ01～05掘立柱建物跡
第８図版　遺跡　ＳＫ01～08土壙
第９図版　遺跡　ＳＫ09～19土壙
第10図版　遺跡　ＳＫ20～24土壙
ＳＫ(F)01～02フラスコ状ピット
第11図版　遺跡　ＳＫ(F)03～05フラスコ状ピット
ＳＮ02・03焼土遺構
ＳＮ05～07屋外炉
第12図版　遺跡　ＳＫ(T)01・02Ｔピット
ＳＤ01～09溝
第13～16図版　遺物

第1章　は　じ　め　に

第１節　発掘調査に至るまで

県道潟西・北浦線のうち、男鹿市五里合の箱井地内は道路幅が狭いうえに曲折し、中学校が存在するなどして交通には支障をきたしていた。

秋田土木事務所では箱井部落を迂回するバイパスの建設を計画したが、この道路敷の一部が周知の遺跡である縄文中期の是ケ沢遺跡の一部にかかり、踏査の結果その東側にも平安時代の遺跡があることが判明した。このため、秋田県教育委員会では秋田土木事務所の依頼のもとに緊急発掘調査を実施することにしたものである。

第２節　調査の組織と構成

遺　跡　名　称：三十刈（さんじゅうがり）Ⅰ・Ⅱ遺跡
遺跡所在地：秋田県男鹿市五里合（いりあい）箱井字三十刈176番地の３、是ケ沢（これがさわ）27番地の２、他
遺　跡　状　況：畑地・原野
遺　跡　時　代：縄文時代・弥生時代・平安時代
調　査　原　因：県道潟西・北浦線改良工事
調　査　期　間：昭和58年６月１日～８月31日
調査対象面積：三十刈Ⅰ遺跡1,290㎡、三十刈Ⅱ遺跡2,700㎡、計3,990㎡
調　査　面　積：三十刈Ⅰ遺跡1,335㎡、三十刈Ⅱ遺跡2,733㎡、計4,068㎡
調査主体者：秋田県教育委員会
調査担当者：児玉　準　秋田県埋蔵文化財センター文化財主事
調査補佐員：三嶋　隆儀・佐藤　　司・八柳　知之
調査作業員：安藤　キミ・安藤　甚助・安藤　フヨ・磯村　　亨・井上　　諭
植田　礼子・児玉セツ子・小玉レイ子・嵯峨サツ子・嵯峨ナリ子
佐々木イツ・佐々木啓司・佐々木太七郎・佐々木秀・佐々木玲子
佐藤　成美・杉本　キナ・杉本　治市・杉本　信一・杉本　千鶴
杉本　ツエ・杉本　トシ・杉本　友子・杉本ヒサ子・杉本ヤシエ
杉本　勇吉・杉本　良子・薄田　一子・薄田　タエ・薄田千奈子

永井　チヱ・藤田　イト・藤田　カネ・藤田　スエ・藤田　徳治
藤田　永俊・藤田　福蔵・藤田マツエ・真壁　エチ・真壁竹二郎
村井テツエ・目黒　和子・米川　一孝

整理作業員： 越後谷晴美・大河　洋子・大野　甲子・柏谷　愛子・小松　郁子
嶋田富美子・深沢エツ子・山田美喜子

調査協力機関： 秋田県土木部秋田土木事務所
男鹿市教育委員会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地形・地質と周辺の遺跡

三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡は男鹿市五里合箱井字三十刈及び是ケ沢に所在し、おおよそ北緯39°58′、東経139°52′の位置にある。遺跡地の標高は30～36ｍで、周囲は細い沢が入り組んだやや複雑な地形を示している。Ⅰ・Ⅱ遺跡間にも浅い沢が入り込み、この西側がⅠ、東側がⅡである。これといった河川はなく、滝ノ頭湧水点より五里合盆地を抜けて谷地へ流れる鮪川と、琴川低地を流れる安田川があるがいずれも小河川である。

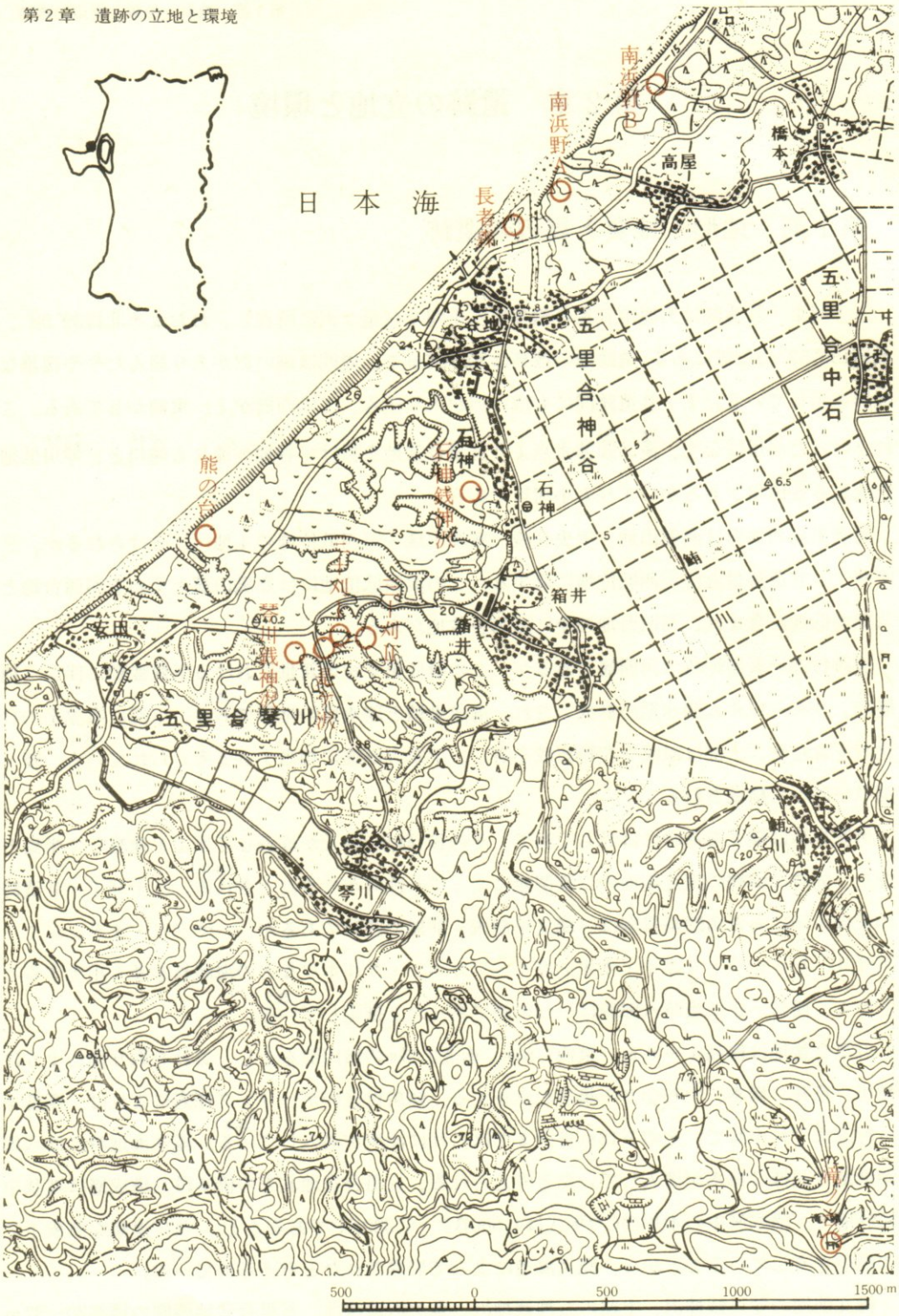
男鹿半島の地形は西部山地・中央丘陵・寒風山域・潟西低位地の４地区に分けられるが、三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡付近は潟西低位地に属する。この潟西低位地には寒風山麓と交わる潟西台地と八郎潟低地が含まれ、潟西台地の中に五里合盆地がある。(註１)

遺跡付近の表層地質は潟西層であるが、この層は第４紀更新世における気候変動に伴なう地層で、リスーウルム間氷期の形成とされ、海成堆積と陸水成の堆積である。(註２) 下部に寒流系の貝化石を含むが、上部は温暖な花粉組成を有し、下末吉海進に相当すると考えられている。(註３) 礫・泥及び砂から構成される。

男鹿半島は縄文海進時には恐らく島で、その後、砂州、砂丘が成長して本土と連繋して半島となり、同時に海峡の南北両面の二重閉塞によって八郎潟ができたとされる。(註４) 三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡の東南４kmにある角間崎貝塚は、縄文早期末～前期の遺跡であるが、ハマグリ・オキシジミ・アサリ・ヒメシラトリガイ・オオノガイ・アカニシ・サルボウなどの海産貝を多く出土することから、西村　正は当時八郎潟は一つの湾であったと推定している。(註５)

五里合盆地は標高４～８ｍ、東西1.5km、南北2.5kmの楕円形をなし、これを取り囲むように鮪川、箱井、橋本、中石などの集落が点在する。鮪川付近のボーリング探査によれば、深度４ｍ付近まで粘土層で、その下18ｍ付近まではこれに泥炭が混入している。(註６) 縄文海進時には八郎潟低地と同様に海水が湾入していたと考えられる。五里合盆地北方の橋本段丘構成層は塊状中粒砂層で、構成層中の木片のC^{14}年代は4,560BP、6,320BPであること、及び温緩な気候下での植生を有していることから、縄文海進によって形成されたと考えられている。(註７)

縄文前期の琴川銭神沢、中期の石神銭神沢、是ケ沢遺跡は、五里合盆地西側の標高20～37ｍほどの台地上に占地しているが、半島北部砂丘上の遺跡中最古の遺跡は谷地における鮪川右岸の南浜野Ａ遺跡で、報文に図示された土器には横位の隆線とそれに連結して湾曲する縦位の隆



第１図　三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡付近の地形と周辺の遺跡

線及び刺突文の見られる大木10式あるいは門前式らしい土器が含まれている。(註８) また、長者森Ａ遺跡からは十腰内Ｉ式が出土しており、中期末～後期初頭の時期にはすでに海水が退き、砂丘が形成されて縄文人の活動舞台となっていたことを物語っている。

同じく大木９・10式を出土する遺跡に北浦泉野遺跡(註９)があり、複式炉を有する竪穴住居跡が検出された他、門前式も採集されているから、是ケ沢・三十刈Ｉ、南浜野Ａとほぼ同時期に存在した遺跡である。後期末から晩期末にかけての遺跡としては上鮪川遺跡が昭和初期から知られている。この遺跡から500ｍほど上流には寒風山の伏流水である滝ノ頭湧水点があるが、ここからは縄文後期土器の他、弥生土器も出土しており、滝ノ台遺跡と呼ばれている。弥生土器はこの他に南浜野Ａ遺跡、岡獅子(おかじし)遺跡にも見られる。

土師器、須恵器は南浜野Ｂ、熊の台遺跡から出土している他、昭和48年、琴川低地の圃場整備の際に平安期の井戸跡、その他の遺構が検出されている。(註10) 三十刈Ｉ・Ⅱ遺跡の北東5.5㎞には海老沢窯(えびさわ)跡(註11)があり、半島内では五里合を含む潟西台地と八郎潟低地にこの時代の遺跡が集中している観がある。

註１　藤岡一雄「男鹿半島の地質」『男鹿半島自然公園学術調査報告』　財団法人日本自然保護協会　1973年

註２　加藤万太郎・渡部　晟「男鹿半島安田海岸における鮪川・潟西層の構造と堆積環境について」『秋田県立博物館研究報告』　第１号　1976年

註３　秋田地学教育学会『地質巡検案内書　――男鹿半島の第四系――』　1978年

註４　註１に同じ

註５　西村　正「県内貝塚の貝について」『秋田考古学』　第７号　1957年

註６　秋田県農政部『土地分類基本調査　船川・戸賀』　1974年

註７　註３に同じ

註８ａ奈良修介・磯村朝次郎「八郎潟周辺の遺跡」『八郎潟の研究』　1965年

ｂ磯村朝次郎「考古資料」『男鹿市の文化財』　第５集　男鹿市教育委員会　1983年

註９　児玉　準『泉野遺跡発掘調査概報』　男鹿市教育委員会　1976年

註10　註８ｂに同じ

註11　岩見誠夫・伊藤種秋・永瀬福男『城土手遺跡緊急発掘調査報告書・海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』　秋田県教育委員会　1975年

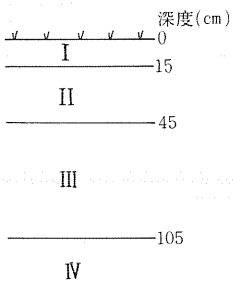
岩見誠夫「原始古代の郷土」『若美町史』　若美町　1981年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

前述のように三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡はバイパス工事に伴なう発掘調査であるため、調査範囲は最大幅15ｍ、長さ415ｍと狭長である。Ⅰ遺跡は是ケ沢遺跡の一部と見られ、検出遺構の主体は縄文中期終末期のものである。Ⅰ遺跡のある小さな舌状の台地は東側が斜面となりⅠ・Ⅱ遺跡間の沢へと連なるが、この沢には黒色土が厚く堆積し、主としてⅡ遺跡の方から流入したと考えられる土師器の小片が出土している。Ⅱ遺跡の占地する台地は北西～南東方向に延びており、おそらくこの平坦部全域に平安時代の集落の存在が推察される。

調査区域内の土層はいたって単純である。傾斜面下方では上方より流れて堆積した褐色土層が厚く堆積し、またＳＢ01・02、ＳＤ09・10付近は沢の上方延長部にあたっており、表土の下に暗褐色土が堆積しているが、その他の平坦部では10～20cmの厚さの表土を剝ぐとすぐに地山の遺構確認面が現われた。殊にⅠ遺跡のＳⅠ09以東の傾斜面や、Ⅱ遺跡のＳⅠ04～07間の畑地はその傾向が著しい。Ⅱ遺跡東端にあるＨＨ18グリッド内での土層堆積状態の観察は以下のとおりである。



第２図　土層模式図

第Ⅰ層：暗褐色土(7.5ＹＲ3/3) 耕作土。

第Ⅱ層：褐色土(7.5ＹＲ4/4)。Ⅰ・Ⅱ層の漸移層で炭化物を含む。

第Ⅲ層：明褐色土(7.5ＹＲ5/6)。堅く、粘性が強い。

第Ⅳ層：にぶい黄橙土(10ＹＲ7/3)。Ⅲ層より粘性少く砂質である。明赤褐色（５ＹＲ5/6)、黒色(7.5ＹＲ1.7/1）の粒子を全体に含む。ＳⅠ02・06竪穴住居跡床面の円形凹み内とカマド袖上部に使用されている。潟西層である。

Ⅱ遺跡では第Ⅱ層の下に粘性の強い明褐色土が存在するが、Ⅰ遺跡ではほとんど見られず、第Ⅳ層上面に遺構が検出される。

第２節　調査の方法

調査はグリッド方式によったが、グリッドの設定は業者委託とし、以下の方法で行った。調査区のほぼ中央部に原点ＭＡ―50を取り、これから磁北に合わせた南北基線（Ｙ軸）とこれに

直交する東西基線（Ｘ軸）を求め、南北方向には４ｍごとに北に向かって順に増加する２桁の算用数字、東西方向には４ｍごとに東から西に向かってアルファベット２文字の組み合わせを付した。アルファベット２文字の１桁目は40ｍごとに変わり、グリッドの呼称は東南隅の座標で呼ぶこととし、座標名はアルファベットと算用数字の組み合わせで呼んだ。

第３節　調査の経過

調査経過の概略を以下に記す。６月１日、プレハブ設営、Ⅱ遺跡から調査開始。６月６日、ＳＩ01竪穴住居跡検出。６月22日、ＳＩ05竪穴住居跡付近で掘立柱建物跡を検出する。６月27日、Ⅰ遺跡西端部で表土剥ぎを開始、７月８日に至り縄文中期の竪穴住居跡を検出。８月１日、Ⅱ遺跡調査終了。８月９日、ＳＩ09内カマドから炭化米を検出。８月31日、調査終了。

第３図　調査区と隣接遺跡　　0　100ｍ

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

調査はⅡ遺跡東端から行い、遺構には発見順に遺構ごとの一連番号を付した。遺構の構築時代は縄文、弥生、平安時代であるが、所属時代を決め難いものは時代不明として扱い、遺構、遺物の記述にあたっては時代順に配列した。各時代ごとの検出遺構数は以下の通りである。

縄文時代	竪穴住居跡……５	土　　壙……２	フラスコ状ピット……５
	Ｔピット……２	屋外炉……３	
弥生時代	土　　壙……５		
平安時代	竪穴住居跡……10	土　　壙……３	焼土遺構……４
	掘立柱建物跡……５	柱　　列……５	
時代不明	土　　壙……15	溝……12	

１．縄文時代

(1)　遺構と遺構内出土遺物

①　竪穴住居跡

ＳＩ10（第６図　第７図版）

位置：ＰＧ55・ＰＨ55・ＰＩ55グリッド

確認状況：地山面で、暗～黒褐色の落ち込みを確認した。輪郭がはっきりせず、やや円形に近いプランかと思われた。

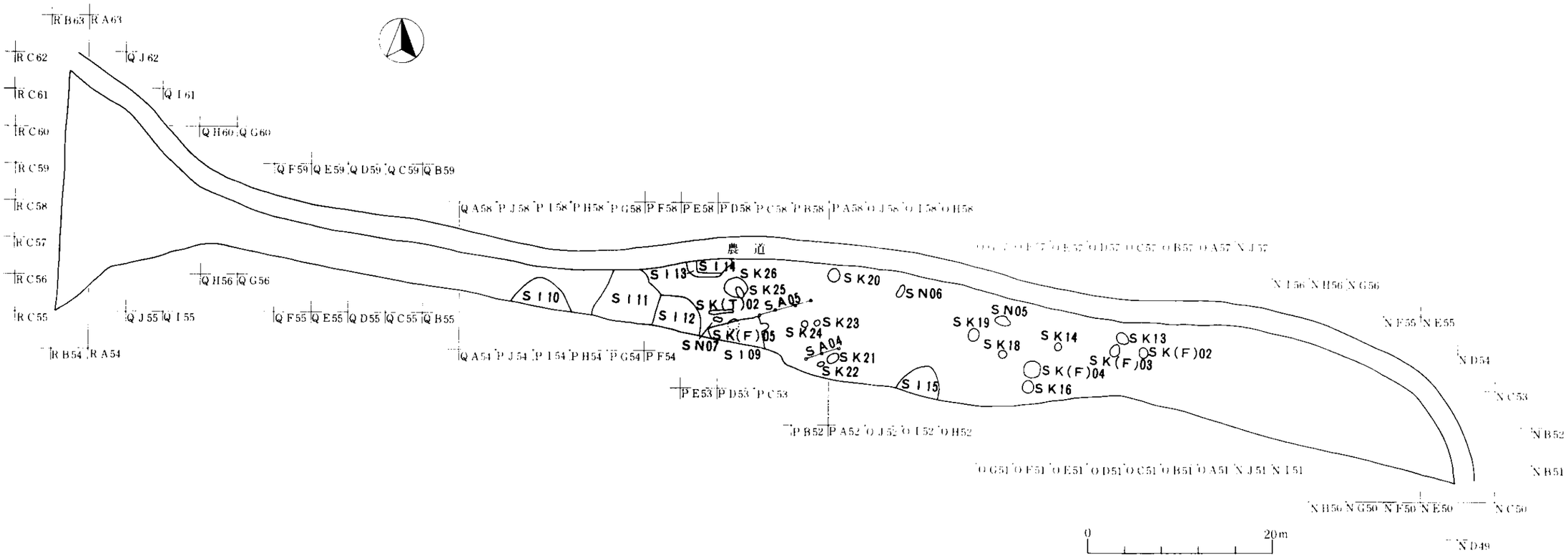
平面形・規模：調査範囲外に約½が入り込んでいるが、円ないし楕円形を呈するものであろう。調査部分の面積は13.2㎡である。

床：堅くしまっており、壁から60cmほど離れて５～８cmの高さで一段低くなっている。低位の床面は住居覆土の土層観察から別棟住居の重複ではなく、本住居固有のものである。

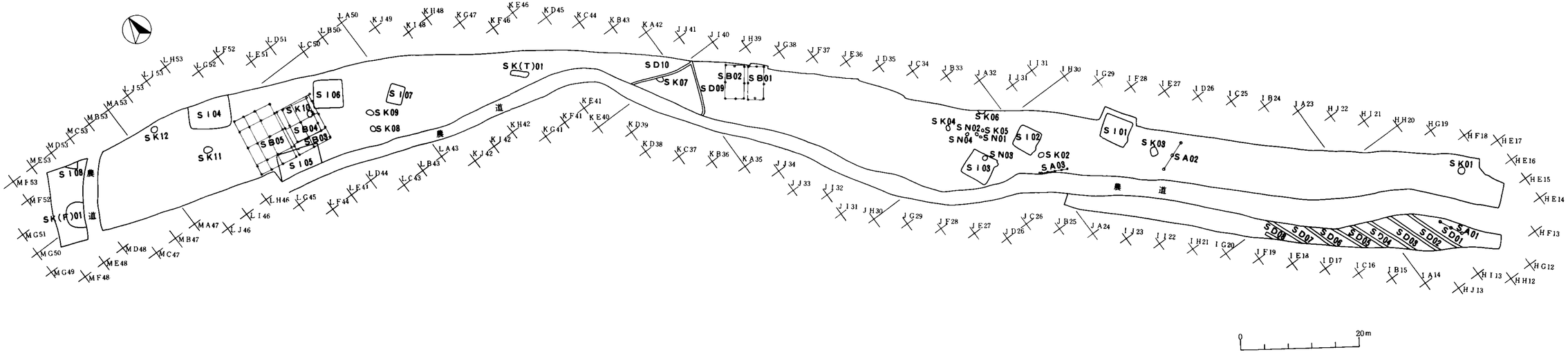
壁：住居付近の地山面は西から東へ向かって低く傾斜しているので、壁も西側は26cmあるが、東ほど低くなり７cmとなる。垂直に近い立ち上がりを示す。

壁溝：幅12～32cm、深さ６～10cmで構築されている。恐らく全周するものであろう。

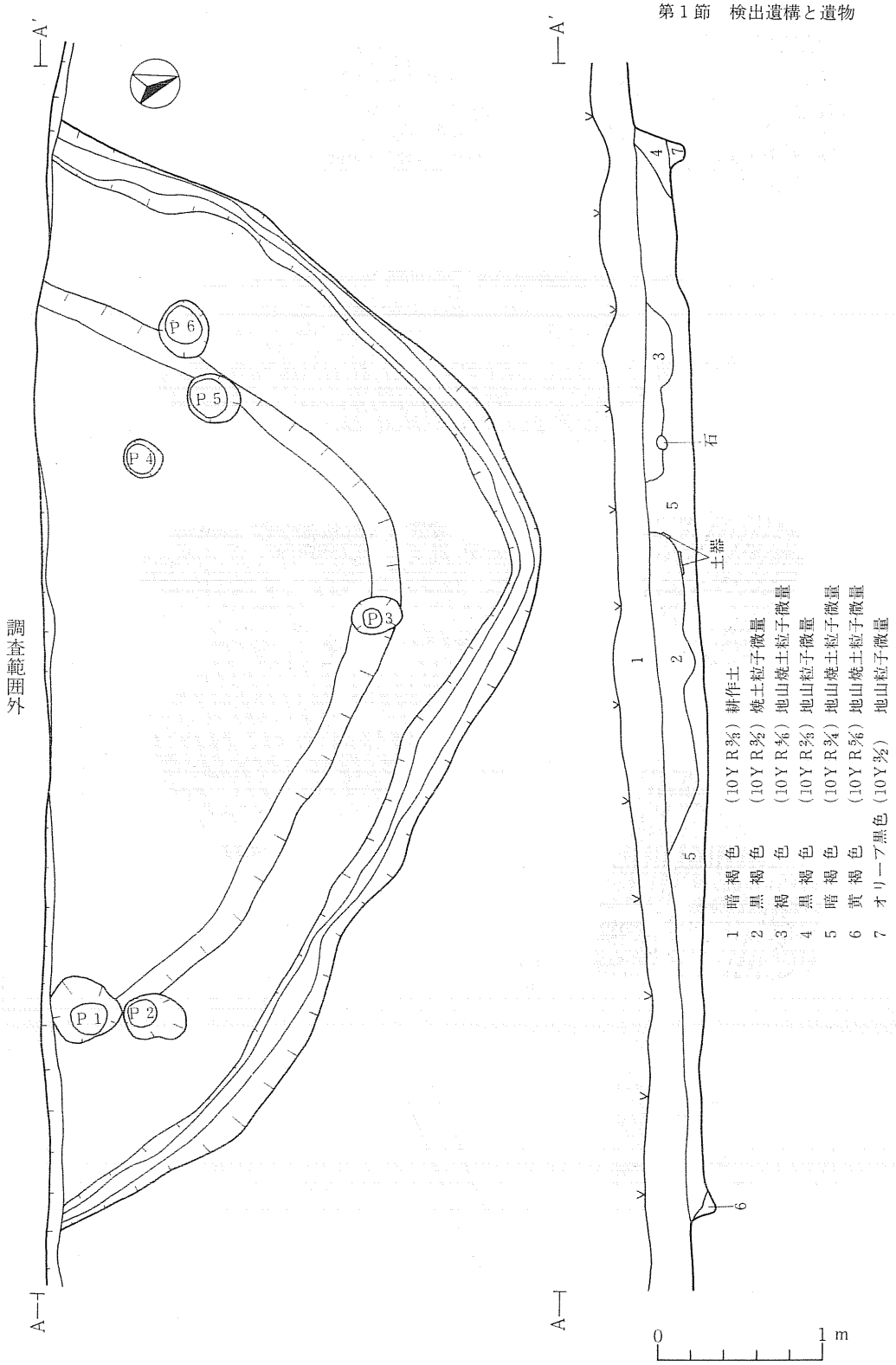
柱穴：Ｐ１・59cm、Ｐ２・54cm、Ｐ３・52cm、Ｐ４・36cm、Ｐ５・52cm、Ｐ６・53cmの深さで、Ｐ４を除いてはいずれも低位床面の壁に接している。Ｐ１～３・５・６が主柱穴であろう。



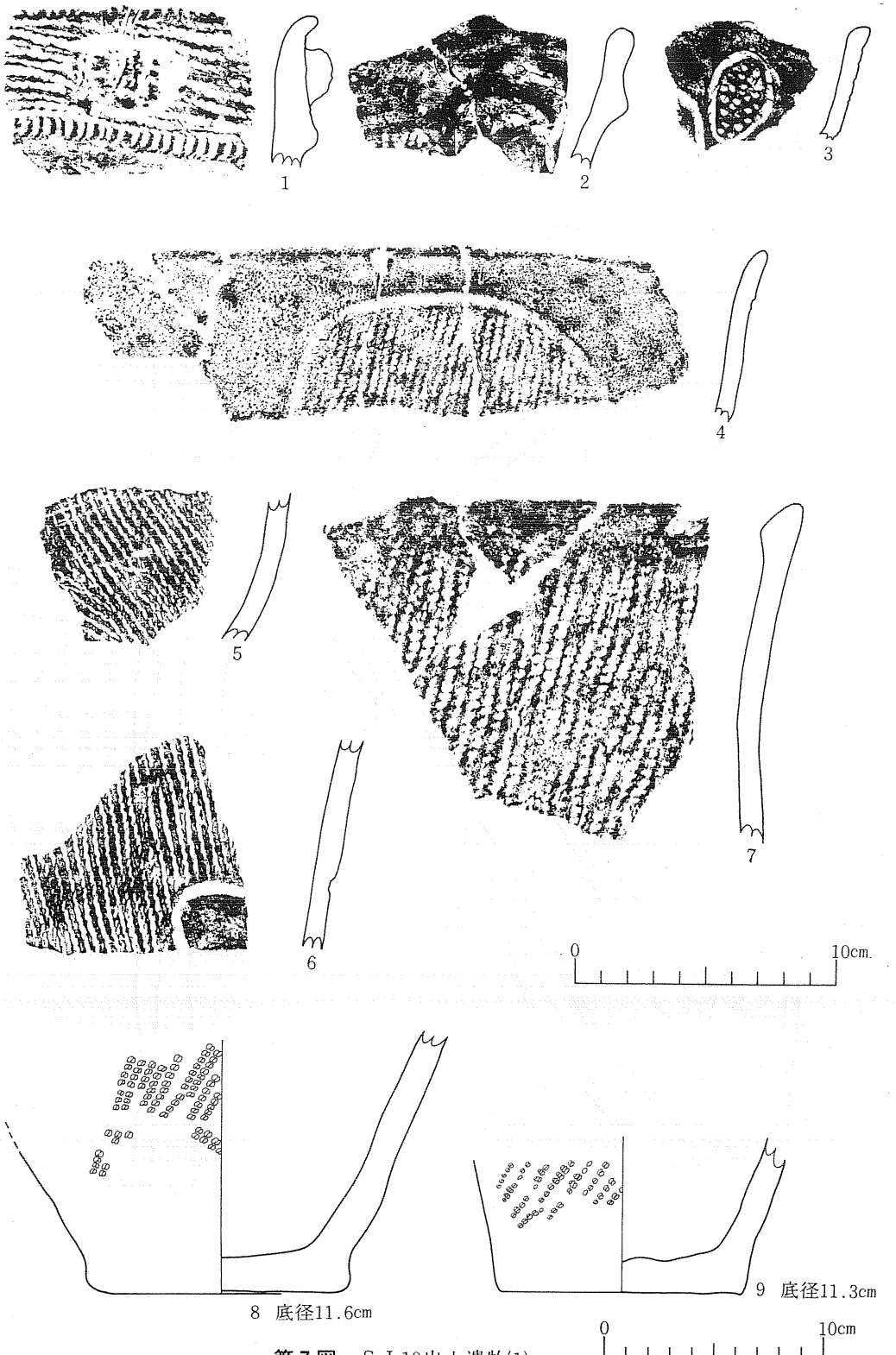
第４図　三十刈Ⅰ遺跡遺構配置図



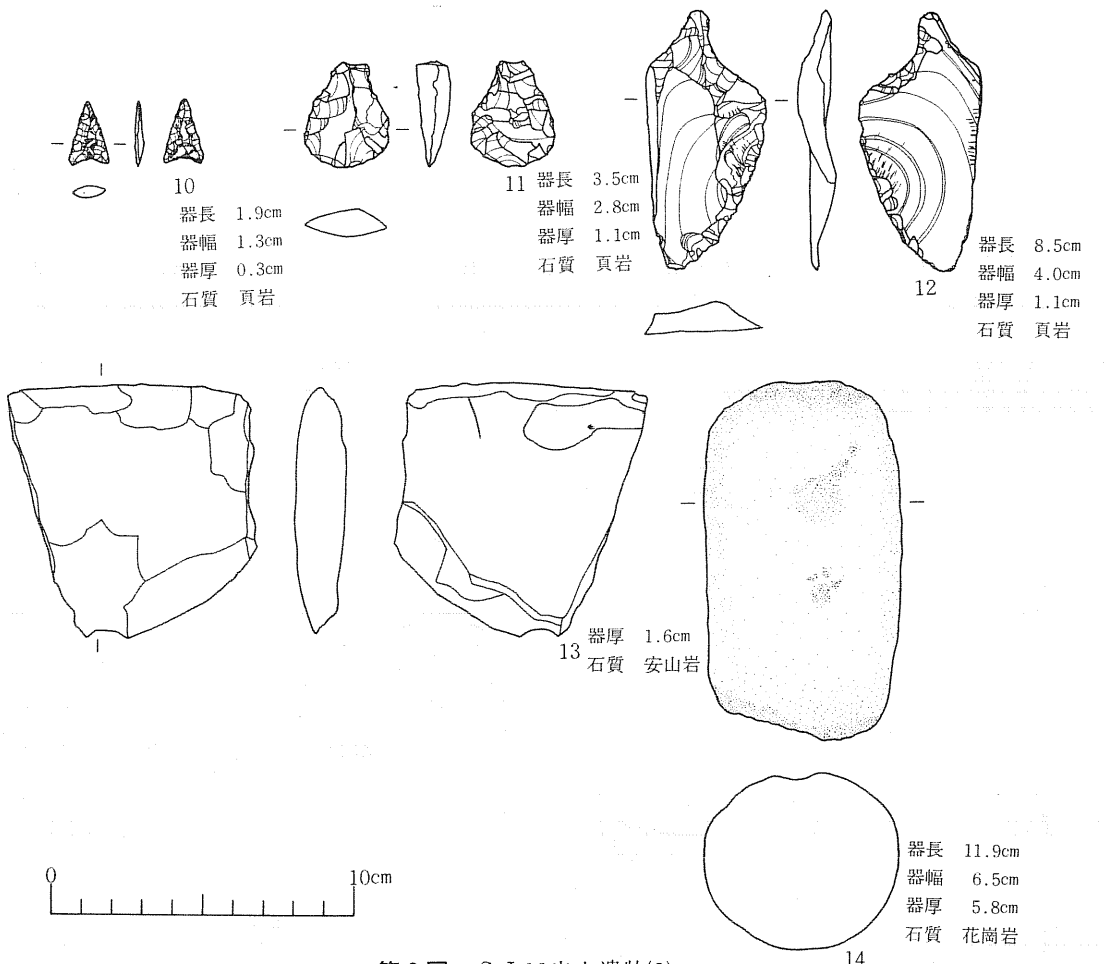
第５図　三十刈Ⅱ遺跡遺構配置図



第６図　ＳＩ10竪穴住居跡



第７図　ＳＩ10出土遺物(1)



第８図　ＳＩ10出土遺物(2)

炉：検出されなかった。

遺物：住居床面から10cmほど浮いて、住居外から投棄された状態で出土した。円筒上層ａ式土器１片（第７図１）を含む他は大木10式土器である。石器には石鏃、小形箆状石器、石匙、半円状扁平打製石器、凹石が出土している。

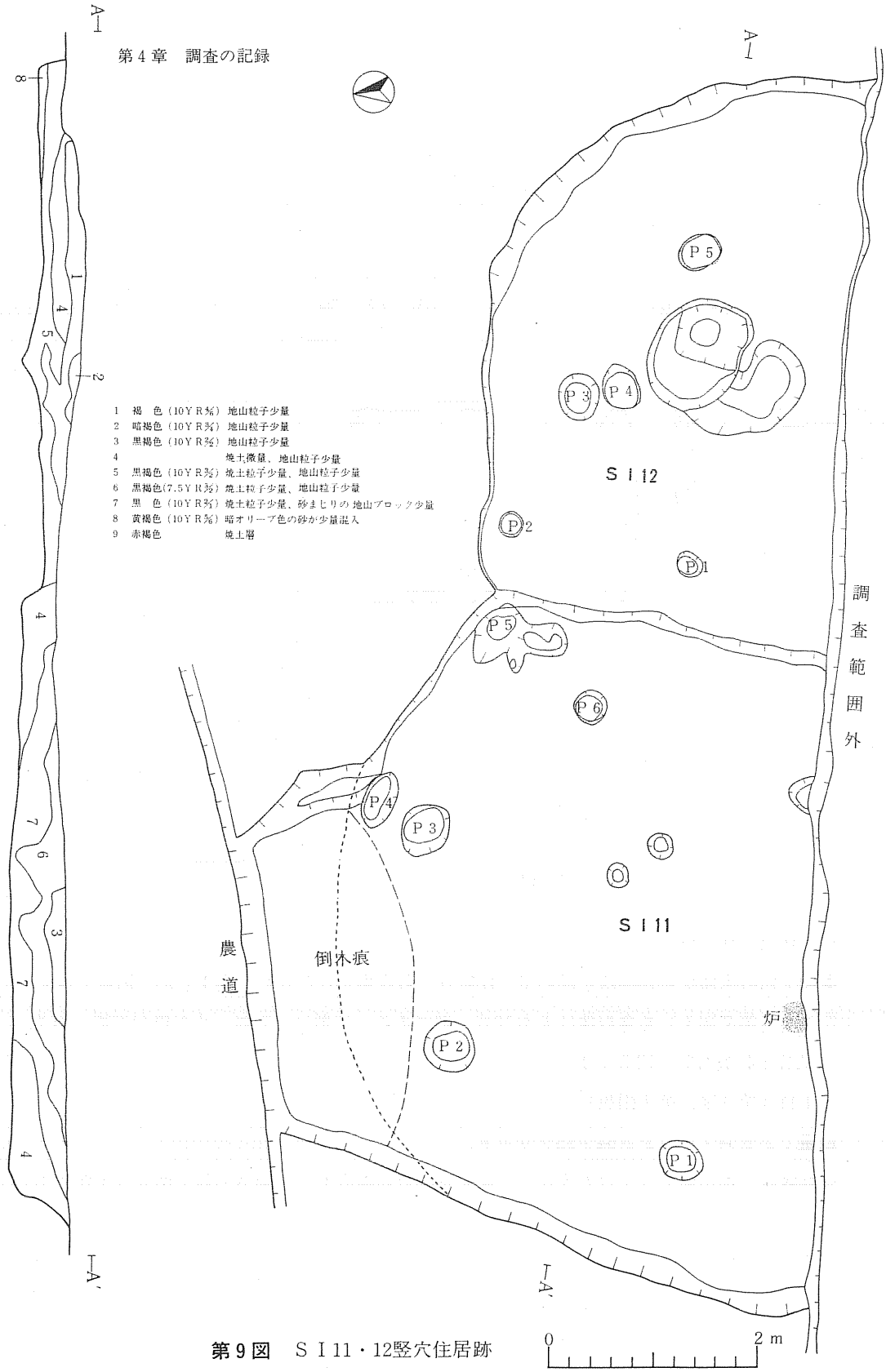
ＳＩ11（第９図、第７図版）

位置：ＰＥ54・55、ＰＦ54・55グリッド。

確認状況：地山面でＳＩ12と重複して確認されたが確認面では両者の新旧関係は不明であった。また北側は倒木痕による攪乱を受けていた。

平面形・規模：調査範囲外に約½が入り込み全容は不明であるが、円形または楕円形となるものであろう。調査部分の面積は25.8m²である。

床：あまり堅くはなく、中央部に向かってやや低くなる。



第９図　ＳＩ11・12竪穴住居跡

壁：倒木痕によって北側が破壊されているが、西側は40～45cmの高さで外方に傾斜している。東側でＳＩ12を切っている。

堅溝：検出されなかった。

柱穴：Ｐ１・17cm、Ｐ２・24cm、Ｐ３・45cm、Ｐ４・13cm、Ｐ５・20cm、Ｐ６・40cm、Ｐ７・13cm、Ｐ８・７cm、Ｐ９・24cmの深さである。Ｐ１～３・６・９が主柱穴であろう。

炉：中央よりやや南寄りの床面に焼土が見られ、地床炉の一部であると考えられる。

遺物：住居内覆土より大木10式土器の破片と、石匙、石錐が各１点出土した。

ＳＩ12（第９図、第７図版）

位置：ＰＤ54・55、ＰＥ54・55グリッド

確認状況：地山面で褐色ないし黒褐色の円形に近い落ち込みを確認した。また、遺構覆土上面で焼土の分布を検出したが、これは本遺構とは無関係である。

平面形・規模：南半が調査範囲外に入り込んでいるが円形を呈するものと思われる。調査部分の面積は16.7m²である。

床：全体にほぼ平坦であるが、あまり堅くはない。中央部に長径150cm、深さ60～85cmの不整形の落ち込みがある。

壁：西側はＳＩ11に切られて消失している。東側の壁が北側に比して外方に傾斜し、高い所では38cmの高さである。

壁溝：検出されなかった。

柱穴：Ｐ１・58cm、Ｐ２・23cm、Ｐ３・38cm、Ｐ４・48cm、Ｐ５・57cmの深さである。位置及び深さからＰ１・３・５が主柱穴であろう。

炉：検出されなかった。

遺物：覆土内から大木10式の土器片と底部が出土した。

ＳＩ13（第13図、第７図版）

位置：ＰＣ56、ＰＤ55・56グリッド

確認状況：地山面上で黒褐色土を暗褐色土が囲む状態で確認した。遺構覆土内に木根が多く、本遺構とＳＩ14との関係はこの時点では不明であった。

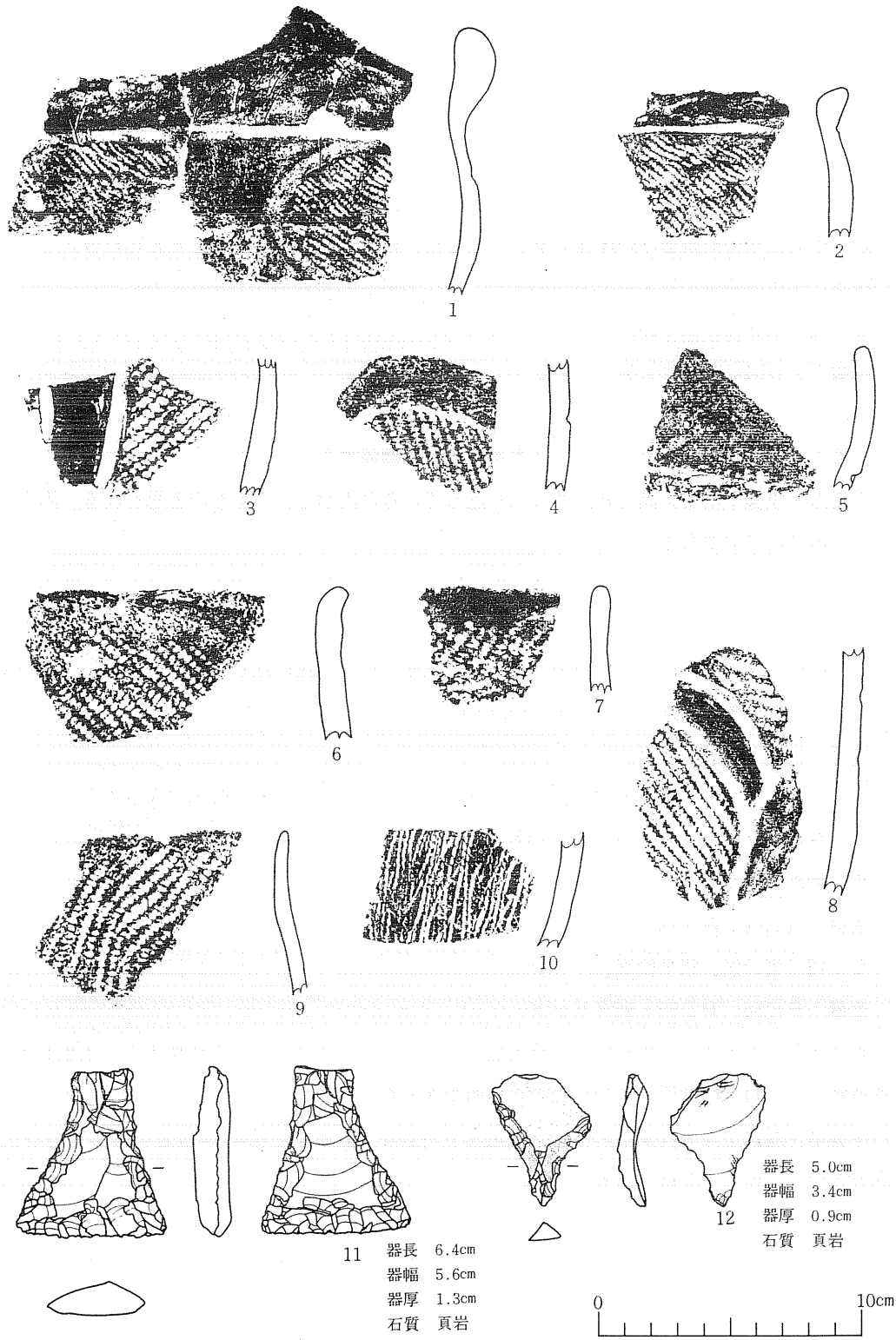
平面形・規模：北側は農道の下に入り込んでいるが、おおよそ径400cmほどの円形であろう。調査部分の面積は7.3m²である。

床：平安時代のＳＩ14によって床面が大きく破壊されているが、残存部は平坦である。

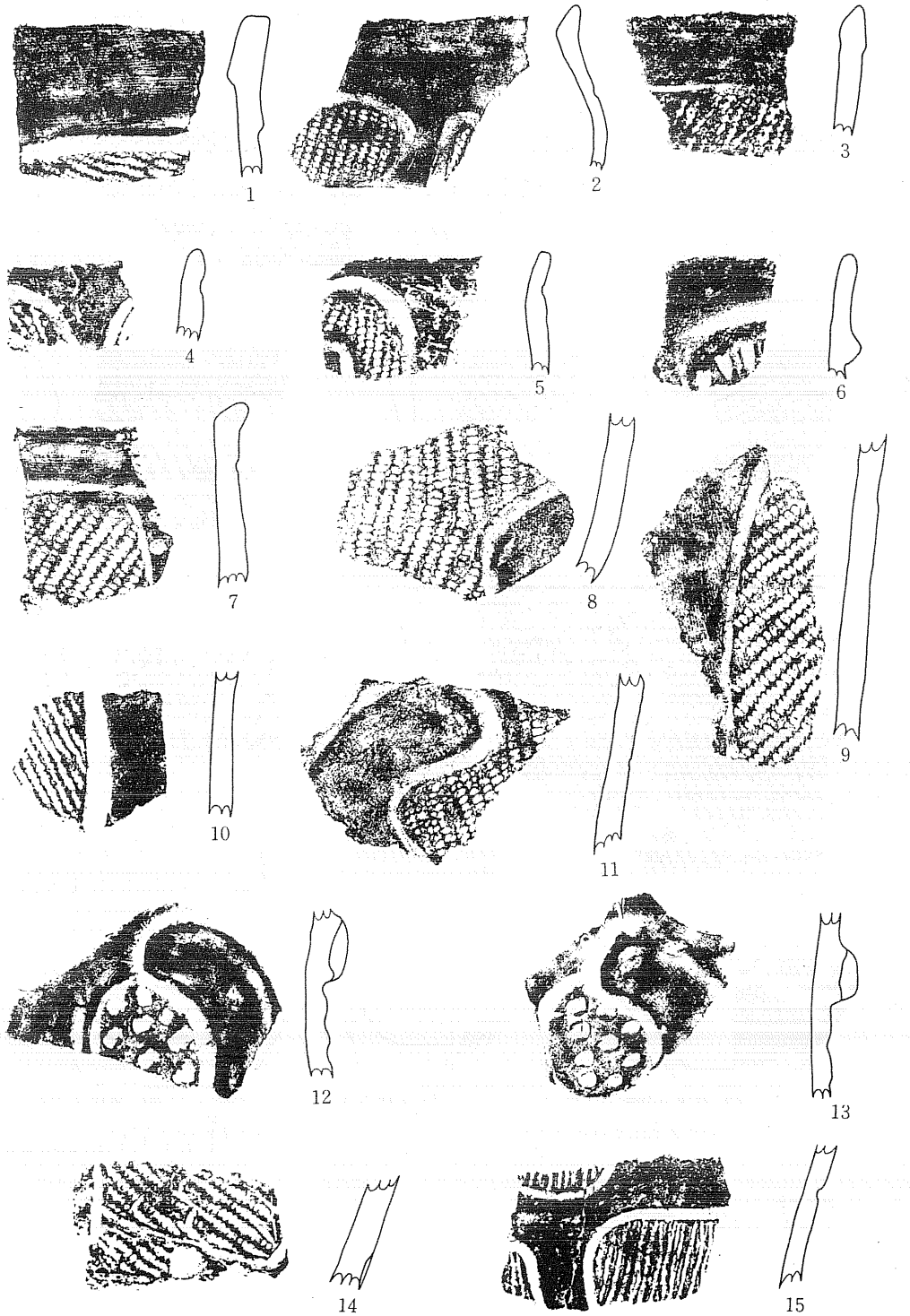
壁：高さ30cm以上で幾分外方に傾斜して立ち上がっている。東側はＳＩ14に破壊されている。

壁溝：検出されなかった。

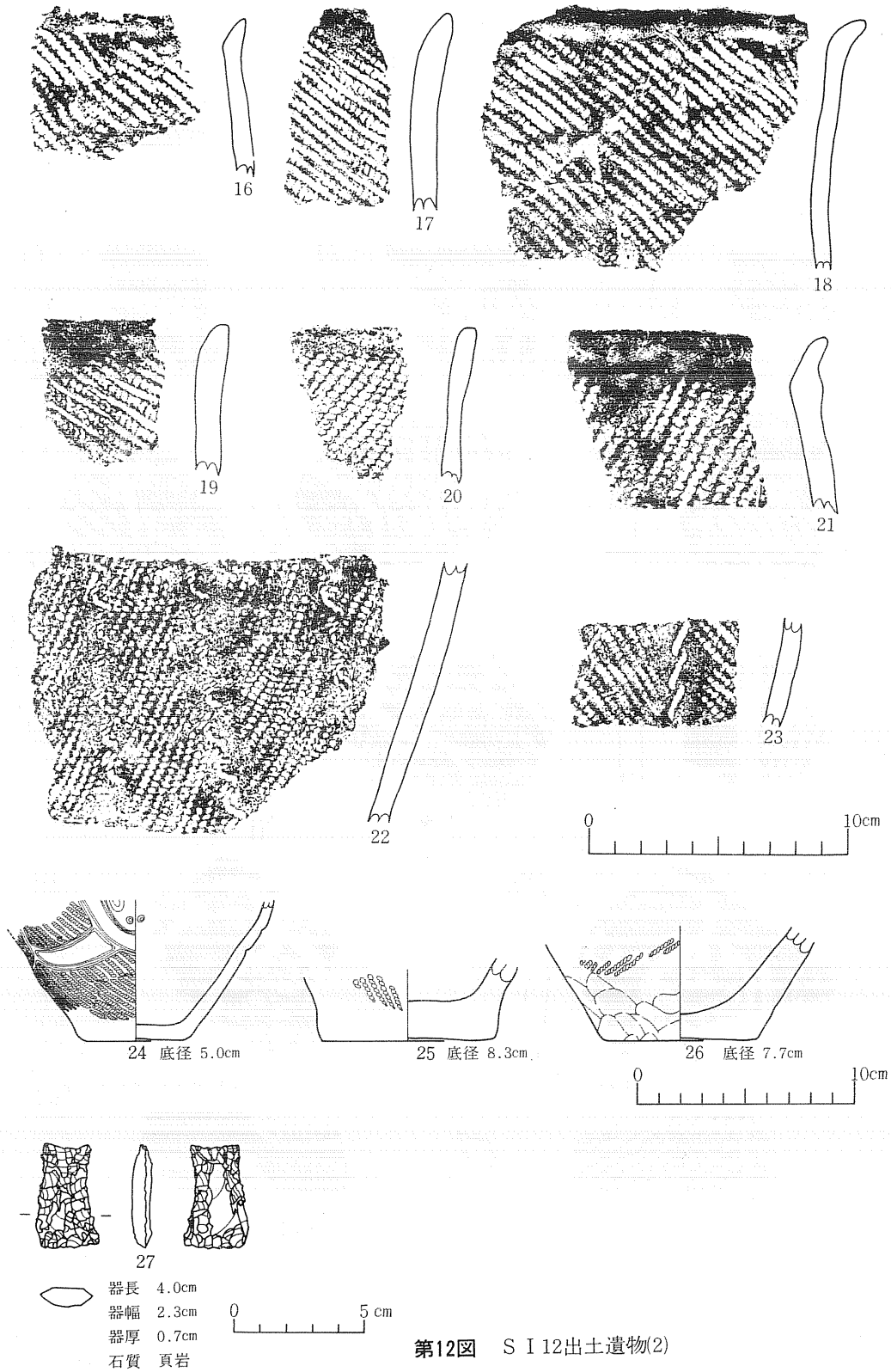
柱穴：ＳＩ14も含めて４個の柱穴が検出されたが、このうちＰ４は本遺構の柱穴で深さ37cm



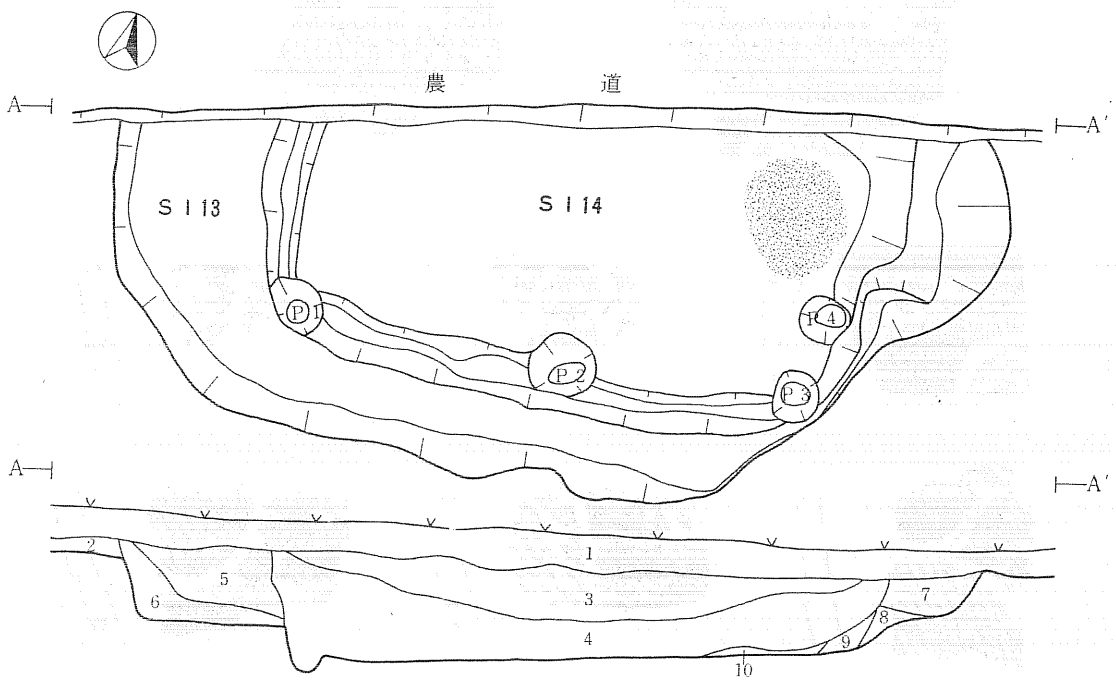
第10図　ＳＩ11出土遺物



第11図　ＳＩ12出土遺物(1)



第12図　ＳＩ12出土遺物(2)



1　黒褐色（10ＹＲ2/3）農　道
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）褐色土（10ＹＲ4/4）混入
3　黒褐色（10ＹＲ2/2）
4　暗褐色（10ＹＲ3/3）
5　暗褐色（10ＹＲ3/4）
6　褐　色（10ＹＲ4/4）暗オリーブ褐色土(2.5Ｙ3/3）の地山含む
7　暗褐色（10ＹＲ3/4）
8　褐　色（10ＹＲ4/4）
9　暗褐色（10ＹＲ3/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）混入
10　暗褐色（10ＹＲ3/3）焼土混入

0　1 m

第13図　ＳＩ13・14竪穴住居跡

である。

炉：検出されなかった。

遺物：この住居に伴なう遺物はＳＩ14構築時に大部分が取り除かれたものと思われるが、大木10式土器の小破片と、石匙の一部かと考えられるもの及び擦面のある楕円形の石器が出土した。12・13は弥生土器で、本遺構に伴うものではないが覆土から出土した。

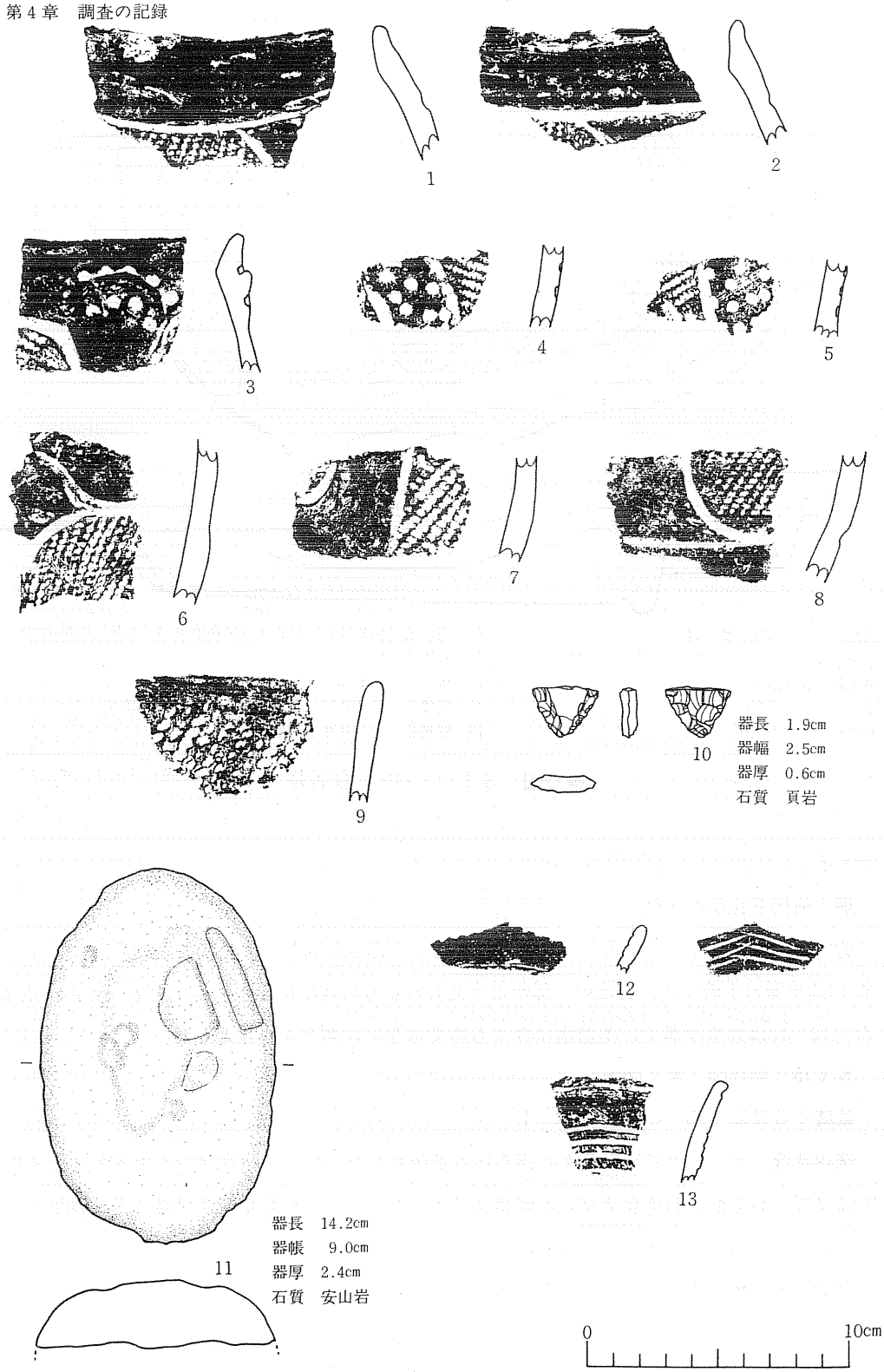
ＳＩ15（第15図、第７図版）

位置：ＯＨ52・53、ＯＩ53グリッド

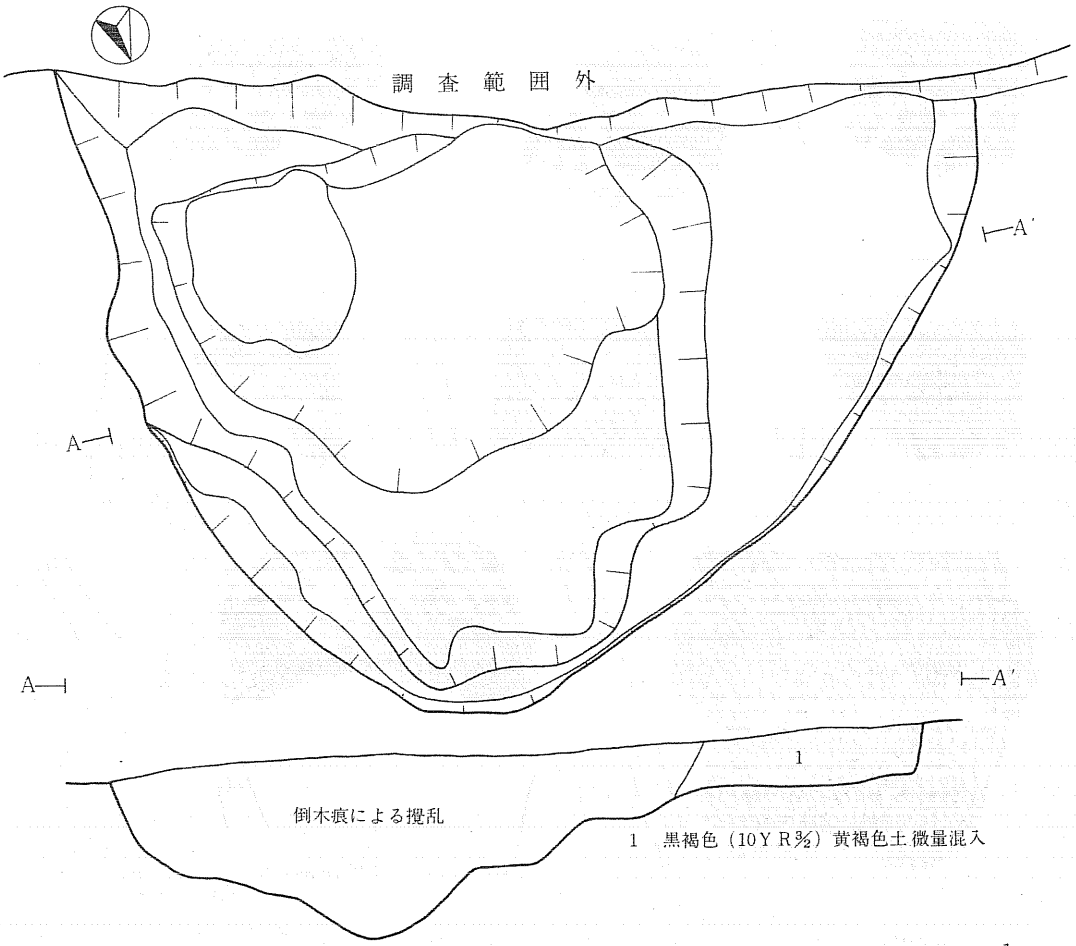
確認状況：地山面上で黒褐色土の落ち込みを確認した。ただし東側半分が倒木痕による破壊を受けているため、明確なプランの確認はできなかった。しかし掘り下げ後の遺構西側の平坦部及び壁、遺物の出土状態から住居跡と判断した。

平面形・規模：南側が調査範囲外に入り込んでいるが、円形ないし楕円形となるものであろう。調査部分の面積は10.6m²である。

床：大部分が破壊されているが、残存部はほぼ平坦である。



第14図　ＳＩ13出土遺物



第15図　ＳＩ15竪穴住居跡

壁：西南部は倒木痕に破壊されているが、残存部はほぼ垂直に立ち上がり、部分的に外方に傾斜している。高さは26～38cmである。

壁溝：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

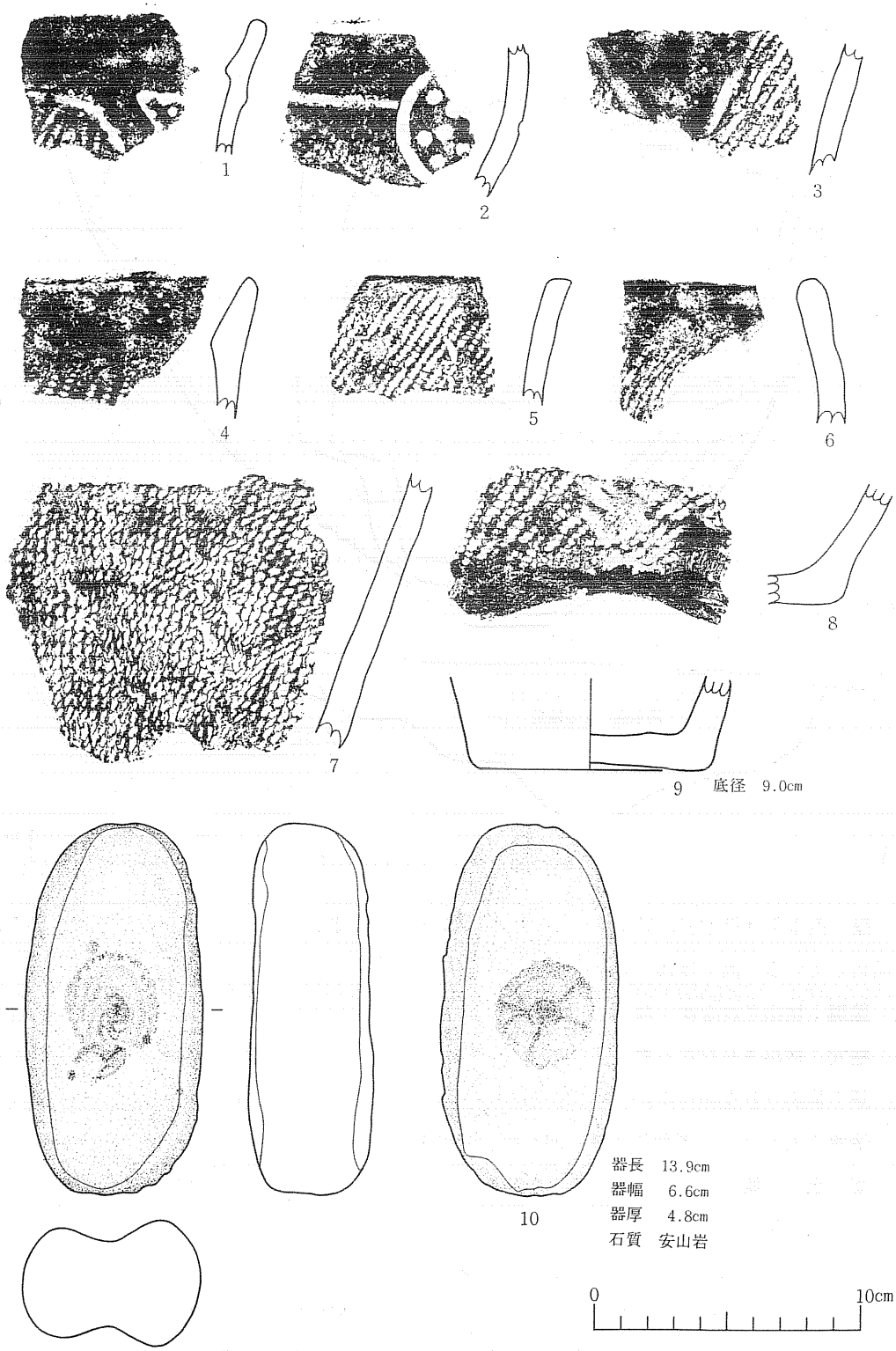
炉：検出されなかった。

遺物：大木10式土器数片の他、凹石が１点出土した。

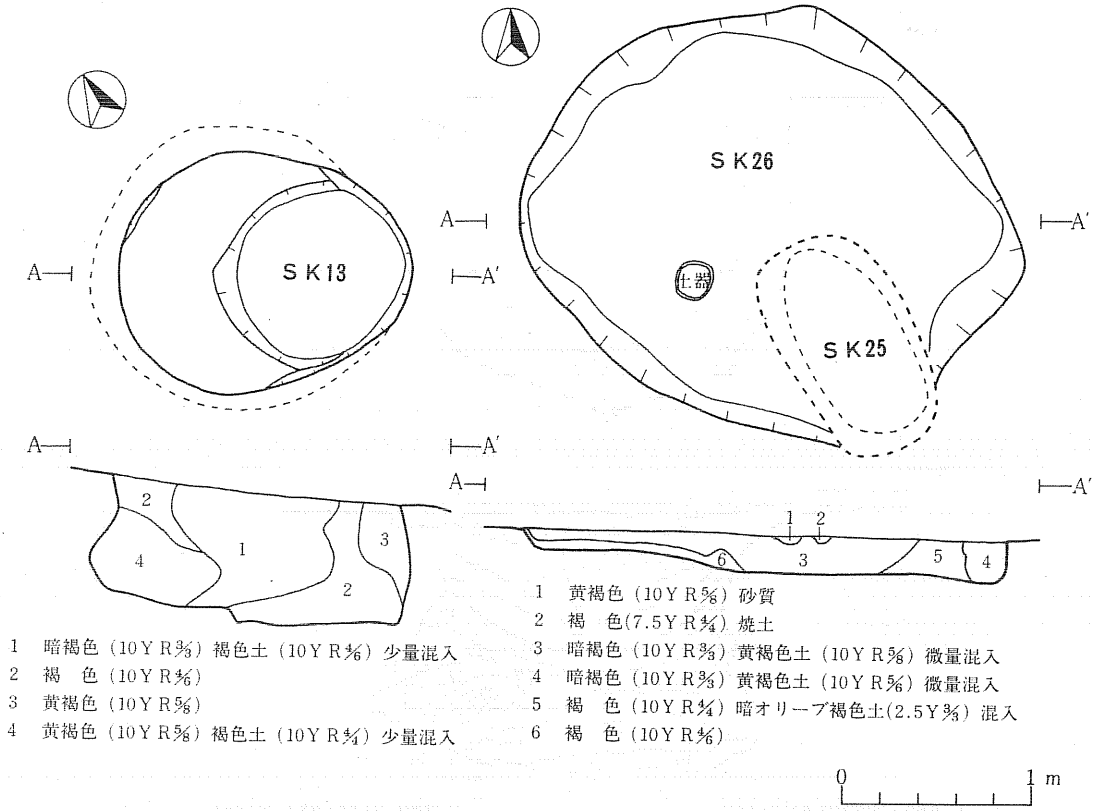
②　土　　壙

ＳＫ13（第17図）

ＯＢ54・ＯＣ54グリッド内の地山面で確認した。口部は長径157cm、短径128cm、底部がわずかに口部よりも内側に入り込む略フラスコ形である。底面はほぼ平坦であるが、南東側が径１ｍほどで５cmほど円形に深くなっている。最深部の深さは68cm、遺物は出土しなかった。



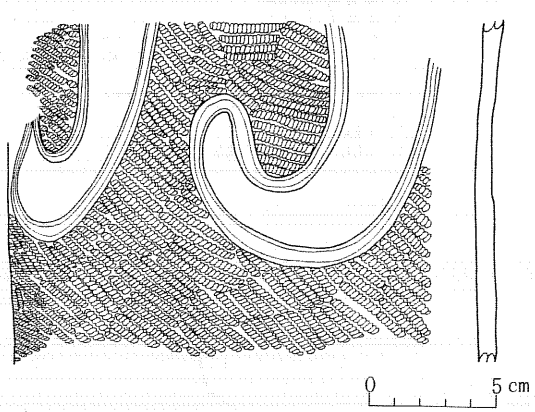
第16図　ＳＩ15出土遺物



第17図　ＳＫ13・26土壙

ＳＫ26（第17図）

ＰＣ55グリッド内の地山面で確認された。長径245cm、短径216cm、深さ10～46cmの楕円形である。底面はかなり凹凸があり、壁は外方に傾斜して立ち上がっている。弥生時代のＳＫ25が重複する底面南西部に、胴部のみの深鉢形土器が埋設されていた。

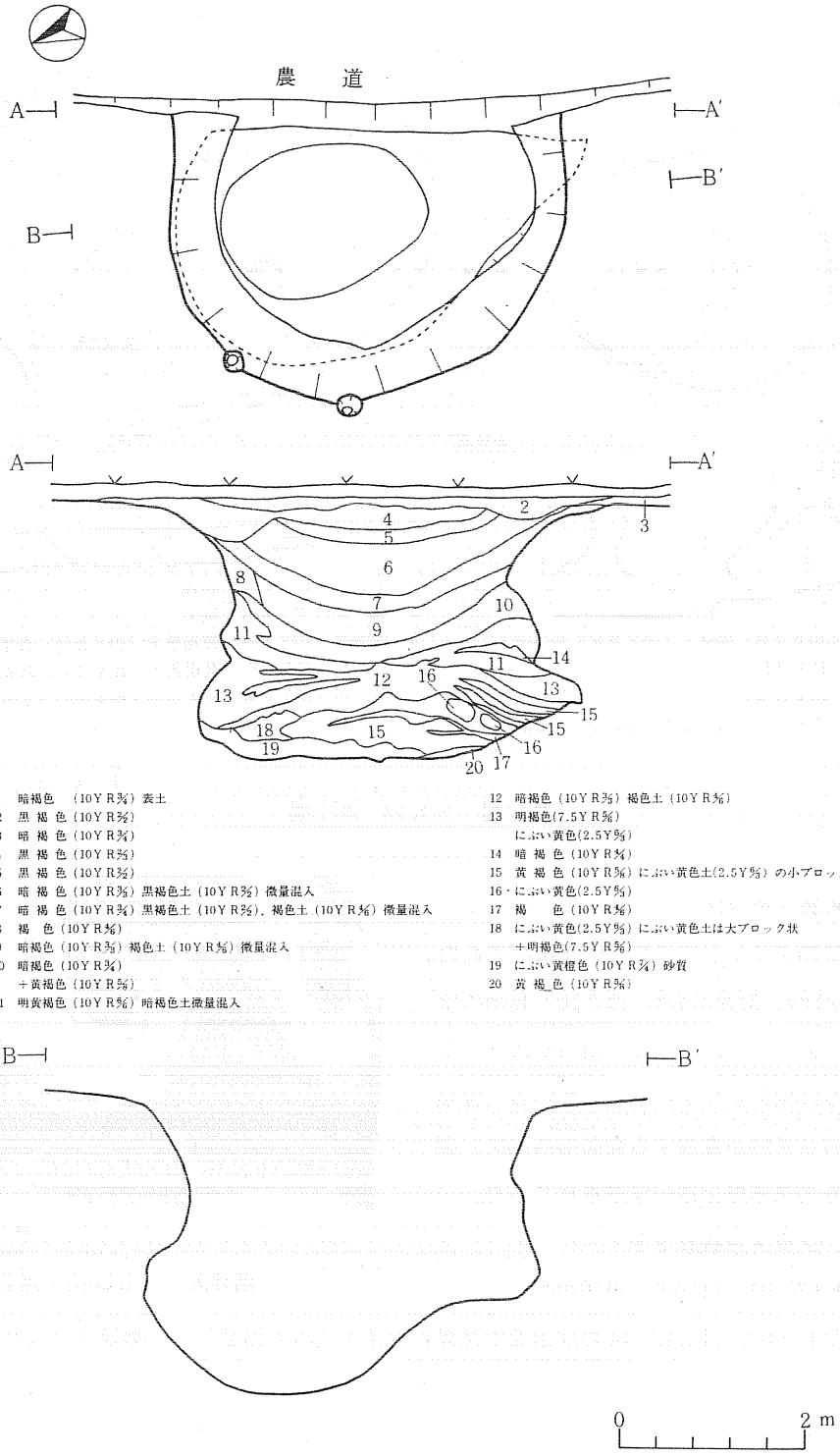


第18図　ＳＫ26出土遺物

③　フラスコ状ピット

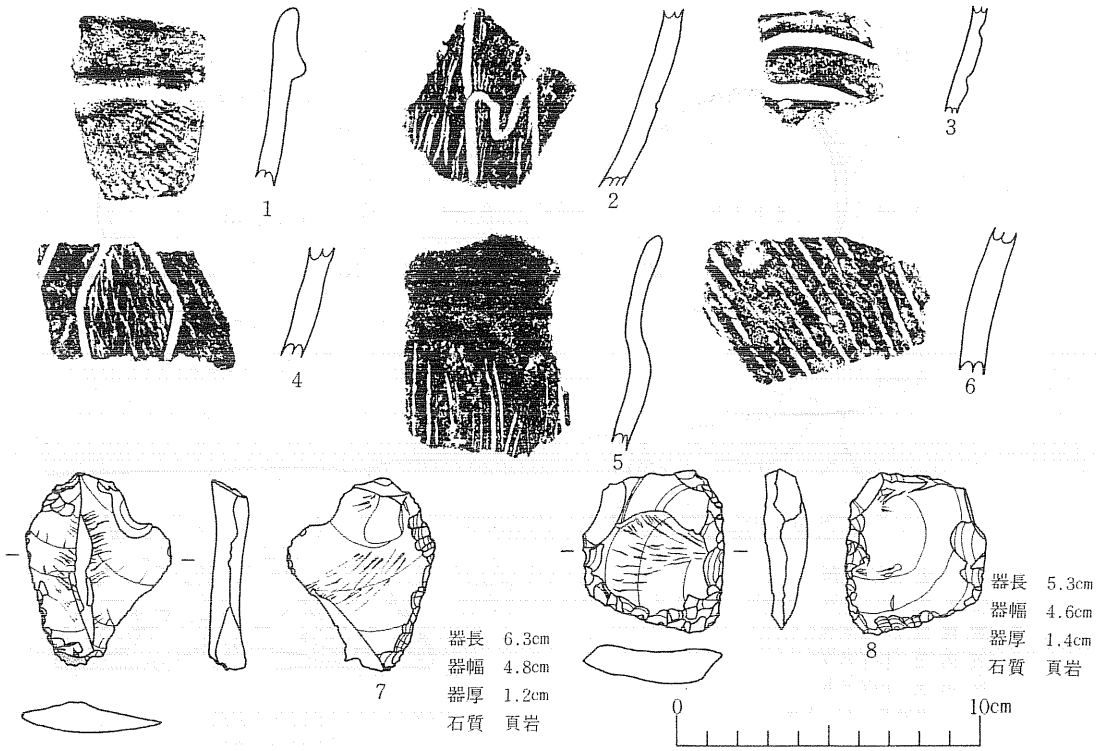
ＳＫ(Ｆ)01（第19図、第10図版）

ＭＤ49・50、ＭＥ49・50の地山面で黒褐色の落ち込みを確認した。農道下に入り込んでいるため全容は不明だが、開口部径420 cm、底部径420 cm、最深部で315 cmあり、底部は擂鉢状を呈し、中央付近が最も深い。確認面より120～140 cm付近に、灰・炭化物層が見られ、投入せられたものと考えられる。土器片少数と石器２点が出土した。



1　暗褐色　（10Ｙ Ｒ3/3）表土
2　黒 褐 色（10Ｙ Ｒ3/2）
3　暗 褐 色（10Ｙ Ｒ3/3）
4　黒 褐 色（10Ｙ Ｒ3/2）
5　黒 褐 色（10Ｙ Ｒ3/2）
6　暗 褐 色（10Ｙ Ｒ3/3）黒褐色土（10Ｙ Ｒ2/2）微量混入
7　暗 褐 色（10Ｙ Ｒ3/4）黒褐色土（10Ｙ Ｒ2/2）、褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）微量混入
8　褐　色（10Ｙ Ｒ4/6）
9　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）微量混入
10　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）
　＋黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）
11　明黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）暗褐色土微量混入
12　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/3）褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）
13　明褐色(7.5Ｙ Ｒ5/6)
　にぶい黄色(2.5Ｙ9/4)
14　暗 褐 色（10Ｙ Ｒ3/4）
15　黄 褐 色（10Ｙ Ｒ5/6）にぶい黄色土(2.5Ｙ9/3）の小ブロック混入
16・にぶい黄色(2.5Ｙ9/3)
17　褐　　色（10Ｙ Ｒ4/6）
18　にぶい黄色(2.5Ｙ9/3）にぶい黄色土は大ブロック状
　＋明褐色(7.5Ｙ Ｒ5/6)
19　にぶい黄橙色（10Ｙ Ｒ7/4）砂質
20　黄 褐 色（10Ｙ Ｒ5/6）

第19図　ＳＫ(Ｆ)01フラスコ状ピット



第20図　ＳＫ(Ｆ)01出土遺物

ＳＫ(Ｆ)02（第21図、第10図版）

ＯＢ53・54グリッドの地山面で確認したが、確認面では中央部が褐色、その周囲が暗褐色のドーナツ状に見られた。開口部径113 cm、頸部107 cm、底部129 cm、深さ54～68cm、底面が平坦で、底部が最も広いフラスコ状となっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ(Ｆ)03（第21図、第11図版）

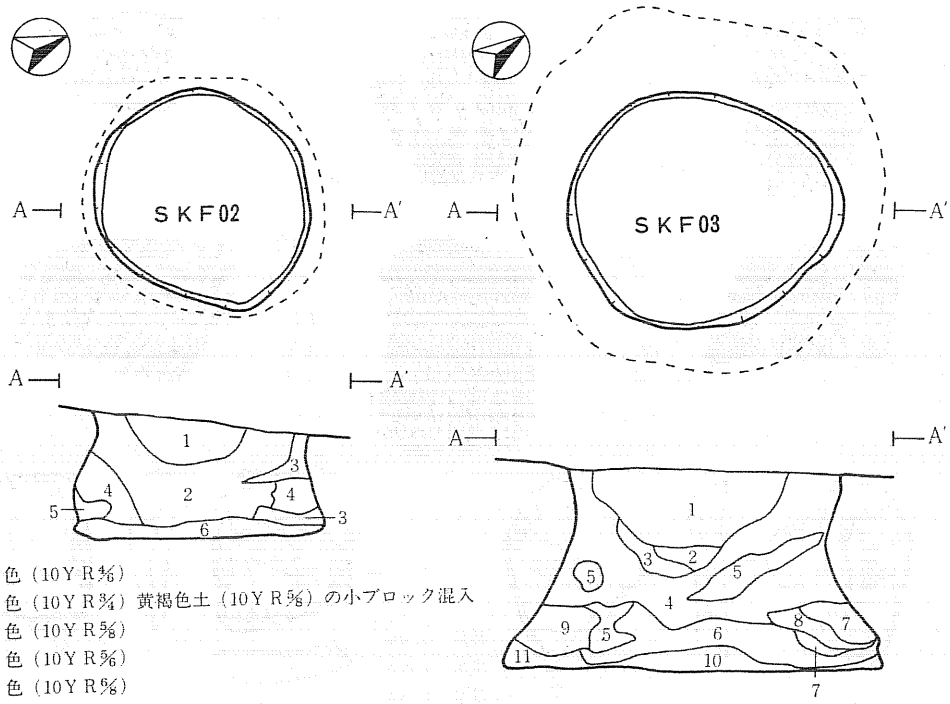
ＯＣ53・54グリッド内の地山面でＳＫＦ02と同様ドーナツ状に遺構を確認した。開口部146 cm、頸部136 cm、底部201 cm、深さ106 cmで、底部は平坦である。深鉢形土器の破片と打製石斧が１点出土した。

ＳＫ(Ｆ)04（第23図、第11図版）

ＯＥ52グリッド内の地山面で確認した。開口部径170 cm、頸部143 cm、底部190 cm、深さは153 cmあり、平坦な底部から丸みをもった立ち上がりを有する。覆土内から土器片と、小形の土偶が出土した。

ＳＫ(Ｆ)05（第23図、第11図版）

ＰＣ54内にある平安時代のＳＩ09北側壁面、及び床面上で確認した。開口部、頸部は切られており不明であるが、底部は130 cmを測る。底面は平坦で、丸みをもった立ち上がりを示す。遺物は出土しなかった。

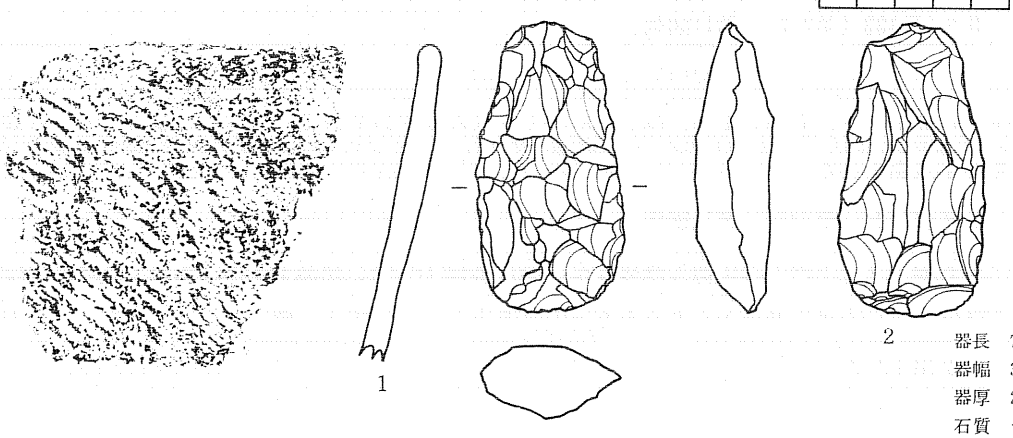


1　褐　　色（10Ｙ Ｒ4/6）
2　暗 褐 色（10Ｙ Ｒ3/4）黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/6）の小ブロック混入
3　黄 褐 色（10Ｙ Ｒ5/6）
4　黄 褐 色（10Ｙ Ｒ5/6）
5　明 褐 色（10Ｙ Ｒ5/8）
6　にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ5/4）

1　黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）砂質、にぶい黄橙色土（10Ｙ Ｒ6/4）と褐色土（10Ｙ Ｒ3/4）の小ブロック混入
2　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/6）少量混入
3　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）
4　褐　色（10Ｙ Ｒ4/4）
5　黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）褐色土（10Ｙ Ｒ4/4）混入
6　褐　色（10Ｙ Ｒ4/4）黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/6）混入
7　黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）
8　褐　色（10Ｙ Ｒ4/4）黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/6）混入
9　黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）砂質
10　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）
11　黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）砂質

第21図　ＳＫ(Ｆ)02・03フラスコ状ピット

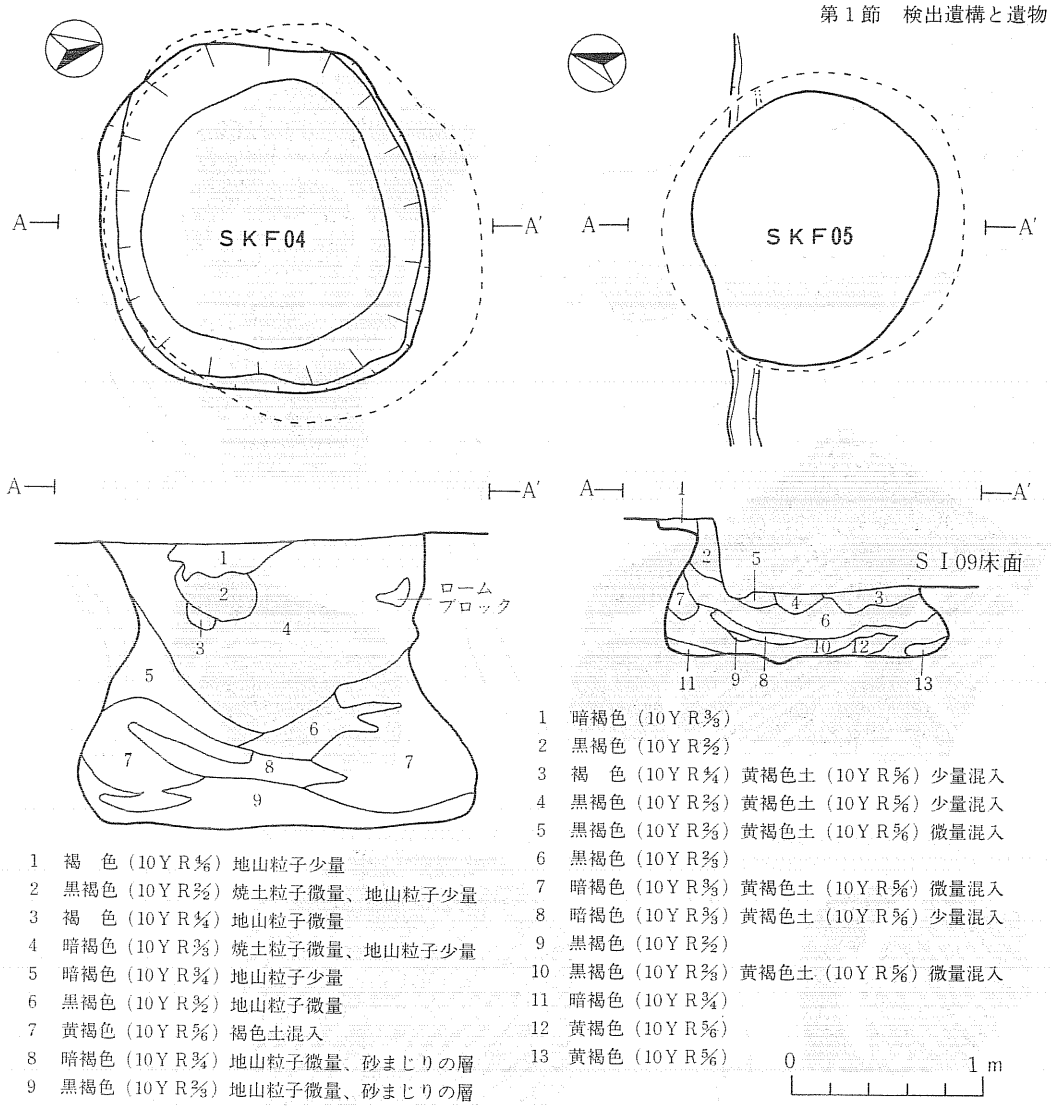
0　1 m



器長　7.7cm
器幅　3.8cm
器厚　2.0cm
石質　チャート

0　5 cm

第22図　ＳＫ(Ｆ)03出土遺物



第23図　ＳＫ(Ｆ)04・05フラスコ状ピット

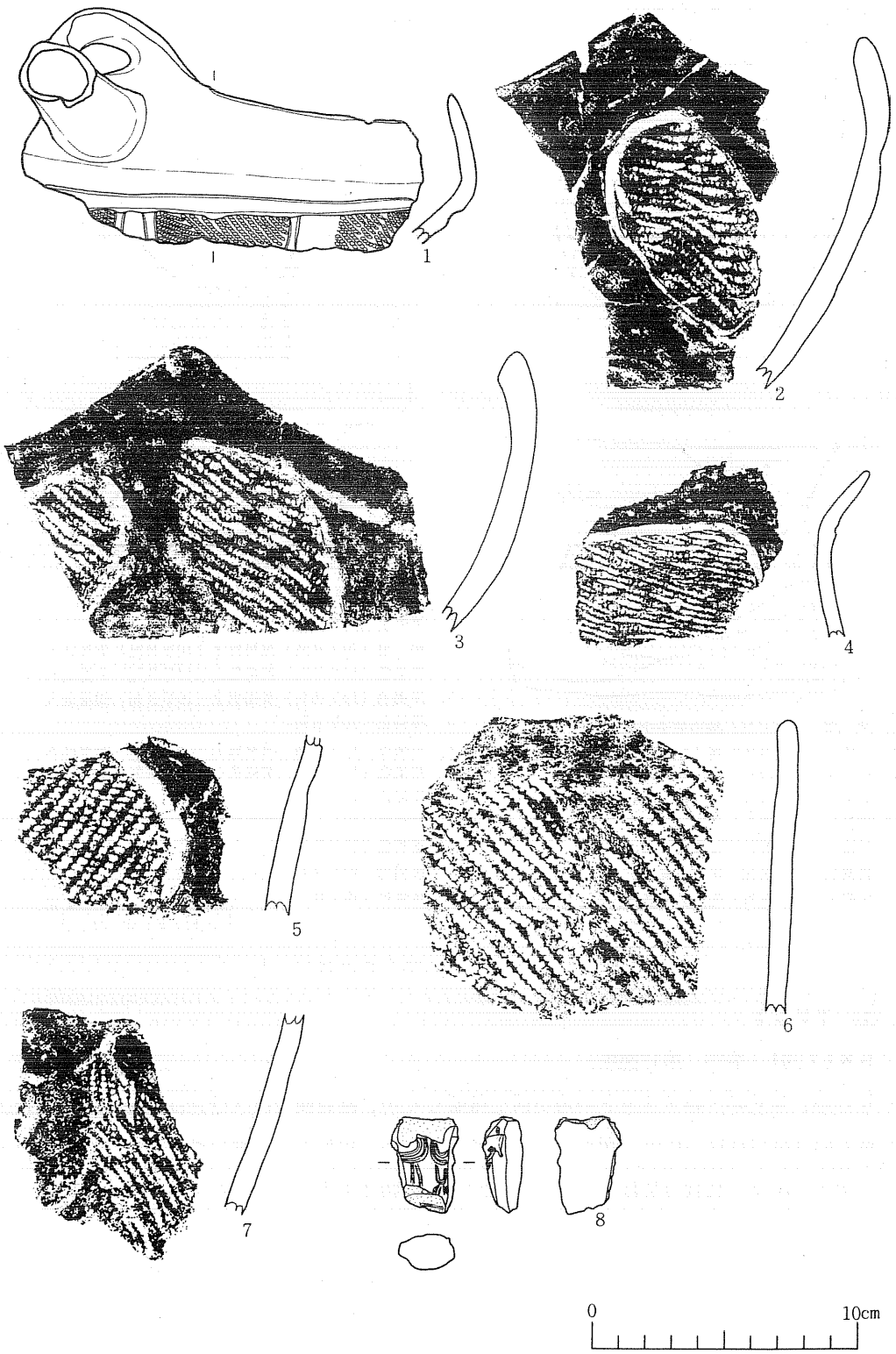
④　Ｔピット

ＳＫ(Ｔ)01（第25、第12図版）

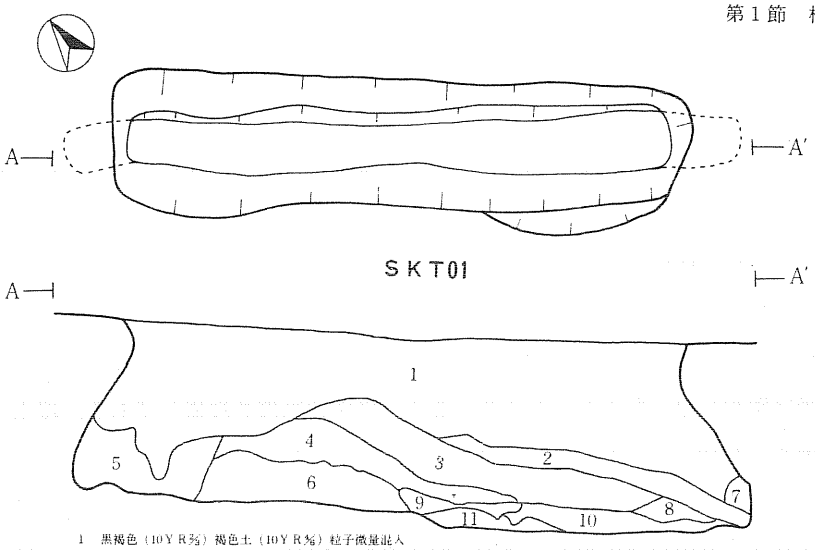
ＫＥ43、ＫＦ43・44グリッドの地山面で確認したが、確認面ではプランは不明瞭であった。長軸方向は開口部径 301 cm、頸部 286 cm、底部 357 cm、短軸方向は開口部径67cm、底部21cmあり、深さ 101 cm、長軸方位はＮ―51°―Ｗである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ(Ｔ)02（第25図、第12図版）

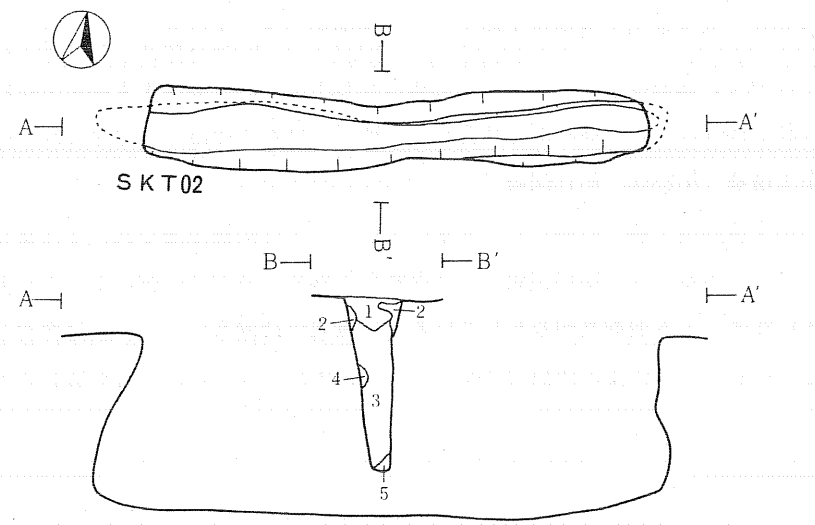
ＰＣ・ＰＤ55グリッドの地山面で確認した。長軸の開口部径265cm、頸部272cm、底部296cm、短軸の開口部径31cm、底部10cm、深さは95cmで、長軸方位はＮ―87°―Ｅである。底面は平坦であるが、両端がやや浅くなりながら丸みを帯びて長軸方向に張り出している。遺物は出土せず。



第24図　ＳＫ(Ｆ)04出土遺物



1　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/3）褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）粒子微量混入
2　褐　色（10Ｙ Ｒ4/4）
3　褐　色（10Ｙ Ｒ4/4）
4　褐　色（10Ｙ Ｒ4/6）
5　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）
　＋褐色（10Ｙ Ｒ4/6）
　＋にぶい黄色(2.5Ｙ6/4)
6　にぶい黄色(2.5Ｙ6/4) 褐色土（10Ｙ Ｒ4/4）微量混入
7　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）
　＋褐色（10Ｙ Ｒ4/6）
8　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/3）褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）微量混入
9　褐　色（10Ｙ Ｒ4/4）
　＋にぶい黄橙色（10Ｙ Ｒ6/4）
10　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）褐色土、暗褐色土微量混入
11　黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）暗褐色土微量混入



1　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）地山粒子微量
2　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/3）地山粒子微量
3　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）地山粒子微量
4　褐　色（10Ｙ Ｒ4/6）地山粒子微量
5　黒　色（10Ｙ Ｒ2/1）地山粒子微量

0　1 m

第25図　ＳＫ(Ｔ)01・02Ｔピット

⑤　屋外炉

遺構周辺にピット等がなく屋外施設と考えられ、掘り方内に深鉢形土器などの土器を埋設し、火を使用した形跡のある遺構である。ＳＮ07は焼土はほとんど見られなかったが、形態的にはＳＮ05・06と同一であるので屋外炉と見なした。

ＳＮ05（第26図、第11図版）

ＯＦ54グリッドの地山面で焼土を含んだ暗褐色の不整楕円形のプランと埋設土器を確認した。長軸 189 cm、短軸 115 cm、深さは最深部で34cmである。しっかりした掘り方ではなく、底面に凹凸があり、壁は緩やかな立ち上がりを示す。この中に深鉢胴部を埋置してある。埋土中に焼土が全体的に散在して認められた。

ＳＮ06（第27図、第11図版）

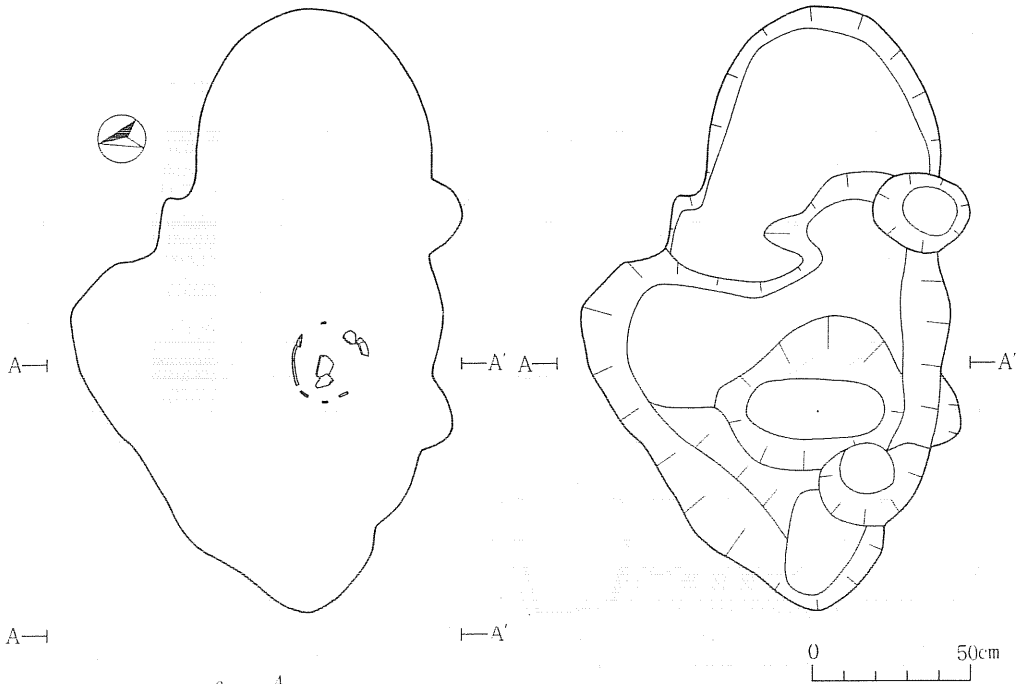
ＯＨ・ＯＩ55グリッド内の地山面で、埋設土器を伴なう暗褐色の楕円形のプランを確認した。長軸 118 cm、短軸46cm、深さ12～30cmで、平面では中央部がわずかにくびれている。底面は凹凸があり、壁の立ち上がりも整然としていない。この北側に深鉢形土器を埋置している。土器は口縁・底部を欠く。土器内埋土中に石鏃が１点含まれていた。焼土は埋土下層ほど多く、５cmほどの大きさの炭化物が含まれている。

ＳＮ07（第27図、第11図版）

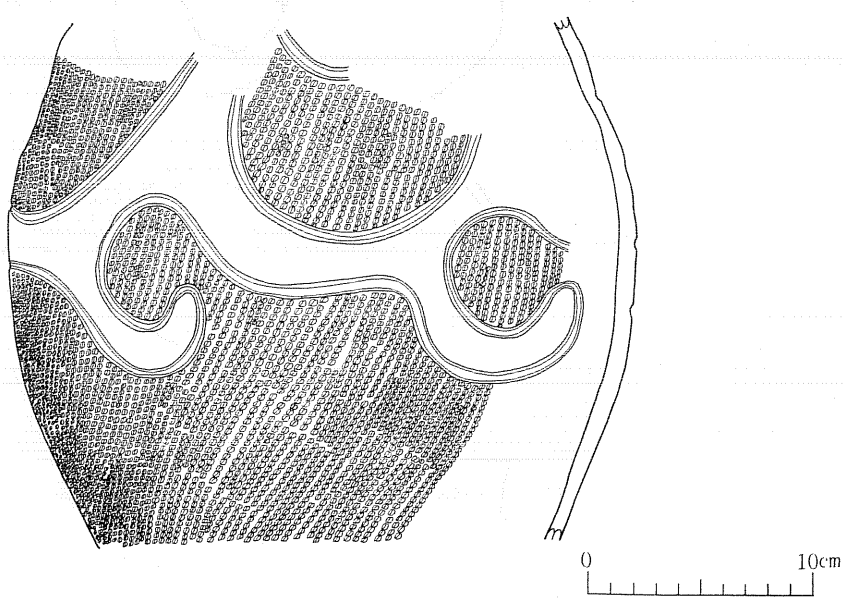
ＰＣ・ＰＤ54グリッドの地山面で埋設土器を有する楕円形プランを確認した。長軸 102 cm、短軸50cm、深さ37cmで、底面は平坦、壁はやや急激に立ち上がる。平面は中央部がくびれており、この東側に高さ10cmほどの土器胴部を埋置する。埋土には焼土はほとんど含まれていない。

(2)　遺構外出土遺物（第28図、第15図版）

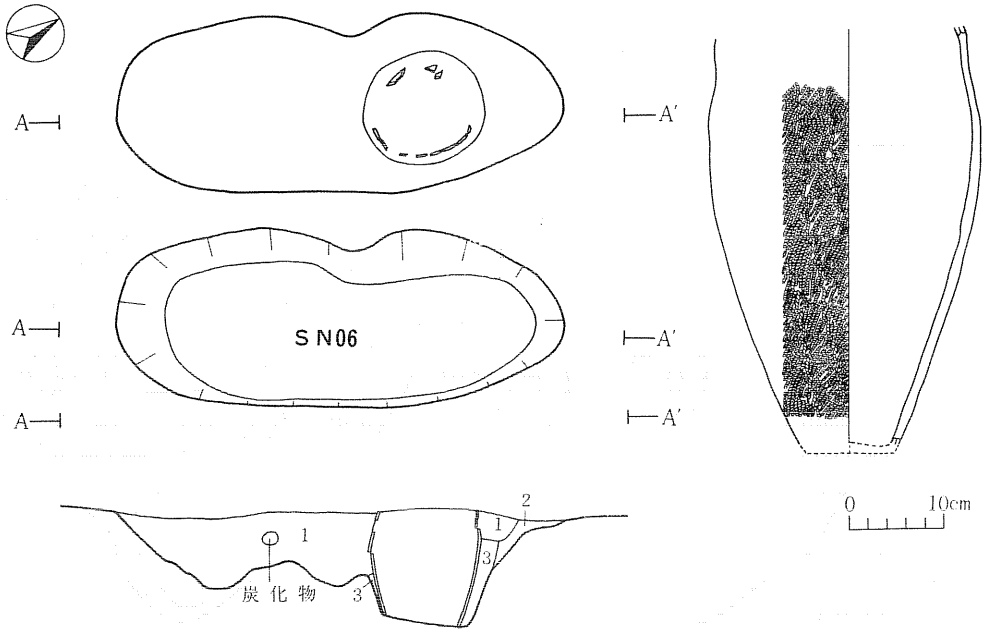
遺構外からの出土遺物は土器、石器ともに非常に少ない。１は円筒上層Ｃ式、４は葉脈状文の施された大木10式である。５（第15図版６）は深鉢形土器で、地文には細い撚糸文を縦走させ、この上に太い沈線による曲線文が描かれている。口縁部には撚糸はなく、山形突起からＳ字状文が垂下している。太平洋側の門前式に後続するものであろう。石器では磨製石斧、敲痕のある凹石などが出土した。



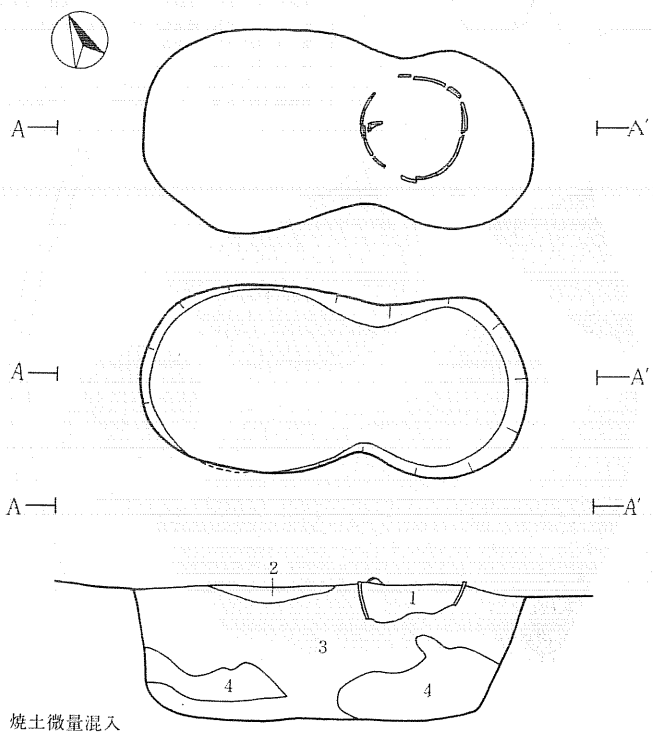
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）焼土微量混入
2　黒褐色（10ＹＲ3/2）暗褐色土（10ＹＲ3/4）多量、黄褐色土（10ＹＲ5/6）微量、焼土微量混入
3　褐　色（10ＹＲ4/4）暗褐色土（10ＹＲ3/4）多量混入
4　褐　色（10ＹＲ4/6）焼土混入
5　褐　色（10ＹＲ4/4）
6　褐　色（10ＹＲ4/4）焼土微量混入
7　黄褐色（10ＹＲ5/6）ブロック状の暗オリーブ褐色土(2.5Ｙ3/3）微量、焼土微量混入



第26図　ＳＮ05屋外炉

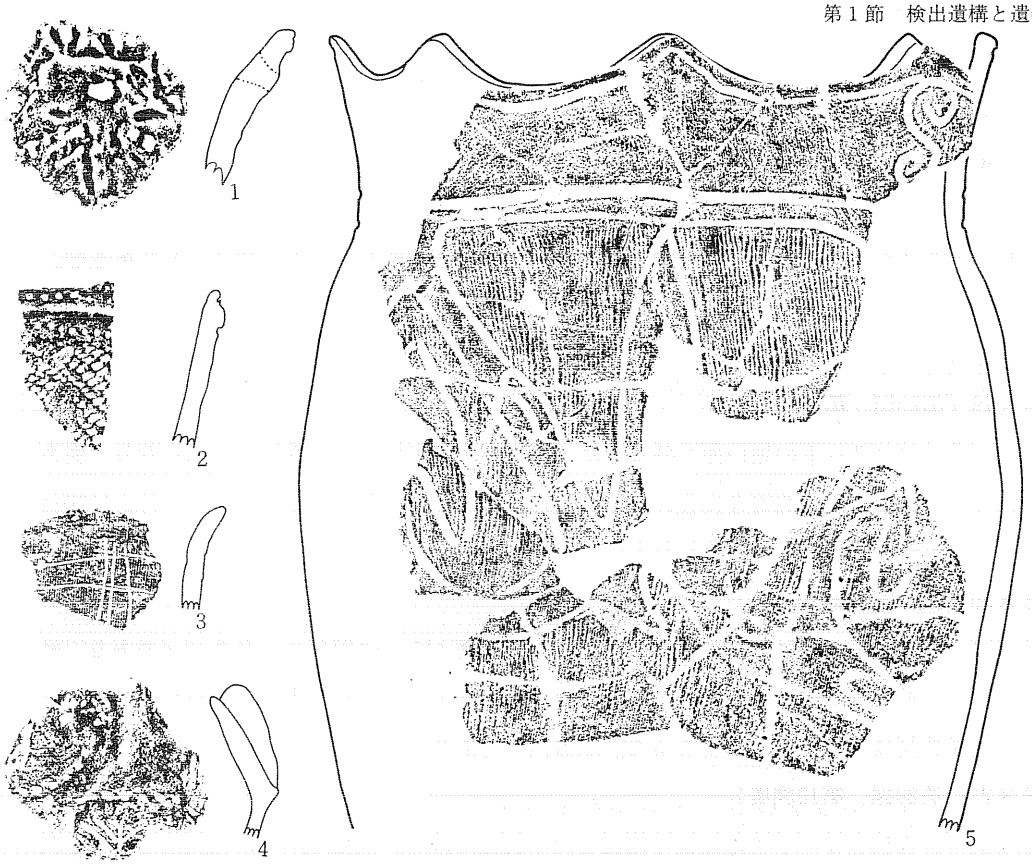


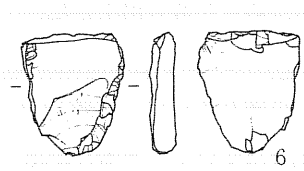
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）赤褐色土(2.5ＹＲ4/8）の焼土少量混入
2　褐　色（10ＹＲ4/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）少量、焼土少量混入
3　明褐色(7.5ＹＲ5/6）焼土混入



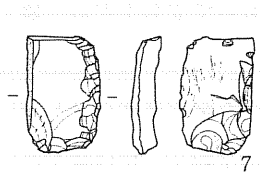
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）焼土微量混入
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）褐色土（10ＹＲ4/4）微量混入
3　褐　色（10ＹＲ4/4）
4　暗オリーブ褐色土(2.5Ｙ3/3）

第27図　ＳＮ06・07屋外炉

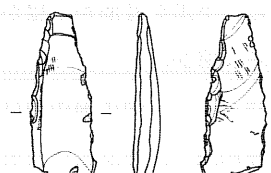




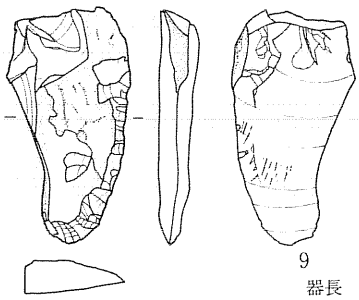
器長　4.8cm
器幅　3.9cm
器厚　1.0cm
石質　頁岩



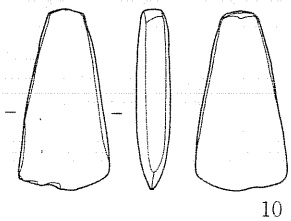
器長　4.5cm
器幅　2.9cm
器厚　1.0cm
石質　頁岩



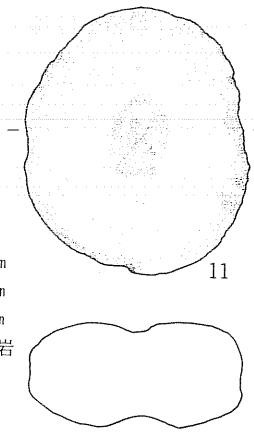
器長　6.5cm
器幅　2.4cm
器厚　1.0cm
石質　頁岩



器長　9.3cm
器幅　4.9cm
器厚　1.5cm
石質　頁岩



器長　7.2cm
器幅　3.6cm
器厚　1.4cm
石質　凝灰岩



器長　10.5cm
器幅　8.9cm
器厚　4.2cm
石質　花崗岩

0　10cm

第28図　遺構外出土遺物(縄文)

２．弥生時代

(1)　遺構と遺構内出土遺物

①　土　　壙

ＳＫ16（第29図、第９図版）

ＯＥ52・53グリッドの地山面で確認した。径130cmほどの円形で、深さ20cmほどであるが、底面中央部に径20cm、底面からの深さ16cmのピットが見られる。他は平坦で壁はやや外方に傾斜して立ち上がる。土器片が埋土中から出土した。

ＳＫ19（第29図、第９図版）

ＯＦ・ＯＧ54グリッドの地山面で確認した。径142cmの円形で、深さ６～11cmを測る。底面は平坦で、中央よりやや北寄りに径33cm、深さ15cmのピットがある。壁は低くやや外方に傾斜している。土器片が埋土より出土した。

ＳＫ20（第29図、第10図版）

ＯＩ55・56グリッド内にあり、地山面で確認した。径145cmの円形で、深さ60cmである。底面は平坦で、壁が若干内傾して立ち上がるフラスコ形を呈する。覆土中から土器片が出土し、復元した所約½残存の甕形土器となった。土器内・外面及び断面に稲籾圧痕が７個認められる。

ＳＫ21（第29図、第10図版）

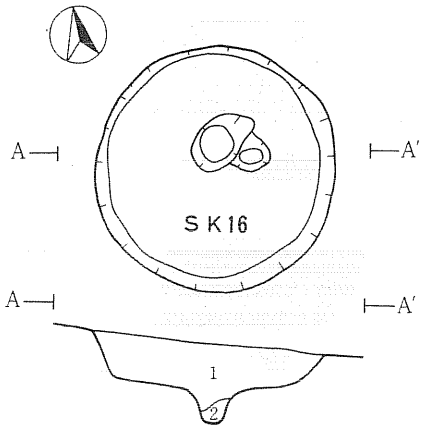
ＯＪ53・ＰＡ53グリッドの地山面で確認した。長径168cm、短径117cmの楕円形で、深さ35cmである。平坦な底面から壁が丸みをもって立ち上がる。覆土内から土器片が数点出土した。

ＳＫ25（第29図）

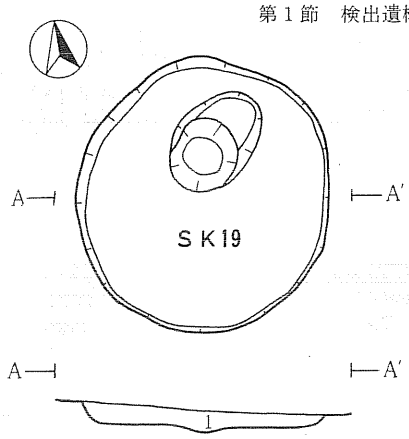
ＰＣ55グリッド内の地山面に構築された縄文時代のＳＫ26に重複して確認された。長径124cm、短径70cm、深さ24cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。土器片が出土した。

(2)　遺構外出土遺物（第31図、第15図版）

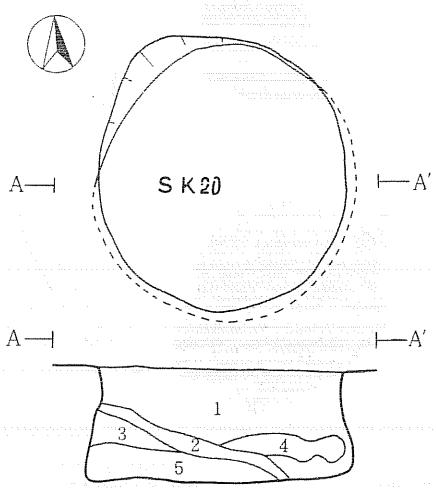
土器のみで、器形には甕・蓋が見られる。器面調整技法として細かな刷毛目を使用し、その後に縄文を施して沈線文、刺突文、刻み目文などの文様を描く。２～５条の横走する平行沈線と鋸歯文を基調とする文様が多い。13の蓋の口唇部には刷毛目工具の圧痕が縦に並列している。



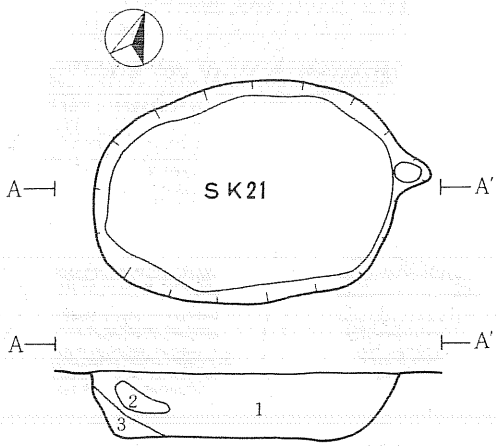
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）黄褐色土（10ＹＲ5/6）微量混入
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）少量混入



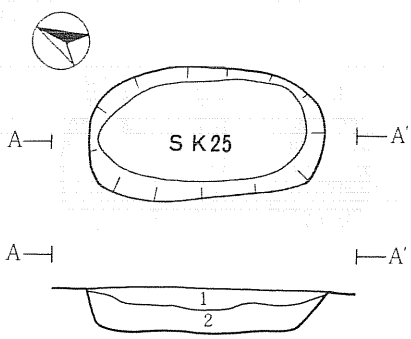
1　褐　色（10ＹＲ4/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）混入



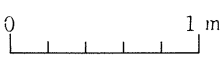
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）少量、黒褐色土（10ＹＲ3/3）微量混入
2　黒褐色（10ＹＲ3/2）黄褐色土（10ＹＲ5/6）少量混入
3　暗褐色（10ＹＲ3/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）少量混入
4　黄褐色（10ＹＲ5/6）褐色土（10ＹＲ4/4）多量混入
5　褐　色（10ＹＲ4/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）、黒褐色土(10ＹＲ3/3）少量混入



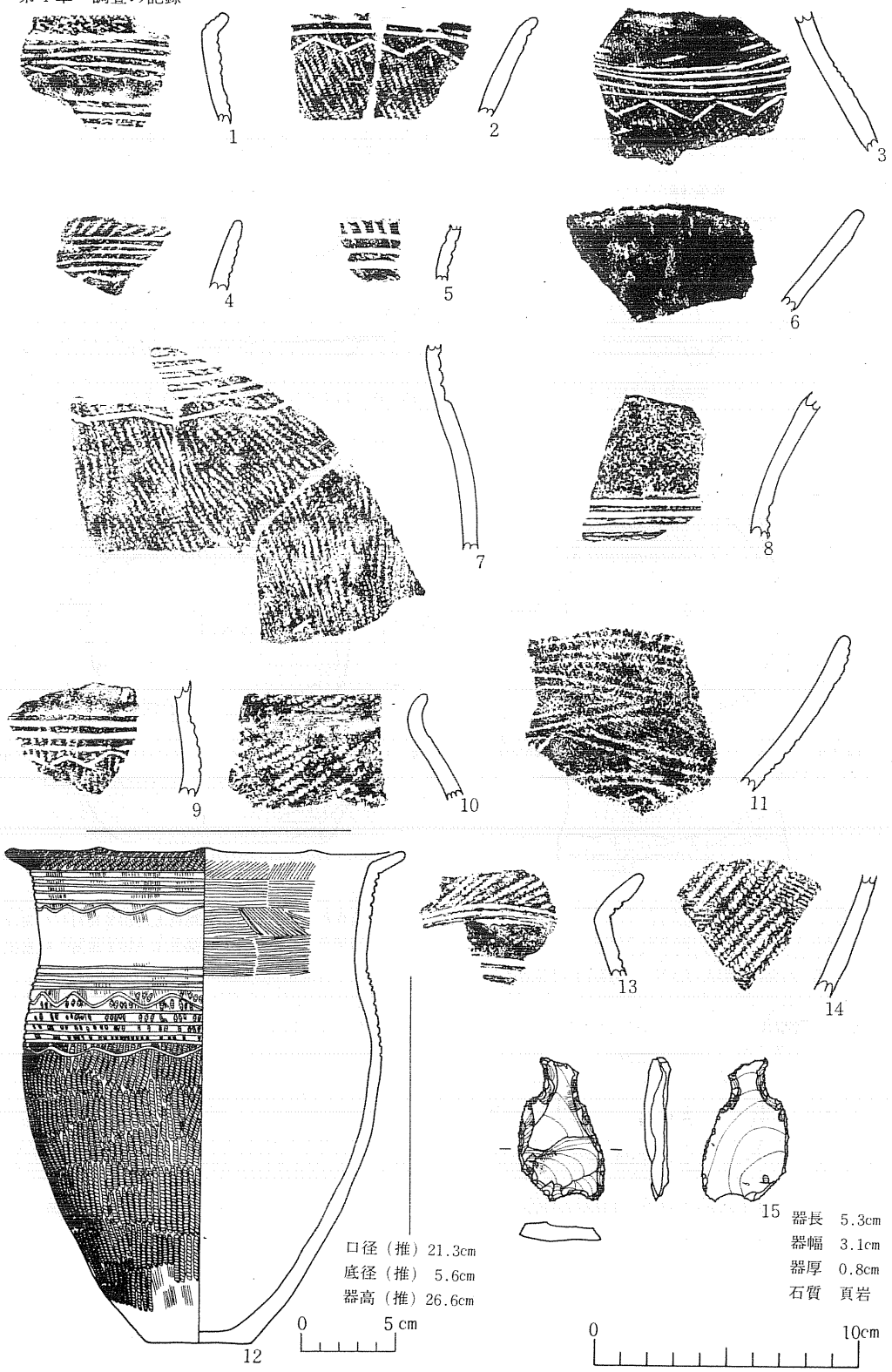
1　褐　色（10ＹＲ4/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）少量混入
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）少量混入
3　暗褐色（10ＹＲ3/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）微量混入



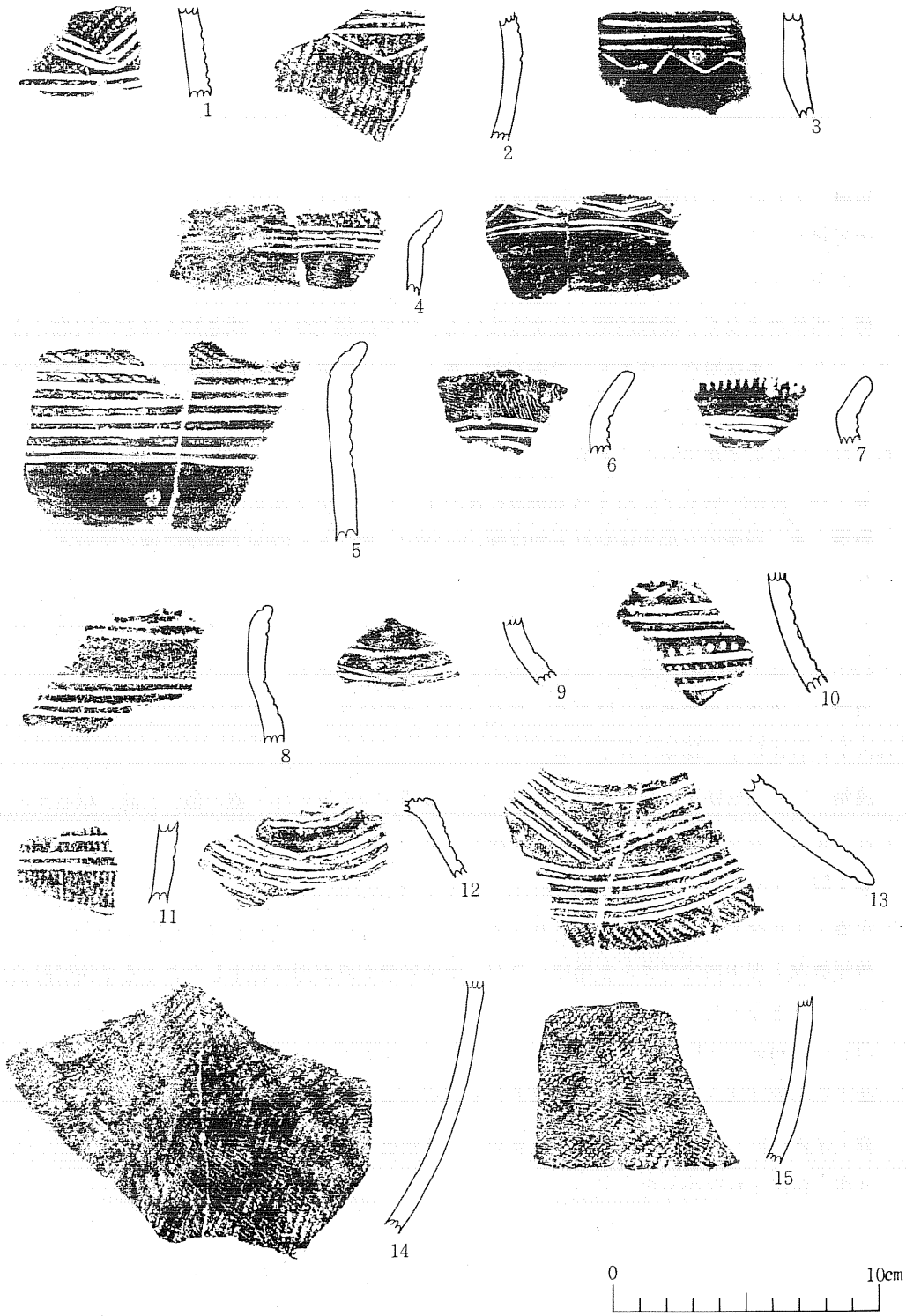
1　黒褐色（10ＹＲ3/3）黄褐色土（10ＹＲ5/6）微量混入、焼土微量
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）黄褐色土（10ＹＲ5/6）微量混入



第29図　ＳＫ16・19・20・21・25土壙



第30図　ＳＫ16･19･20･21･25出土遺物　1～6：ＳＫ16、7・8：ＳＫ19、12：ＳＫ20、9～11：ＳＫ21、13～15：ＳＫ25



第31図　遺構外出土遺物(弥生)

3　平安時代

(1)　遺構と遺構内出土遺物

①　竪穴住居跡

ＳＩ01（第32図、第５図版）

位置：ＩＦ26、ＩＧ26・27、ＩＨ26・27グリッド。

確認状況：地山面上で明確な方形のプランと覆土内の焼土を確認した。

平面形・規模：東壁473㎝、南壁442㎝の方形で、面積は20.5㎡、主軸方位はＮ―33°―Ｗ。

床：凹凸が少なく、比較的堅くしまっている。中央に径260㎝、深さ10㎝ほどの円形の落ち込みがある。本住居跡は焼失家屋であるが、焼土・炭化物層はこの凹み確認面上に水平に堆積しており、凹み中にはほとんど入っていないことから、少くとも家屋焼失時にはこの凹みは埋められていたことが明らかである。

壁：12～27㎝の高さで、いずれも垂直に立ち上がるしっかりとした作りである。

壁溝：東・西壁の一部が途切れる他は幅10～28㎝、深さ５～27㎝で四壁に巡っている。

柱穴：Ｐ１・52㎝、Ｐ２・27㎝、Ｐ３・38㎝、Ｐ４・28㎝、Ｐ５・46㎝、Ｐ６・13㎝、Ｐ７・30㎝、Ｐ８・20㎝、Ｐ９・28㎝、Ｐ10・20㎝、Ｐ11・17㎝、Ｐ12・26㎝、Ｐ13・36㎝、Ｐ14・13㎝、Ｐ15・８㎝の深さで、このうちＰ１～８が柱穴である。

カマド：南壁のやや西寄りにあり、煙道は短く煙出に向かって急激に立ち上がっている。両袖は弱粘質褐色土で構築されている。

遺物：竪穴住居跡中、最も遺物量が多く、土師器・須恵器の坏・甕の他、土錘、砥石が出土した。また、カマド内より炭化米１点が出土した。

ＳＩ02（第35図、第５図版）

位置：ＩＪ28・29、ＪＡ28・29グリッド。

確認状況：地山面でプランを確認したが、土師器甕が確認面で出土したことも本住居跡検出の手がかりとなった。

平面形・規模：西壁411㎝、北壁401㎝の方形で、面積15.8㎡、主軸方位はＮ―25°―Ｗ。

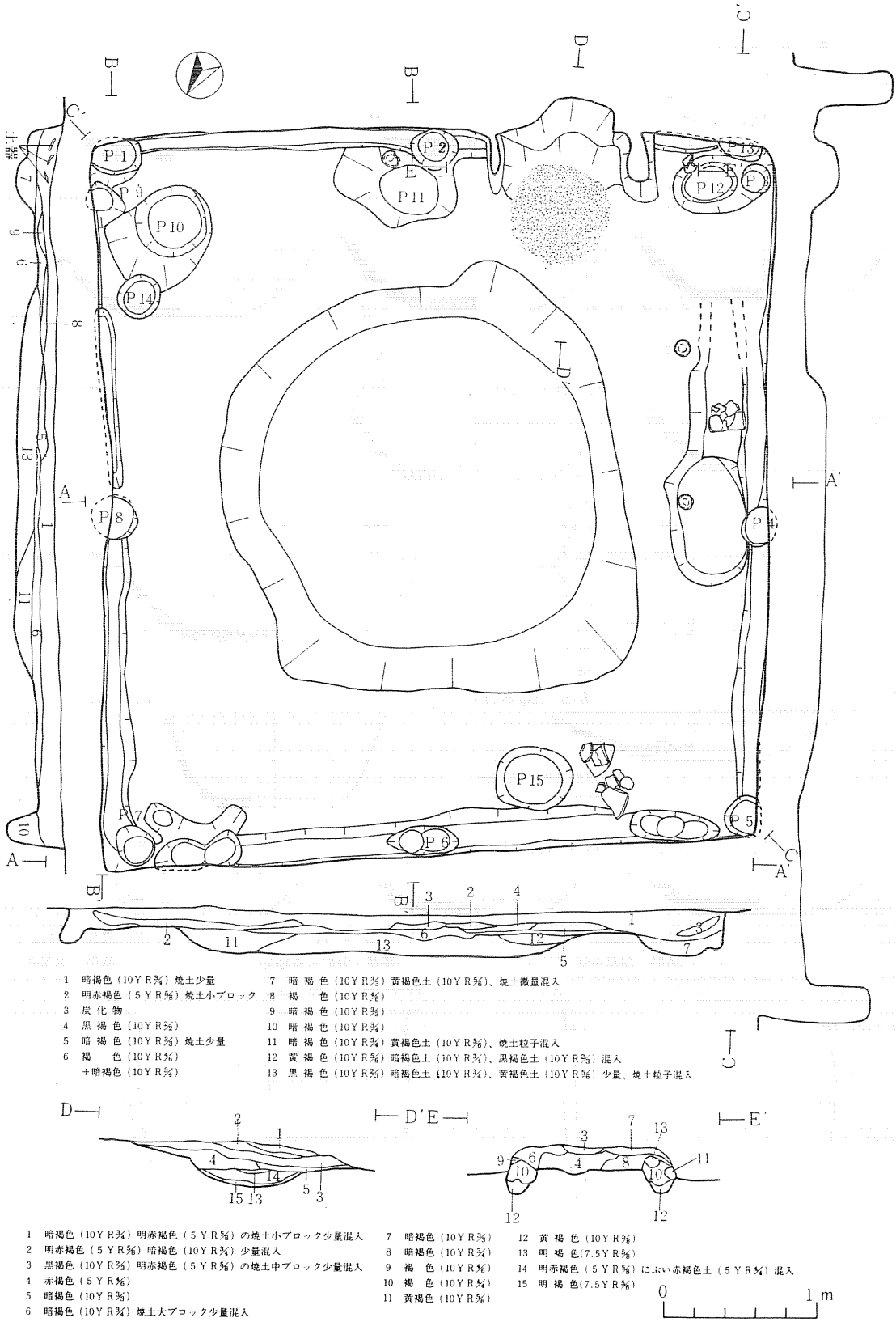
床：中央部は凹凸が少なく非常に堅くしまっているが、壁付近はかなりの凹凸がある。

壁：全体に低く、最高部で15㎝であるが、ほぼ垂直な立ち上がりを示す。

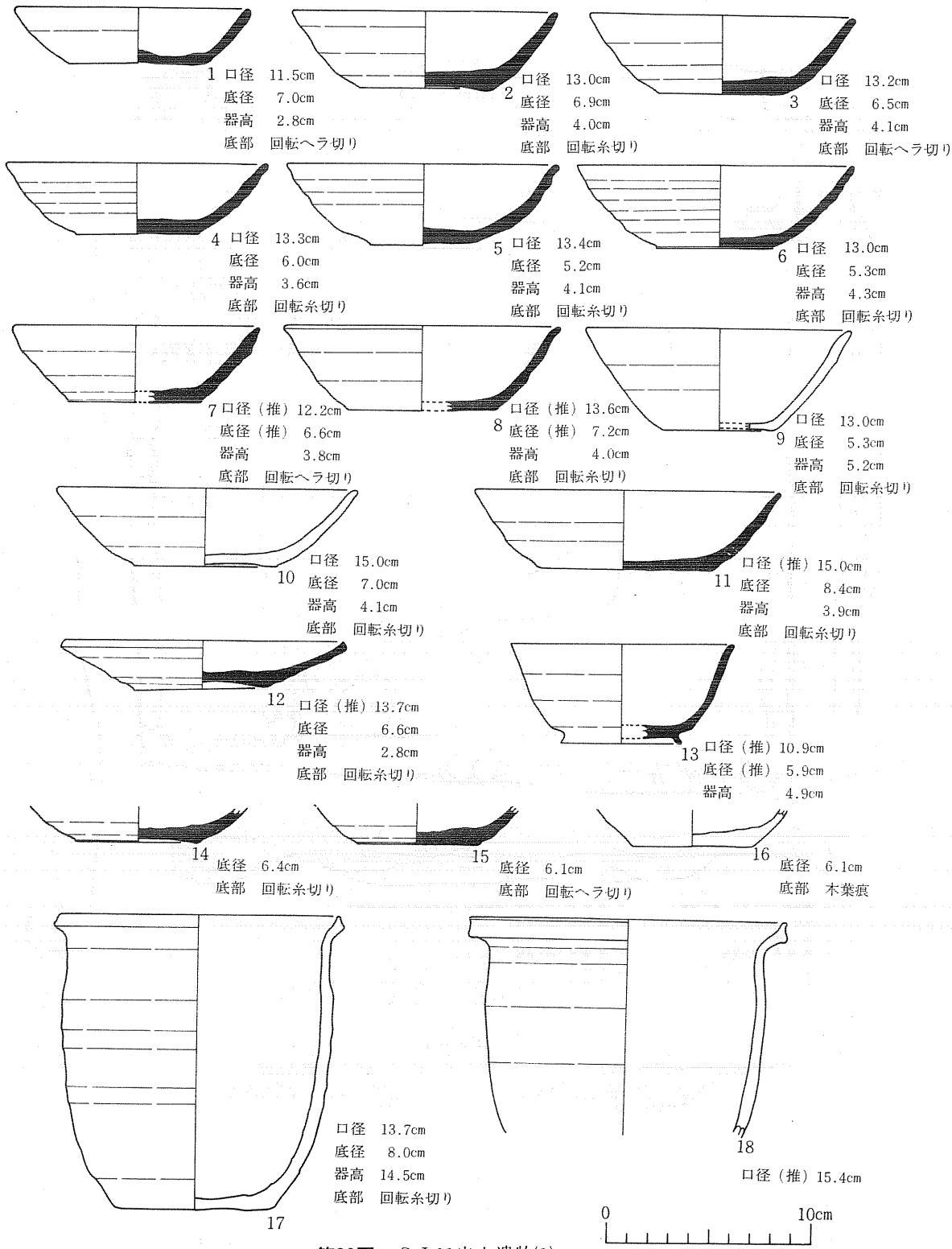
壁溝：検出されなかった。

柱穴：Ｐ１・23㎝、Ｐ２・13㎝、Ｐ３・11㎝、Ｐ４・16㎝、Ｐ５・９㎝、Ｐ６・16㎝、Ｐ７・19㎝、Ｐ８・16㎝、Ｐ９・10㎝、Ｐ10・19㎝、Ｐ11・22㎝、Ｐ12・13㎝の深さで、このうちＰ１・３・６・７・11・12は柱穴と考えられるが、南・北壁中間の柱が不明である。

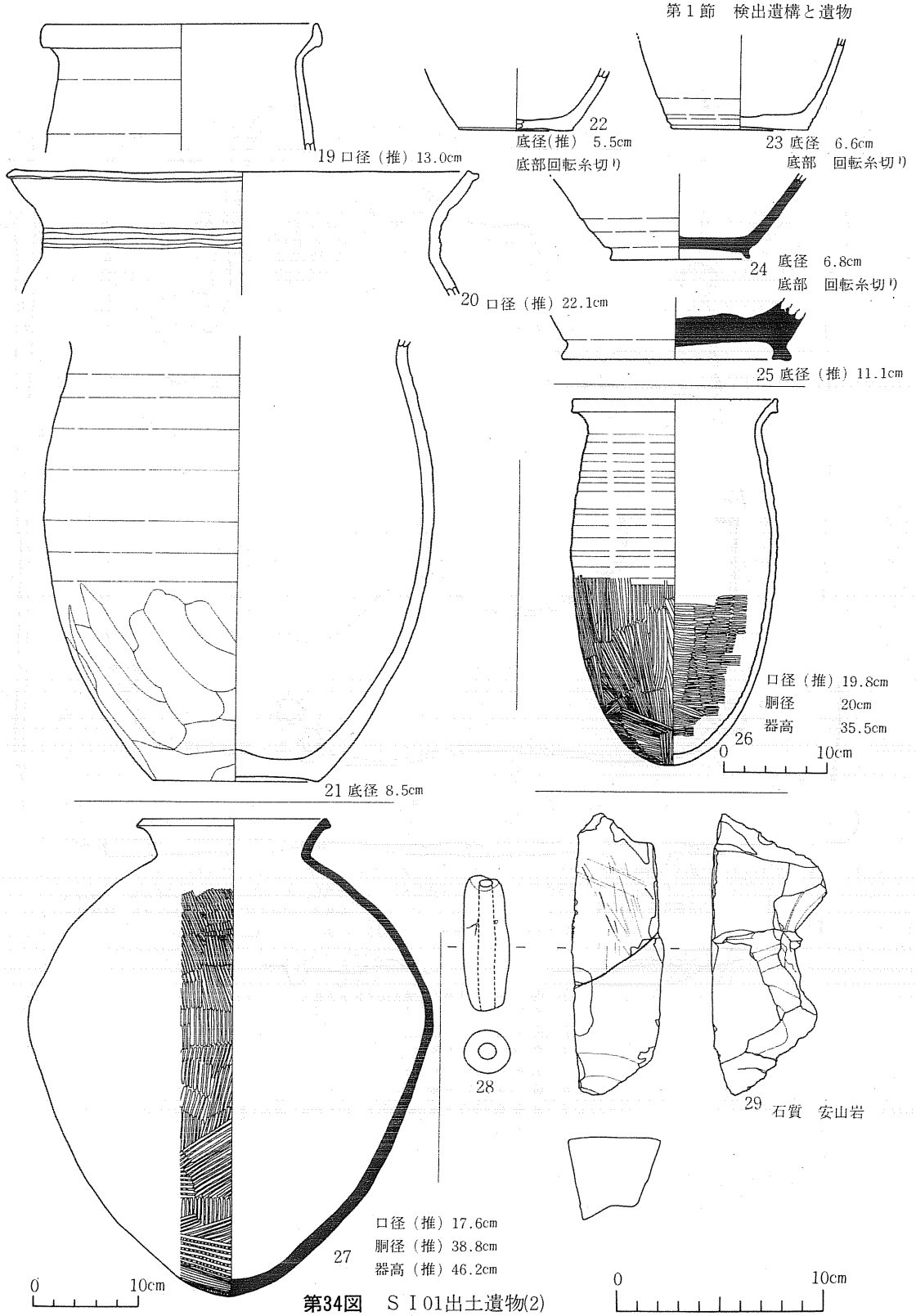
カマド：南壁のやや西寄りにあり、煙道は短く、外方に急激に立ち上がる。袖は弱粘土質黄



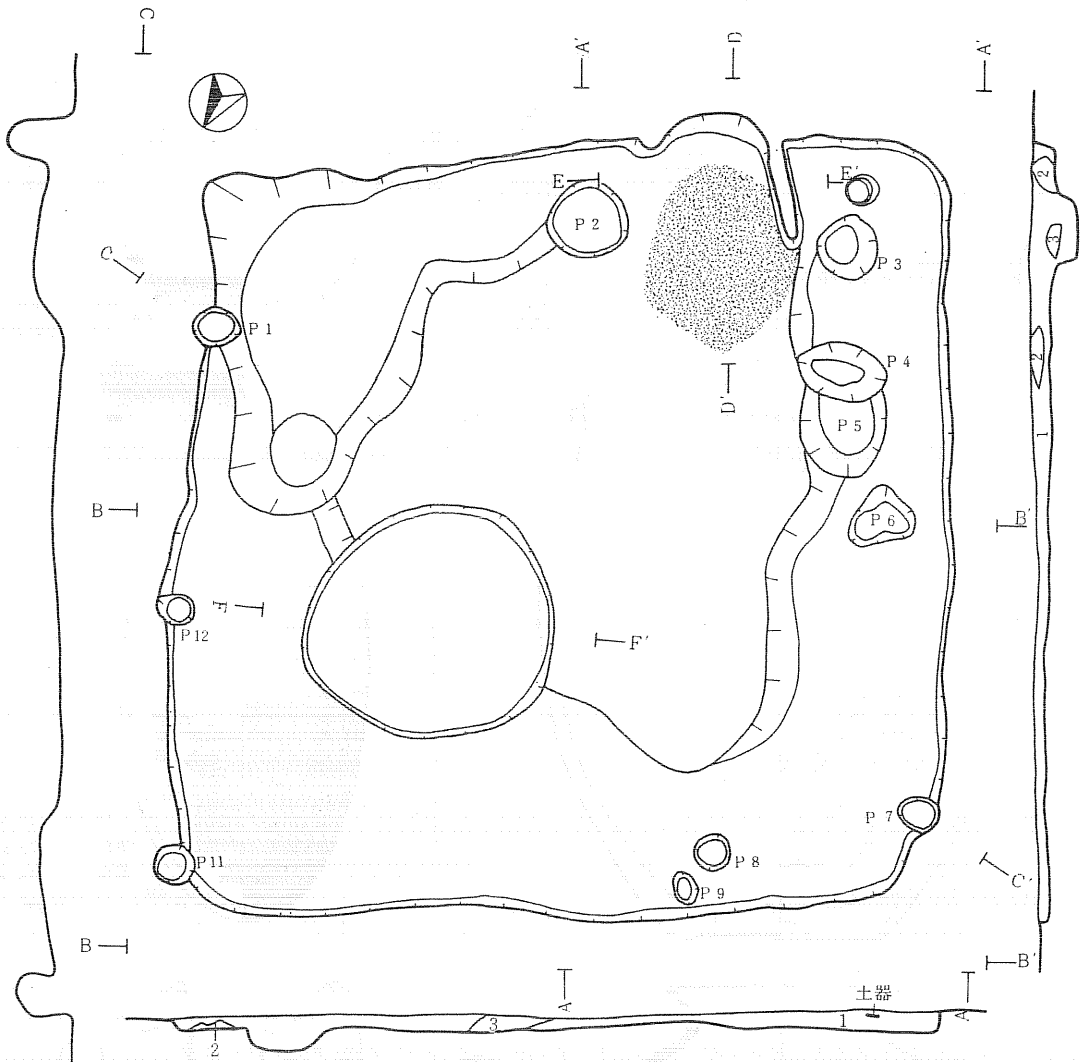
第32図　ＳＩ01竪穴住居跡



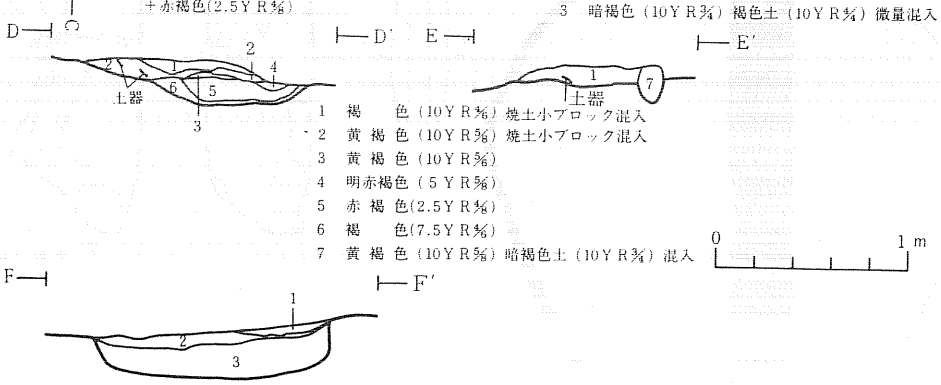
第33図　ＳＩ01出土遺物(1)



第34図　ＳＩ01出土遺物(2)



1　にぶい黄色(2.5Y 6/3)　暗褐色土（10Y R 3/3）少量混入
　　＋赤褐色(2.5Y R 4/8)
2　暗褐色（10Y R 3/3）褐色土（10Y R 4/4）少量混入
3　暗褐色（10Y R 3/4）褐色土（10Y R 4/4）微量混入



1　褐　　色（10Y R 4/6）焼土小ブロック混入
2　黄 褐 色（10Y R 5/8）焼土小ブロック混入
3　黄 褐 色（10Y R 5/6）
4　明赤褐色（5 Y R 5/8）
5　赤 褐 色(2.5Y R 4/8)
6　褐　　色(7.5Y R 4/6)
7　黄 褐 色（10Y R 5/6）暗褐色土（10Y R 3/4）混入

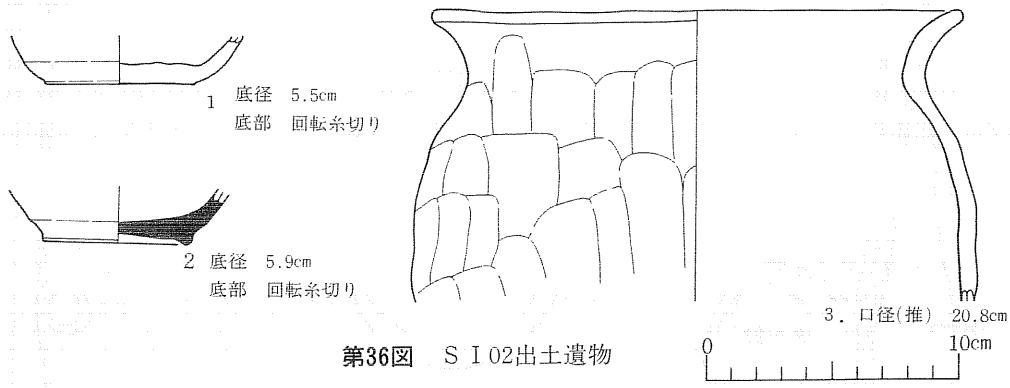
1　暗褐色（10Y R 3/4）褐色土（10Y R 4/4）、黄褐色土（10Y R 5/6）、明黄褐色土（10Y R 6/6）、
　　焼土少量混入
2　褐　色（10Y R 5/6）
3　褐　色（10Y R 5/4）

第35図　ＳＩ02竪穴住居跡

褐色土を用いているがあまり明瞭でないために、特に東側の袖は掘り過ぎによって破壊した可能性がある。

遺物：土師器坏・甕・須恵器坏が出土した。

その他：床面のやや北東寄りに径100 cm、深さ30cmほどの円形の凹みが検出された。この凹みの確認面上の西側には、焼土と、地山面から150 cmほど下層に堆積するにぶい黄色の砂質土（基本層位第Ⅳ層中）が混入していた。この凹みは住居跡に伴うものと考えられる。



第36図　ＳＩ02出土遺物

ＳＩ03（第37図、第５図版）

位置：ＪＢ28・29、ＪＣ28・29グリッド。

確認状況：地山面で確認したが、地山が西に向かって傾斜しており、西壁は不明確であった。

平面形・規模：西・南壁が465 cmの方形で、面積20.1m²、主軸方位は不明である。

床：北東側半分は若干の凹凸があるものの比較的堅い。が南西側半分はさほど壁くはない。

壁：いずれも低く、南壁において最高12cmを測る。ほぼ垂直な立ち上がりである。

壁溝：東壁には検出されなかったが、他の壁には幅10～25cm、深さ５～10cmで巡っている。

柱穴：Ｐ１・18cm、Ｐ２・32cm、Ｐ３・46cm、Ｐ４・55cm、Ｐ５・62cm、Ｐ６・35cm、Ｐ７・44cm、Ｐ８・36cm、Ｐ９・28cm、Ｐ10・21cmの深さである。Ｐ１・10を除く８個が柱穴である。

カマド：付設されていない。

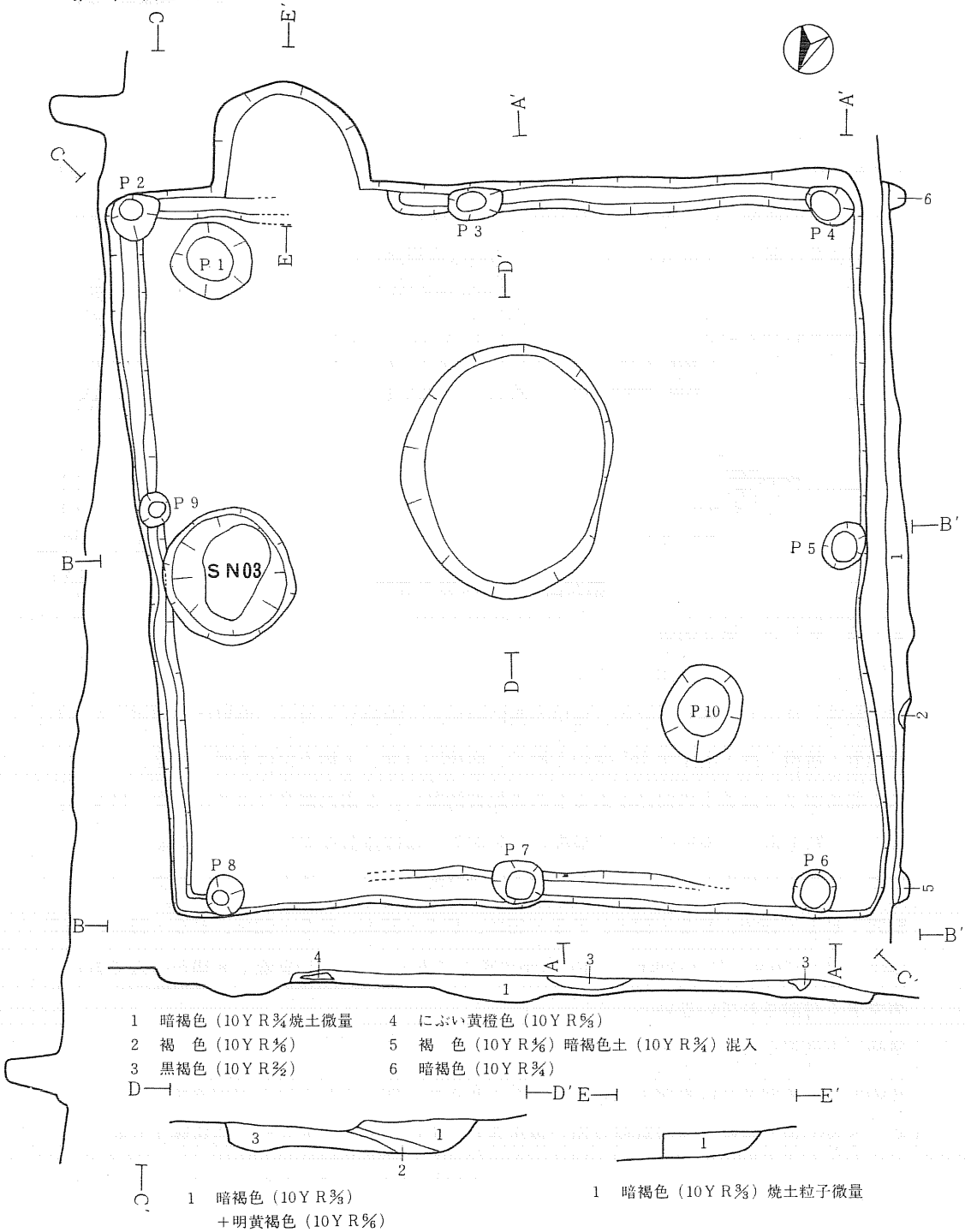
遺物：土師器小破片と土錘１点が出土した。

その他：南東壁寄りにカマド状張り出し部があるが、住居より古いものでカマドではない。また、ＳＮ03焼土遺構は住居跡確認面で検出されたものであって明らかに住居跡より新しい。床面上に長径158 cm、短径126 cm、深さ18cmの楕円形の落ち込みがあるが、本住居に伴うものと考えられる。

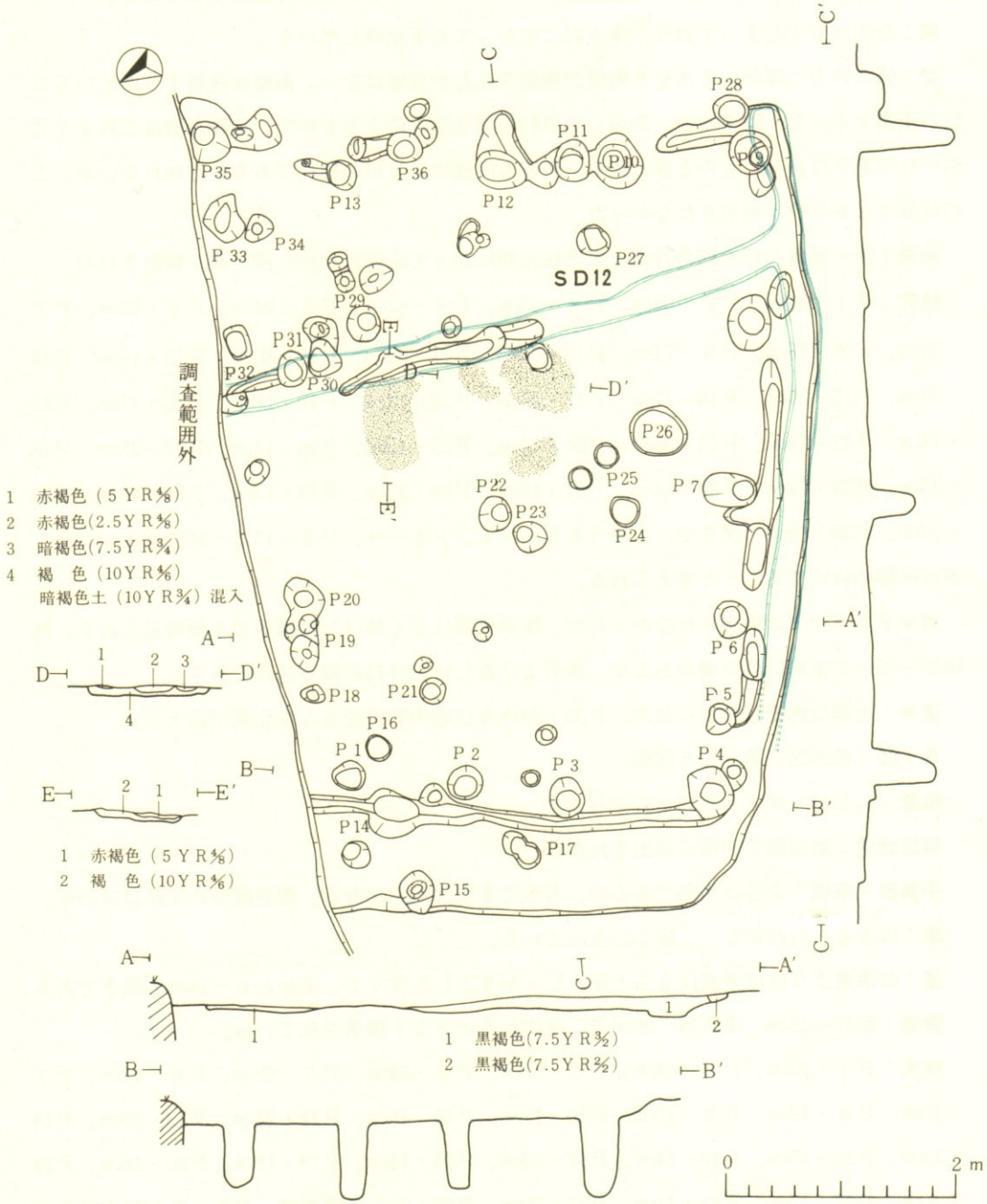
ＳＩ04（第38図、第５図版）

位置：ＬＦ50、ＬＧ49・50、ＬＨ49・50グリッド。

確認状況：耕作土を剝ぐと住居跡床面が露出した。南側に住居より新しい溝も確認された。



第37図　ＳＩ03竪穴住居跡



第38図　ＳＩ04竪穴住居跡、ＳＤ11・12溝

平面形・規模：住居北側が調査範囲外に入っており全容は不明であるが、南壁は688cmある。方形を呈するものと考えられ、調査部分の面積は33m²である。主軸方位は不明である。

床：全体に堅くしまっており、中央部に向かって若干傾斜している。

壁：低く外方に傾斜する西壁と南壁が検出されたが東壁はない。南壁は住居より新しいＳＤ11の南側ラインと一致するが、恐らくＳＤ11の掘り込みによるもので、正確な壁はこれより北側の柱穴寄りにあったものと思われる。西壁も同様にＳＤ11の延長であるかも知れないが、この位置ではＳＤ11は検出されなかった。

壁溝：西・南側の柱穴列の外側と東側柱穴列に沿って途切れながら浅い溝が検出された。

柱穴：Ｐ１・54cm、Ｐ２・64cm、Ｐ３・55cm、Ｐ４・67cm、Ｐ５・24cm、Ｐ６・53cm、Ｐ７・59cm、Ｐ８・66cm、Ｐ９・71cm、Ｐ10・66cm、Ｐ11・69cm、Ｐ12・80cm、Ｐ13・16cm、Ｐ14・28cm、Ｐ15・30cm、Ｐ16・17cm、Ｐ17・20cm、Ｐ18・15cm、Ｐ19・28cm、Ｐ20・17cm、Ｐ21・18cm、Ｐ22・24cm、Ｐ23・38cm、Ｐ24・12cm、Ｐ25・12cm、Ｐ26・14cm、Ｐ27・32cm、Ｐ28・35cm、Ｐ29・77cm、Ｐ30・24cm、Ｐ31・17cm、Ｐ32・32cm、Ｐ33・13cm、Ｐ34・13cm、Ｐ35・73cm、Ｐ36・69cmの深さで、このうちＰ１～４、Ｐ４～９、Ｐ９～13は一列に並んでおり、本住居跡の柱穴であろうと考えられる。

カマド：カマドは検出されなかったが、床中央部によく焼けた地床炉が４箇所見られる。地床炉を切って床面に浅い溝があるが、住居より新しいＳＤ11の掘り込みである。

遺物：土器は出土しなかったが、Ｐ33・34内及び地床炉付近から炭化栗が出土した。

ＳＩ05（第39図、第５・６図版）

位置：ＬＥ45・46、ＬＦ46・47グリッド。

確認状況：地山面で明確に検出された。

平面形・規模：全容は不明であるが、方形で北壁は721cmある。調査部分の面積は27.9m²。

床：ほとんど凹凸がなく、堅くしまっている。

壁：壁溝底よりほぼ垂直に立ち上がるしっかりとした作りで、床から６～15cmの高さである。

壁溝：幅17～30cm、深さ14～28cmで、途切れることなく構築されている。

柱穴：Ｐ１・70cm、Ｐ２・65cm、Ｐ３・63cm、Ｐ４・54cm、Ｐ５、62cm、Ｐ６・13cm、Ｐ７・10cm、Ｐ８・12cm、Ｐ９・15cm、Ｐ10・17cm、Ｐ11・18cm、Ｐ12・24cm、Ｐ13・20cm、Ｐ14・13cm、Ｐ15・25cm、Ｐ16・34cm、Ｐ17・20cm、Ｐ18・14cm、Ｐ19・12cm、Ｐ20・18cm、Ｐ21・８cm、Ｐ22・17cm、Ｐ23・11cm、Ｐ24・20cm、Ｐ25・13cmの深さで、Ｐ１～５が柱穴であろう。柱穴の上部はロート状を呈し、住居の隅にはない。

カマド：検出されなかったが、北東隅にある凹みには埋土に焼土が混入していた。

遺物：西壁の壁溝内から須恵器坏が１点出土した。

第39図　ＳＩ05竪穴住居跡

ＳＩ06（第40図、第６図版）

位置：ＬＢ47・48、ＬＣ47・48グリッド。

確認状況：地山面で確認した。

平面形・規模：東壁451㎝、北壁491㎝の方形で、面積21.7㎡、主軸方位はＮ－55°－Ｗ。

床：南壁側が不整形に落ち込んでいる他は凹凸が少なく堅くしまっている。

壁：最高部で10㎝前後の高さであるが、立ち上がりは急角度をなす。

壁溝：南側の落ち込み部のみ検出できなかったが、他の壁には幅10～34㎝、深さ６～20㎝で構築されている。

柱穴：Ｐ１・18㎝、Ｐ２・26㎝、Ｐ３・19㎝、Ｐ４・18㎝、Ｐ５・24㎝、Ｐ６・15㎝、Ｐ７・23㎝、Ｐ８・21㎝、Ｐ９・40㎝、Ｐ10・23㎝、Ｐ11・19㎝、Ｐ12・18㎝、Ｐ13・19㎝、Ｐ14・32㎝、Ｐ15・17㎝、Ｐ16・10㎝、Ｐ17・18㎝、Ｐ18・14㎝、Ｐ19・10㎝の深さでいずれも浅く、壁溝内にあるものもあるが、それぞれ対応せず、この住居の柱穴は定かでない。

カマド：東壁に２基付設されているが、新旧関係は不明である。南側のカマドは袖がわずかに残存し、土師器甕底部を器台としている。北側カマドの袖は全く残存していない。この他、床中央部よりやや東寄りに径35㎝ほどの地床炉がある。

その他：南側カマド付近に径90㎝の円形の凹みがある。遺物はなく、遺跡基本層位第Ⅳ層のにぶい黄橙色砂質土が内面全体に塗られていた。

遺物：器台の他、土師器甕、土錘、砥石が出土した。

ＳＩ07（第41図、第６図版）

位置：ＫＡ45・46、ＬＡ45・46グリッド。

確認状況：地山面で方形のプランを確認した。

平面形・規模：西側251㎝、北側328㎝の方形で、面積は８㎡。桁行方位はＮ－37°－Ｗ。

床：凹凸はほとんどなく、さほど堅くはない。

壁：北壁は残存しない。東・西壁も南側ほど高いが北ほど低くなり、コーナー部で消失する。

壁構：検出されなかった。

柱穴：Ｐ１・16㎝、Ｐ２・22㎝、Ｐ３・11㎝、Ｐ４・６㎝、Ｐ５・４㎝、Ｐ６・10㎝の深さで、この６個が柱穴である。

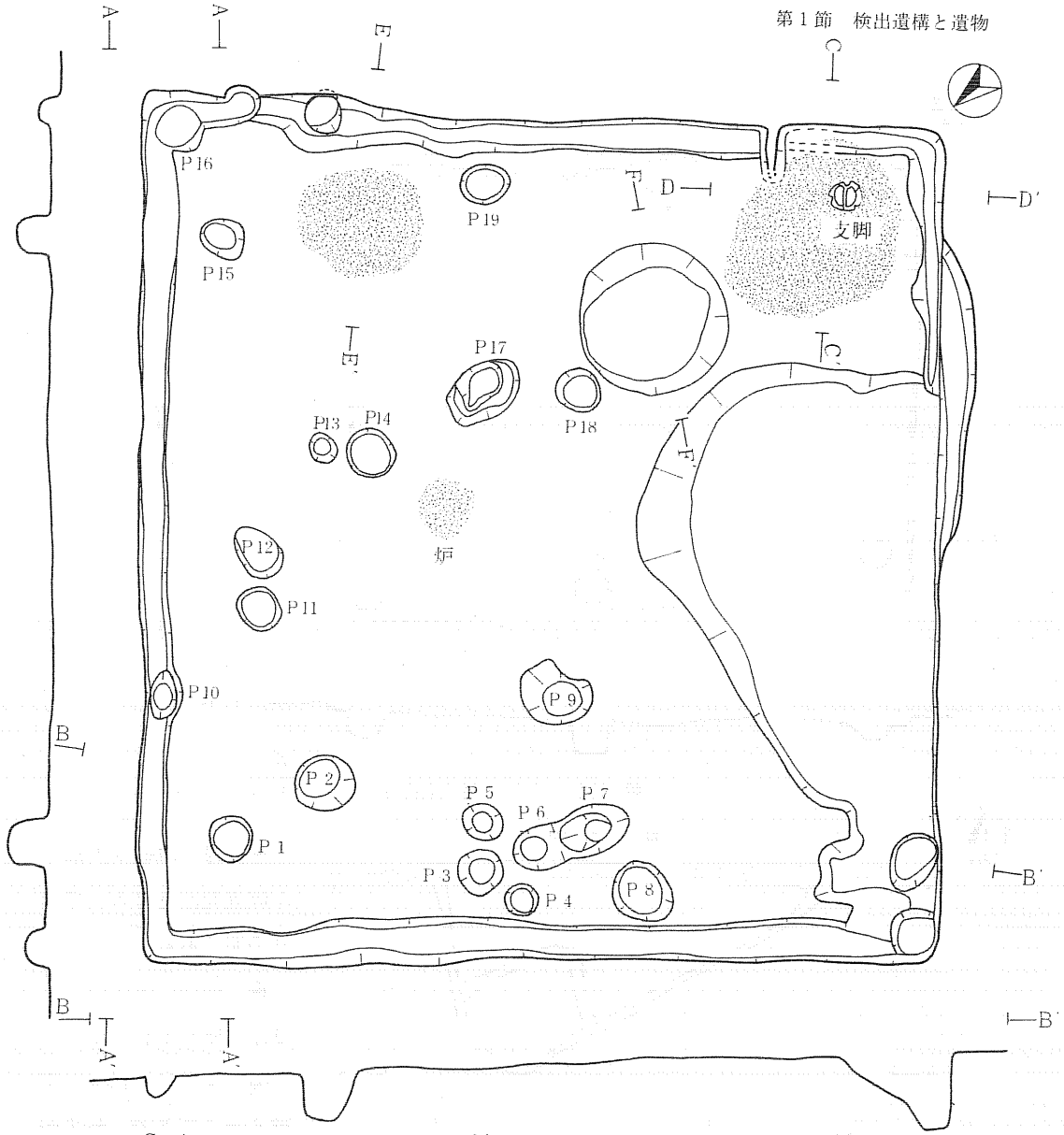
カマド：付設されていない。

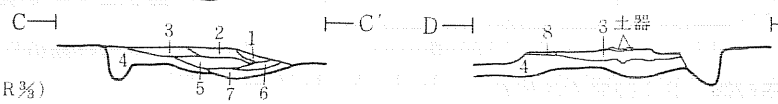
遺物：出土しなかった。

ＳＩ08（第42図、第６図版）

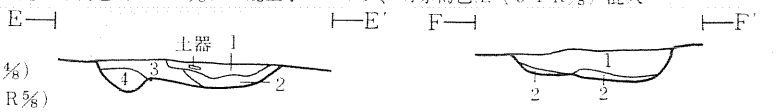
位置：ＭＣ51・52グリッド。

確認状況：地山面で遺構の一部を確認した。





1　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/3）
2　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）赤褐色（５Ｙ Ｒ4/8）の焼土、にぶい黄色土(2.5Ｙ6/3）混入
3　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/3）明赤褐色（５Ｙ Ｒ5/8）の焼土粒子混入
4　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）混入
5　暗褐色(7.5Ｙ Ｒ3/4）赤褐色（５Ｙ Ｒ4/8）の焼土小ブロック、明赤褐色土（５Ｙ Ｒ5/8）混入
6　赤褐色（５Ｙ Ｒ4/8）
7　赤褐色（５Ｙ Ｒ4/6）
8　にぶい黄色(2.5Ｙ6/3）焼土混入

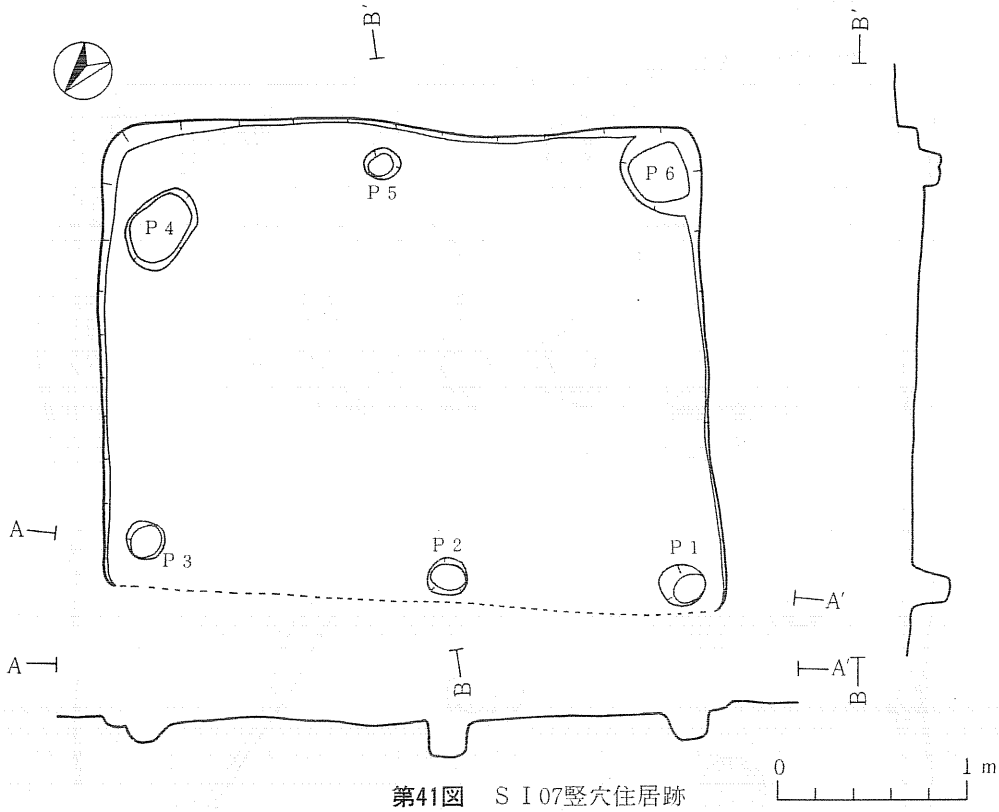


1　赤褐色（５Ｙ Ｒ4/8）
2　明赤褐色（５Ｙ Ｒ5/8）
3　褐　色(7.5Ｙ Ｒ3/4）焼土粒子混入
4　褐　色（10Ｙ Ｒ4/6）赤褐色（５Ｙ Ｒ4/8）の焼土混入

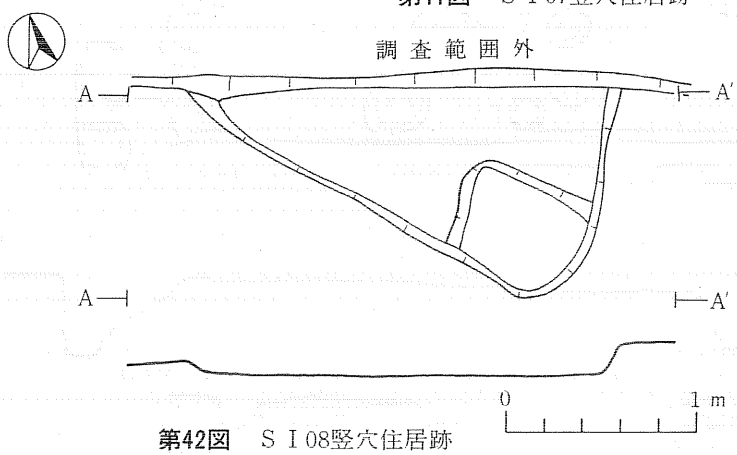
1　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/8）、褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）多量混入
2　にぶい黄色(2.5Ｙ6/3）

第40図　ＳＩ06竪穴住居跡

0　1 m



第41図　ＳＩ07竪穴住居跡



第42図　ＳＩ08竪穴住居跡

平面形・規模：大部分が調査範囲外に入っており不明である。

床：凹凸は少ないが、さほど堅くはない。

壁：東壁11～13cm、南壁６cmの高さで、わずかに外方に傾斜して立ち上がる。

壁溝：検出されなかった。

柱穴：明確なものは確認されなかったが、南側隅に平面75×58cm、深さ20cmほどのピットがある。

カマド：検出されなかった。

遺物：出土しなかった。

備考：明確ではないが、壁、覆土などの状態から住居跡の一部であろうと考えられる。

ＳＩ09（第44図、第６図版）

位置：ＰＢ・ＰＣ・ＰＤ54グリッド。

確認状況：地山面で確認した。

平面形・規模：約½のみであるが、北壁は541 cmあり、方形で調査部分の面積は12.6m²、主軸方位はＮ－76°－Ｅである。

床：凹凸が少なく堅くしまっている。ＳＫ(F)05の上にはわずかに貼り床を施している。

壁：35～50cmの高さで垂直に立ち上がるしっかりとした壁である。

壁溝：幅８～21cm、深さ５～10cmで掘り込まれているが、北壁の東側及び東壁の南側では確認されない。

柱穴：Ｐ１・37cm、Ｐ２・35cm、Ｐ３・29cm、Ｐ４・48cm、Ｐ５・51cm、Ｐ６・38cmの深さで、このうちＰ１～５は壁溝内に構築されており、柱穴であると考えられる。

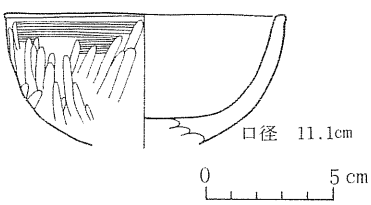
カマド：東壁のやや北寄りに付設されている。煙道は短かく、緩やかに立ち上がって壁外方に張り出す。袖部は黄褐色粘質土を用いており、カマドの下に壁溝があることから、東壁の壁溝構築後にカマドを付設したものである。Ｐ６付近には径30cmほどの地床炉が見られる。

遺物：カマド内から土師器坏、炭化米15粒、床面から輪積痕のある器台が出土した。

ＳＩ14（第13図、第７図版）

位置：ＰＣ・ＰＤ56グリッド。

確認状況：地山面上で黒褐色土を暗褐色土が囲む状態で確認したが、この時点では縄文の住居と考えていた。その後の掘り下げにより、土師器・須恵器が出土したことと土層断面の観察によって平安時代の住居が縄文時代の住居に重複することを確認した。



第43図　ＳＩ09出土遺物

平面形・規模：約½が調査範囲外に入っているが、南壁の長さは331 cmの方形であろうと思われる。調査部分の面積は4.7 m²、主軸方位はＮ－89°－Ｅである。

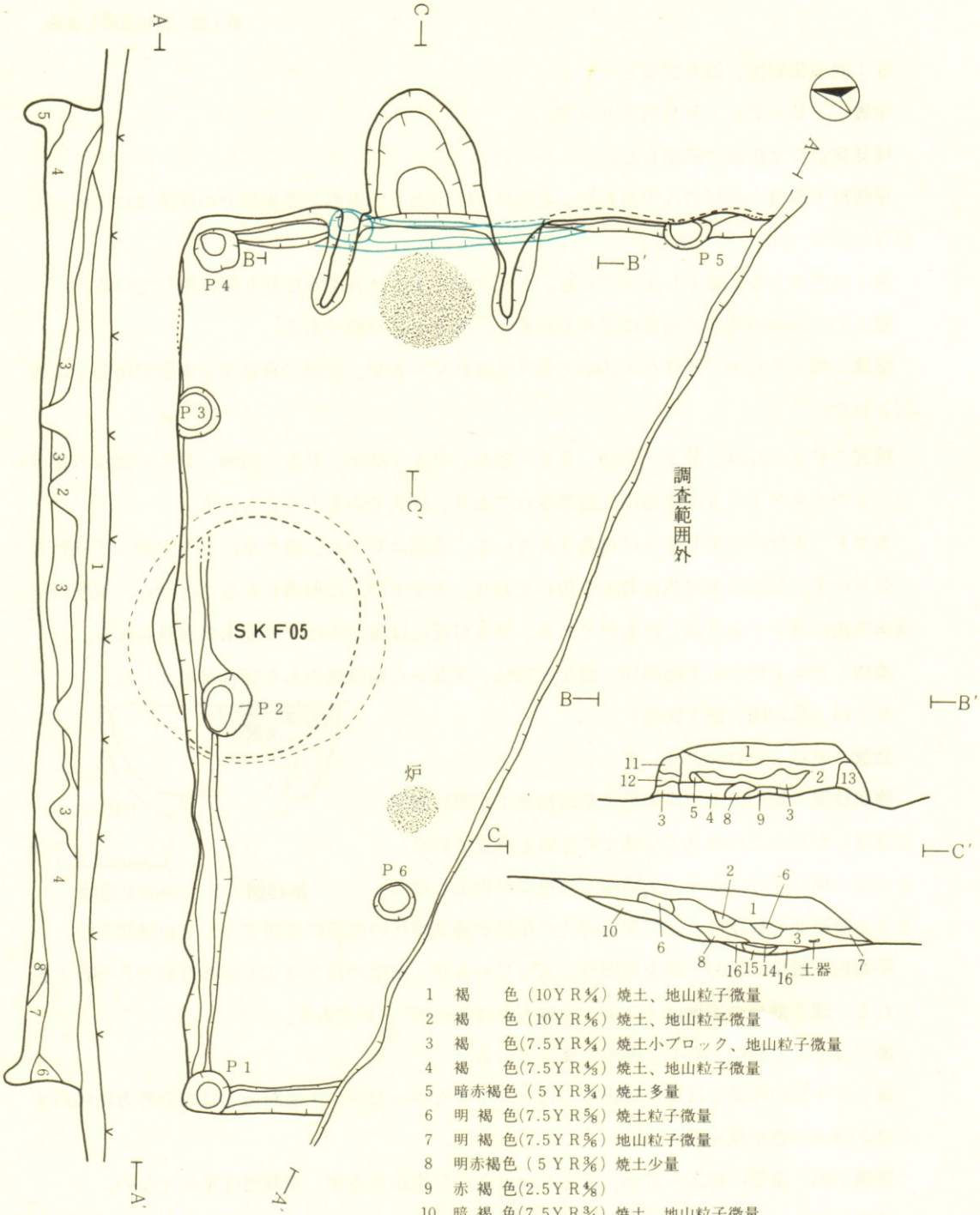
床：ほとんど凹凸がなく、堅くしまっている。

壁：ＳＩ13の床面では壁を検出することができなかったが、土層断面では幾分外方に傾斜する高さ54cmの壁が見られる。

壁溝：西・南壁に幅20～27cm、深さ５cmほどの壁溝があるが、東壁では定かでない。

柱穴：Ｐ１・33cm、Ｐ２・30cm、Ｐ３・36cm、Ｐ４・40cmの深さで、Ｐ１～３が本住居跡の柱穴であろう。

遺物：須恵器坏、土師器甕底部が出土している。



1　暗褐色（10YR3/8）耕作土
2　黒褐色（10YR3/2）
3　黒褐色（10YR3/3）
4　暗褐色（10YR3/3）
5　褐　色（10YR4/4）黄褐色土（10YR5/8）微量混入
6　褐　色（10YR4/4）黄褐色土（10YR5/8）微量混入
7　褐　色（10YR4/4）黄褐色土（10YR5/8）多量混入
8　黄褐色（10YR5/8）褐 色 土（10YR4/4）多量混入

1　褐　　色（10YR4/4）焼土、地山粒子微量
2　褐　　色（10YR4/6）焼土、地山粒子微量
3　褐　　色(7.5YR4/4）焼土小ブロック、地山粒子微量
4　褐　　色(7.5YR4/3）焼土、地山粒子微量
5　暗赤褐色（5YR3/4）焼土多量
6　明 褐 色(7.5YR5/8）焼土粒子微量
7　明 褐 色(7.5YR5/6）地山粒子微量
8　明赤褐色（5YR3/6）焼土少量
9　赤 褐 色(2.5YR4/8）
10　暗 褐 色(7.5YR3/4）焼土、地山粒子微量
11　黄 褐 色（10YR5/8）
12　黄 褐 色（10YR5/6）
13　褐　　色（10YR4/6）
14　赤 褐 色(2.5YR4/8）
15　明赤褐色（5YR5/8）
16　明 褐 色(7.5YR5/8）

0　1 m

第44図　ＳＩ09竪穴住居跡

②　土　　壙

ＳＫ04（第45図、第８図版）

ＪＣ31グリッド内の地山面で確認した。長径113㎝、短径86㎝の楕円形で深さ19㎝である。平坦な底面から壁が外方に緩やかに立ち上がる。内黒土師器と須恵器の坏が各１点出土した。

ＳＫ05（第45図、第８図版）

ＪＢ30グリッド内の地山面で確認した。長径62㎝、短径55㎝の楕円形で、中央部が最も深い丸底で、深さ33㎝である。土師器坏が１点出土した。

ＳＫ09（第45図、第９図版）

ＬＢ46グリッド内の地山面で確認した。長径126㎝、短径77㎝の楕円形で、深さ10㎝である。底面は幾分凹凸があり、北端には小ピットが見られる。壁は緩やかである。須恵器２片出土。

③　焼土遺構

ＳＮ01（第45図）

ＪＢ30グリッド内の地山面で確認した。長径56㎝、短径40㎝の楕円形でほとんど掘り込まれておらず、深い所でも５㎝ほどしかない。非常によく焼けて堅くしまっている。遺物はない。

ＳＮ02（第45図、第11図版）

ＪＢ30グリッド内、ＳＮ01北側の地山面で検出された。径68㎝ほどの円形で、底部は擂鉢状となり最深部で10㎝の深さである。非常によく焼けていて堅い。遺物は出土しなかった。

ＳＮ03（第45図、第11図版）

ＳＩ03竪穴住居跡の覆土上面で確認した。この遺構の底部はＳＩ03の床面をも掘り込んでいるが、ＳＩ03よりは確実に新しい。径82㎝の円形で、中央の最深部で深さ18㎝である。底部はよく焼けており、非常に堅い。土師器甕下半部が遺構底面に密着して逆位に置かれて出土した。

ＳＮ04（第45図）

ＪＢ30グリッド内の地山面で確認した。長径67㎝、短径47㎝の楕円形で、底面は平坦、壁は外方に傾斜しながらまっすぐに立ち上がる。深さ10㎝で焼土は少なく、黄褐色土中にブロック状に見られる程度である。

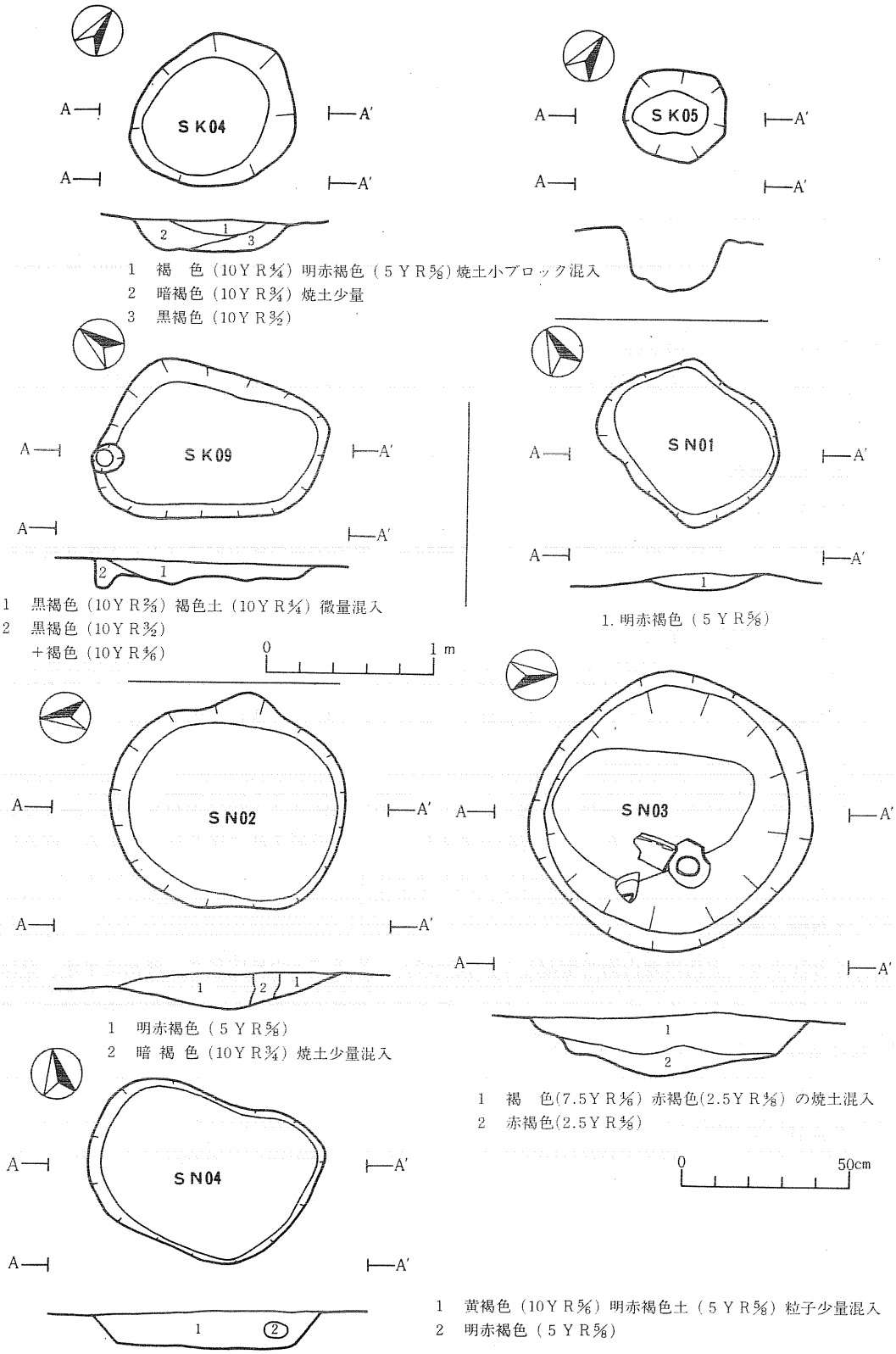
④　柱　　列

ＳＡ01（第47図）

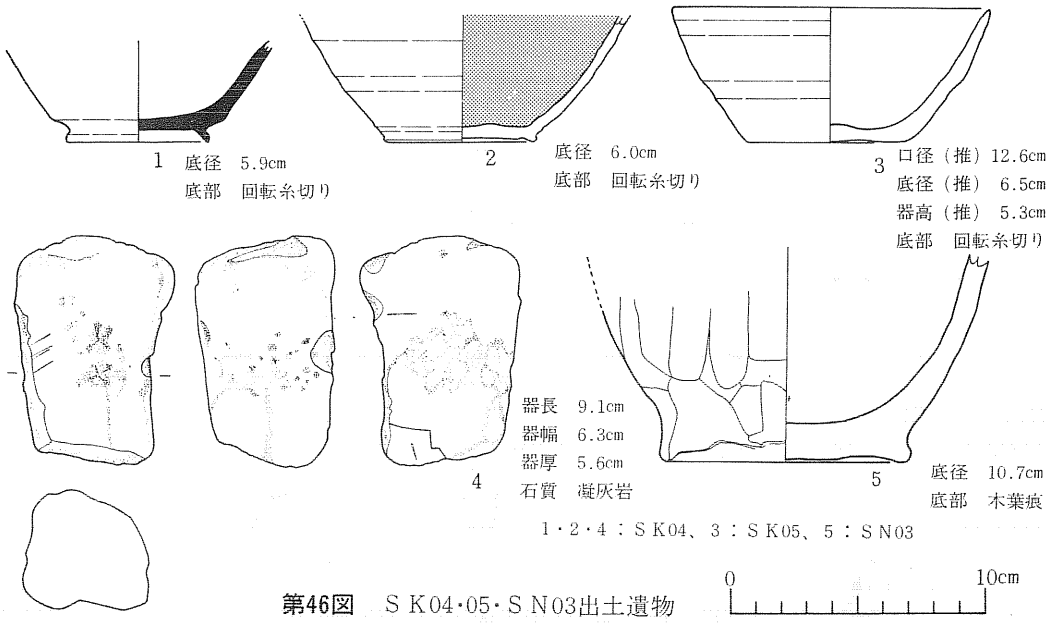
ＨＨ14・15、ＨＩ15グリッド地山面で検出した。２間（総長2.05ｍ）の柱列で、この西側にあるＳＤ01～08溝と平行し、方位はＮ―25°―Ｗである。柱穴は径55～62㎝、深さ15～18㎝である。柱間は北から2.04ｍ（６尺８寸）、2.01ｍ（６尺７寸）である。

ＳＡ02（第47図）

ＩＥ・ＩＦ・ＩＧ24グリッド地山面で検出した。２間（総長3.14ｍ）の柱列で、方位はＮ―



第45図　SK04・05・09土壙、SN01～04焼土遺構



第46図　ＳＫ04･05･ＳＮ03出土遺物

72°－Ｅである。柱穴は径35～45cm、深さ32～40cmで、柱間は西から2.58ｍ（８尺６寸）、2.56ｍ（８尺５寸）である。

ＳＡ03（第47図）

ＩＪ26・27、ＪＡ27グリッド地山面で検出した。５間（総長4.62ｍ）の柱列で、方位はＮ－62°－Ｗである。柱穴は径20～33cm、深さはＰ１、２、６が浅く15～18cmであるが、他は25～38cmで柱間は西から1.21ｍ（４尺）、1.26ｍ（４尺２寸）、1.14ｍ（３尺８寸）、1.01ｍ（３尺４寸）である。

ＳＡ04（第47図）

ＯＪ54、ＰＡ53グリッド地山面で検出した。２間（総長3.72ｍ）の柱列で、方位はＮ－72°－Ｗである。柱穴は径25～26cm、深さ45～49cmと均一である。柱間は西から1.84ｍ（６尺１寸）、1.88ｍ（６尺２寸）である。

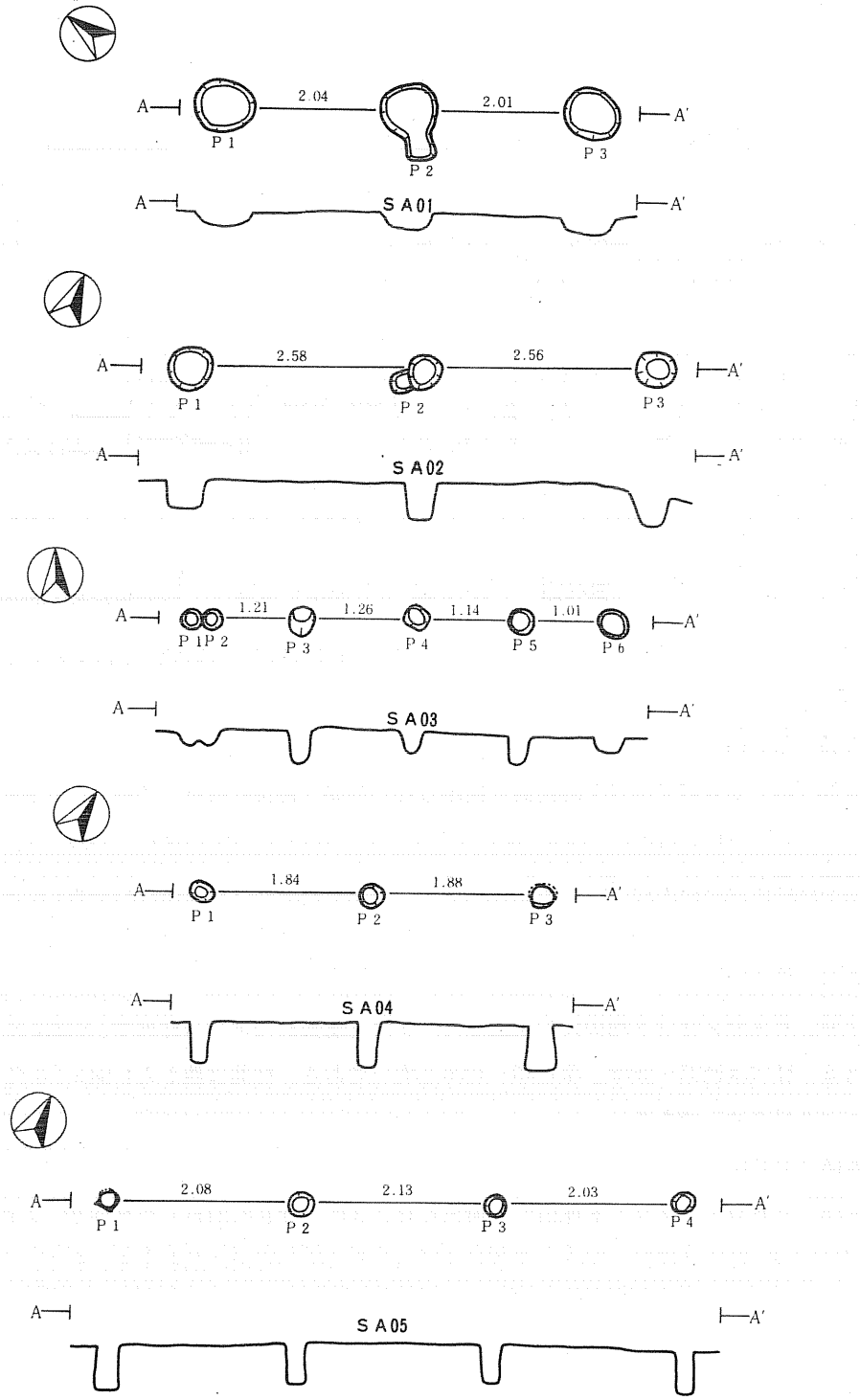
ＳＡ05（第47図）

ＰＡ55、ＰＢ54・55グリッド地山面で検出した。３間（総長6.24ｍ）の柱列で、方位はＮ－75°－Ｅである。柱穴は径21～24cm、深さ43～49cmでＳＡ01の規模に酷似する。Ｐ１はＳＩ09の北東隅に一部がかかるが、新旧関係は不明である。柱穴は西から2.08ｍ（６尺９寸）、2.13ｍ（７尺１寸）、2.03ｍ（６尺８寸）である。

⑤　掘立柱建物跡

ＳＢ01・02（第48図、第７図版）

ＪＧ37、ＪＨ・ＪＩ36～38グリッドの第Ⅱ層黒色土面に検出された。ＳＢ01はＰ２・６が深



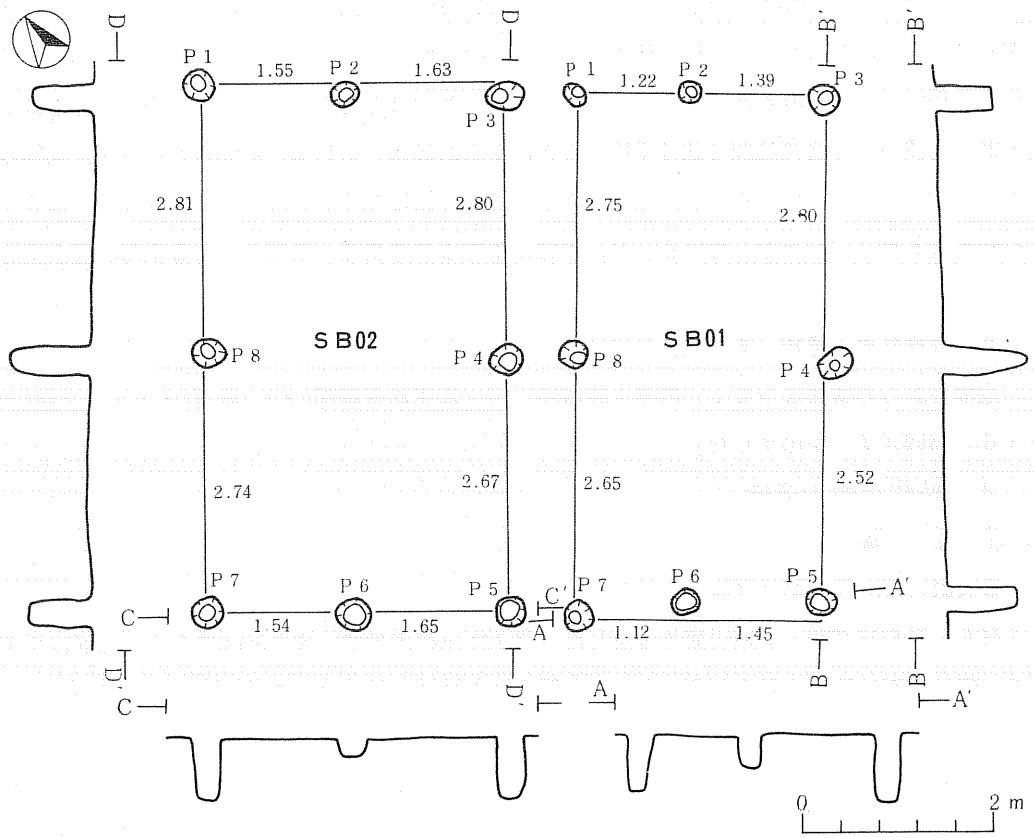
第47図　ＳＡ01～05柱列

0　2 m

さ22・23cmと浅いのに比べ、Ｐ４・８は87・81cmと最も深いことから、桁行２間（総長2.61ｍ―北）、梁行２間(総長5.35ｍ―西)の東西棟建物であると考えられる。平均柱間寸法は桁行1.30ｍ(４尺３寸)、梁行2.68ｍ（８尺９寸）で、建物の軸方向は南側桁行でＮ―53°―Ｗである。ＳＢ02もＰ２・６が深さ21cmと極めて浅く、Ｐ４・８が最も深いので、ＳＢ01同様、桁行２間(総長3.19ｍ―南)、梁行２間(総長5.55ｍ―西）の東西棟建物と考えられる。平均柱間寸法は桁行1.59ｍ（５尺３寸)、梁行2.76ｍ(９尺２寸）で、建物の軸方向は南側桁行でＮ―53°―Ｗである。東南隅の掘り方は四角であるが、円形の柱痕跡が認められた。両建物は密接して並んでおり、ＳＢ01西側とＳＢ02東側の間隔は0.7ｍほどしかなく、両者が同時に存在したと考えるには無理があろう。

ＳＢ03（第49図、第７図版）

ＬＤ・ＬＥ46～48グリッドの地山面で検出した。西にＳＢ05の東西棟建物があり、桁行２間(総長5.79ｍ―南)、梁行東側４間(総長7.86ｍ)、西側３間（総長8.04ｍ）の東西棟の総柱建物と考えた。南側に庇があり、建物の軸方向は南側桁行でＮ―82°―Ｗである。柱穴は径25～37cm



第48図　ＳＢ01・02掘立柱建物跡

で、深さは21～61cmを測るが北側中間の柱を欠く。Ｐ５・６はＳＩ05の覆土上面から掘り込んでおり、この建物の方がＳＩ05よりも確実に新しいと言える。身舎の柱間寸法は桁行が西側で平均2.76m（９尺２寸）、東側で3.12m（10尺４寸）、梁行は東側が北から1.10m、2.49m、2.57m、1.70m、西側が3.14m、3.20mである。庇の幅の平均柱間寸法は1.74m（５尺８寸）である。

ＳＢ04（第49図、第７図版）

ＬＤ46～48、ＬＥ47・48グリッドの地山面で検出した。桁行東側３間（総長6.04m）、西側２間（総長6.07m）、梁行１間（4.62m―北）の建物である。柱穴はＰ１・２が深さ15cmほどでＰ３～７は22～38cm、Ｐ８のみ58cmとばらつきが大きい。Ｐ５はＳＢ03のＰ５と重複する。柱間寸法は桁行東側が北から2.94m、1.85m、1.25m、西側が北から3.02m、3.05m、梁行は4.45m（14尺８寸）である。建物の軸方向は東側桁行でＮ―14°―Ｅである

ＳＢ05（第49図、第７図版）

ＬＥ～ＬＧ、46～49グリッドの地山面で確認したがＰ20・21はＳＩ05の覆土上から掘り込んでおり、確実にＳＩ05より新しい。桁行３間（総長6.90m―北）、梁行４間（10.11m―東）の東西棟で、南・北側に庇のつく総柱建物である。建物の軸方向は南側の桁行でＮ―82°―Ｗである。柱穴は径28～44cmを測るが、深さは身舎の柱で50～70cmほどである。しかし南側庇の深さは９～28cmと浅い。身舎の柱間寸法は平均すると西から2.09m、2.11m、2.65mとなるが、梁間は平均3.09m（10尺３寸）である。庇の幅の平均柱間寸法は北側が1.96m（６尺５寸）、南側が1.89m（６尺３寸）となっている。Ｐ17の埋土下方より赤褐色、糸切りのある土師器坏が出土した。

(2)　遺構外出土遺物（第50図、第15図版）

遺構外からの遺物は少なく、内黒土師器坏（１）、須恵器壺胴部（２）、砥石（３・４）、土錘（５・６）、鉄釘（７）が出土した。

４　時代不明の遺構

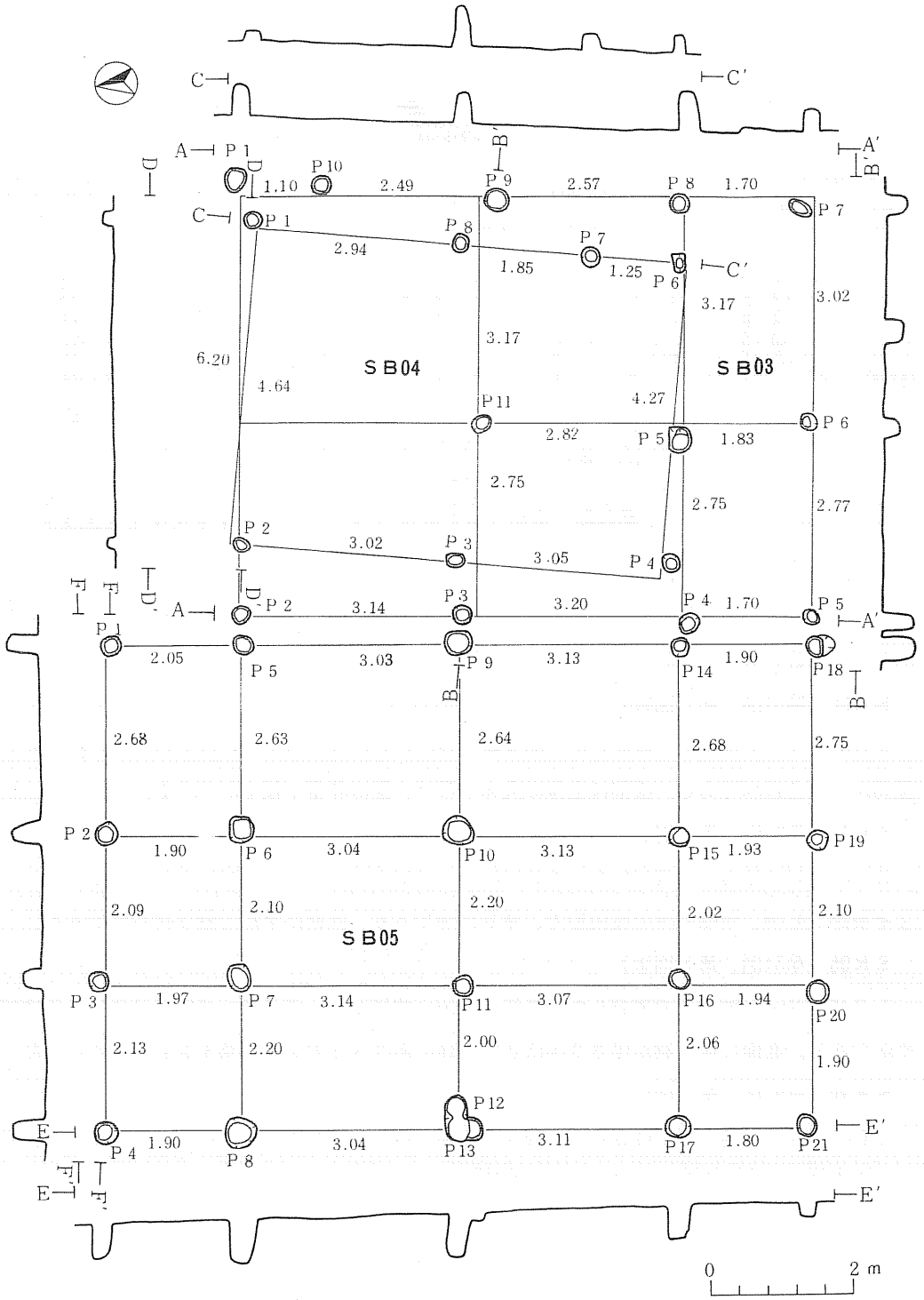
①　土　　壙

ＳＫ01（第51図、第８図版）

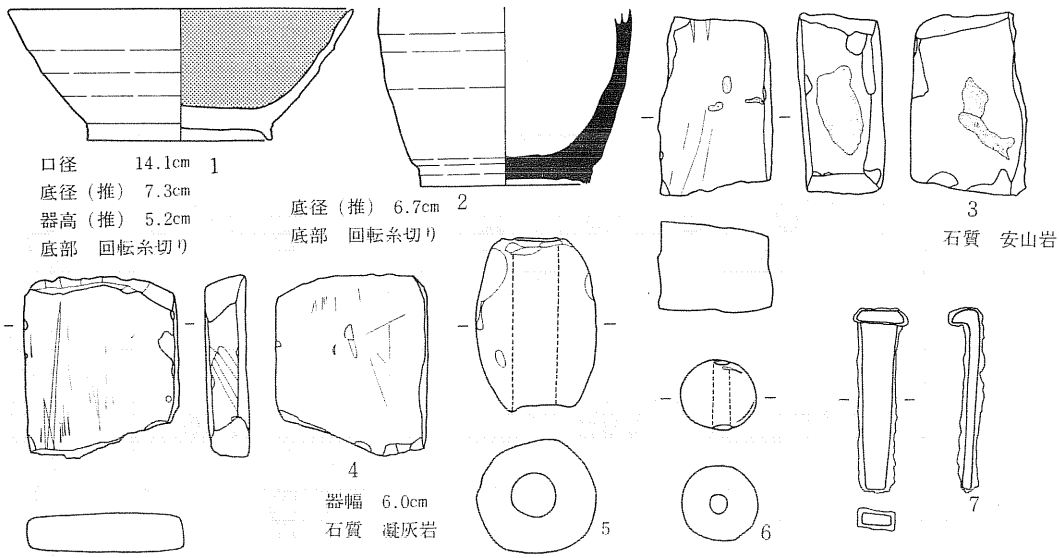
ＨＦ・ＨＧ16グリッド地山面で確認した。径124cmの円形で、深さ38cmである。底面は平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりである。１層中に土師器と思われる微小片が含まれていたが、定かではない。

ＳＫ02（第51図、第８図版）

ＩＪ27・28グリッド地山面で確認した。長径97cm、短径87cmの楕円形で、深さ26cmである。底面は平坦であるが南東側がやや浅くなり、壁はほぼ垂直である。



第49図　ＳＢ03～05掘立柱建物跡



第50図　遺構外出土遺物(平安)

ＳＫ03（第51図、第８図版）

ＩＦ・ＩＧ25グリッド地山面で確認した。長径150㎝、短径121㎝の楕円形で、底面は中央部が55㎝と最も深い丸底状を呈し、そのまま壁が立ち上がる。

ＳＫ06（第51図、第８図版）

ＪＡ30グリッド地山面で確認した。調査範囲外に約½が入り込んでいるものと思われ、最大径96㎝、深さ11㎝である。底部は全体に丸味を帯び、壁は非常に緩やかである。

ＳＫ07（第51図、第８図版）

ＫＡ39・40の地山面で確認した。ＳＤ10によって切られており、全容は不明であるが、おおよそ長径130㎝、短径98㎝の楕円形で、深さ16㎝である。底面は平坦で壁は緩やかである。

ＳＫ08（第51図、第８図版）

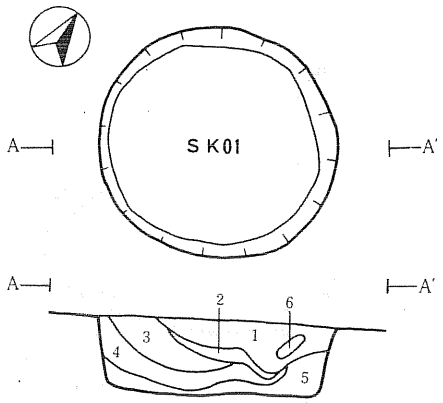
ＬＢ45グリッド地山面で確認した。長径119㎝、短径92㎝、深さ12㎝で底面は平坦、壁は緩やかである。底面に炭化物が厚さ３㎝ほどで一面にあり、その下には焼土も若干認められた。

ＳＫ10（第52図、第９図版）

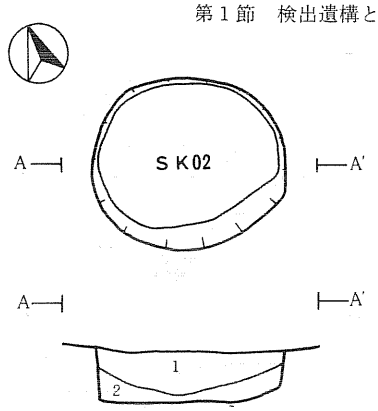
ＬＤ47グリッド地山面で確認した。長径119㎝、短径73㎝の不整形である。南側は浅く、底面も平坦であるが中央部から落ち込み、北側半分は47㎝の深さでピット状になっている。北側の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

ＳＫ11（第52図、第９図版）

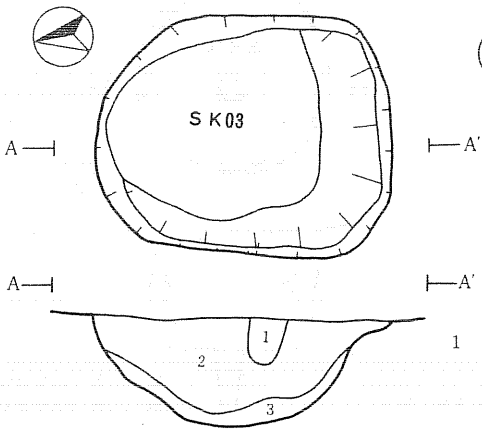
ＬＨ49グリッド地山面で確認した。長径154㎝、短径109㎝の楕円形で、深さ28～33㎝である。底面は中央部の低い丸底で、壁は垂直に近い立ち上がりを示す。



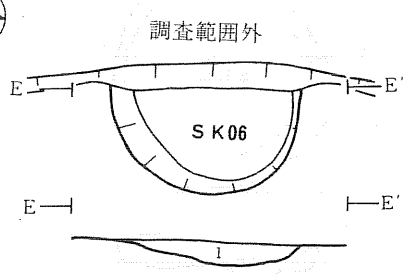
1　黒　色（10Y R2/1）明赤褐色土（5Y R5/6）微量混入
2　黄褐色(2.5Y 5/4)　暗褐色土（10Y R3/3）混入
3　暗褐色（10Y R3/3）黄褐色土(2.5Y 5/4)　混入
4　黒褐色（10Y R3/2）黄褐色土(2.5Y 5/4)　混入
5　暗褐色（10Y R3/4）
6　暗褐色（10Y R3/3）黄褐色土(2.5Y 5/4)　少量混入



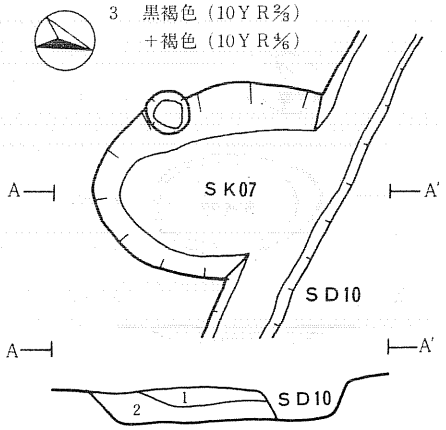
1　暗 褐 色（10Y R3/4）黄褐色土（10Y R5/6）微量混入
　＋黒褐色（10Y R3/3）
2　褐　　色（10Y R4/6）黒褐色土（10Y R2/3）微量混入



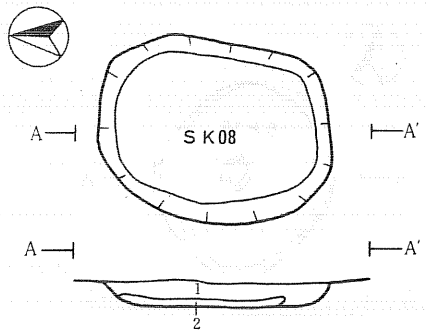
1　暗褐色（10Y R3/3）黄褐色土（10Y R5/6）少量混入
2　黒褐色（10Y R2/3）黄褐色土（10Y R5/6）微量混入
3　黒褐色（10Y R2/3）
　＋褐色（10Y R4/6）



1　褐　色（10Y R4/4）砂質、明黄褐色土（10Y R6/6）粒子混入



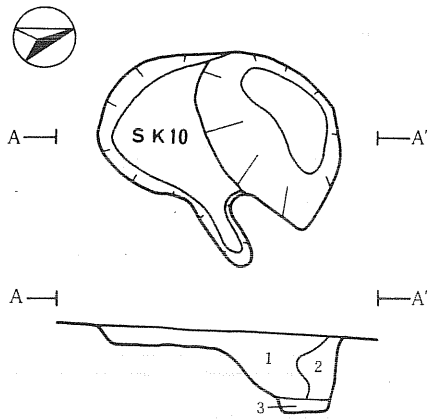
1　黒褐色（10Y R3/1）
2　黒褐色（10Y R3/2）



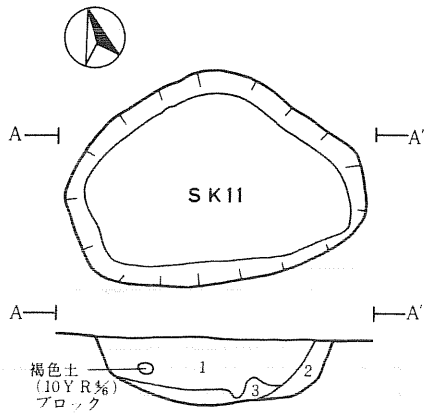
1　黒褐色（10Y R3/2）褐色土（10Y R4/6）粒子微量混入
2　炭化物

第51図　SK01～03・06～08土壙

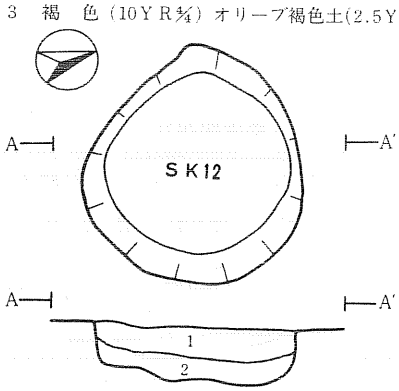
0　1 m



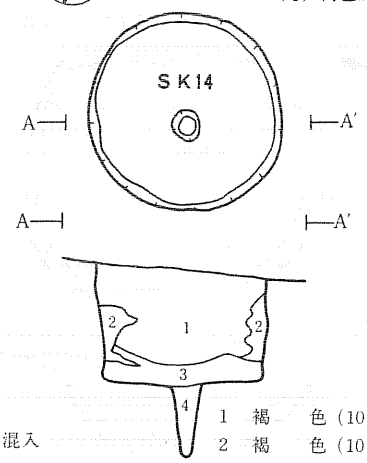
1　黒褐色（10Ｙ Ｒ2/2）褐色土（10Ｙ Ｒ3/4）微量混入
2　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/3）褐色土（10Ｙ Ｒ3/4）多量混入
3　褐　色（10Ｙ Ｒ3/4）オリーブ褐色土(2.5Ｙ 5/3）混入



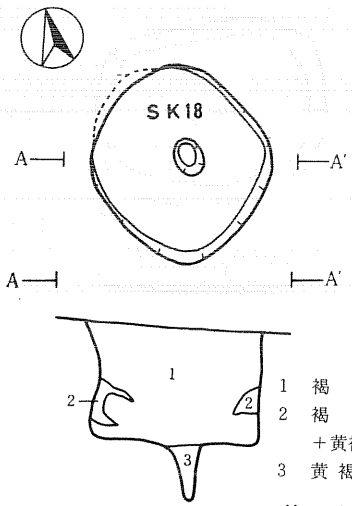
1　黒褐色（10Ｙ Ｒ3/2）
2　暗褐色（10Ｙ Ｒ3/4）
3　褐　色（10Ｙ Ｒ3/4）褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）混入



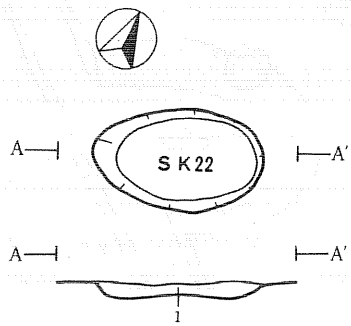
1　黒褐色（10Ｙ Ｒ2/3）黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/8）微量混入
2　黒褐色（10Ｙ Ｒ2/3）黒褐色土（10Ｙ Ｒ3/1）、黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/8）混入



1　褐　　色（10Ｙ Ｒ4/6）
2　褐　　色（10Ｙ Ｒ4/6）
　＋黄褐色（10Ｙ Ｒ5/8）
3　褐　　色（10Ｙ Ｒ4/6）
4　黄褐色（10Ｙ Ｒ5/6）砂質



1　褐　　色（10Ｙ Ｒ4/6）
2　褐　　色（10Ｙ Ｒ4/6）
　＋黄褐色（10Ｙ Ｒ5/8）
3　黄 褐 色（10Ｙ Ｒ5/6）砂質



1　褐　色（10Ｙ Ｒ3/4）黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/6）微量混入

0　　1 m

第52図　ＳＫ10～12・14・18・22土壙

ＳＫ12（第52図、第９図版）

ＬＩ・ＬＪ51グリッドの地山面で確認した。直径110㎝の円形で、深さ21～28㎝を測る。底面には若干凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

ＳＫ14（第52図、第９図版）

ＯＤ54グリッド内で確認された。径100㎝ほどの円形で、深さ52㎝、底面は平坦であるが、ほぼ中央部に径16㎝、深さ30㎝の小ピットがある。壁は垂直に立ち上がる。

ＳＫ18（第52図、第９図版）

ＯＦ53・54グリッド地山面で確認した。径88㎝ほどの円形で、深さ58㎝を測る。底面は平坦で、中央部に径12㎝、深さ28㎝の小ピットがある。壁は垂直に立ち上がる。ＳＫ14と酷似する。

ＳＫ22（第52図、第10図版）

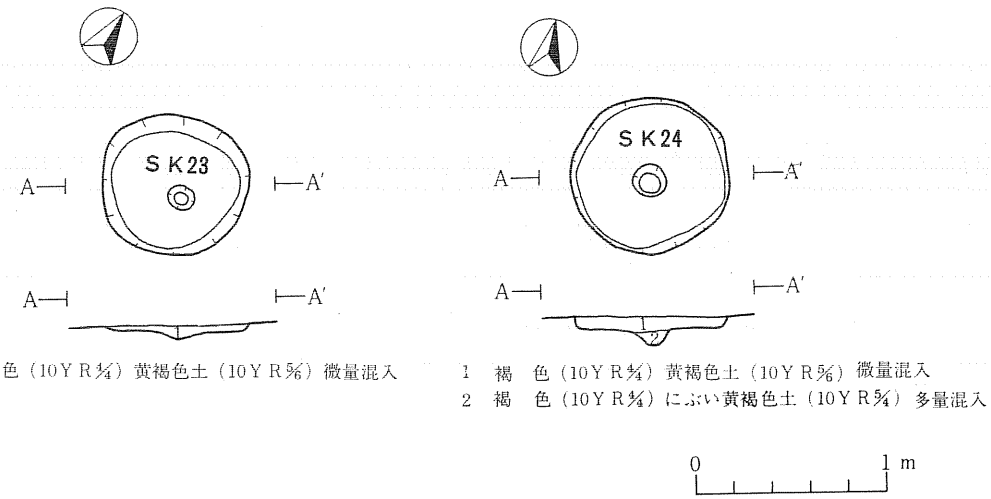
ＰＡ53グリッド地山面で確認した。長軸86㎝、短軸52㎝の楕円形で、深さ６～８㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。隣接するＳＫ21と長軸方向がほぼ一致する。

ＳＫ23（第53図、第10図版）

ＰＡ54グリッド内の地山面で確認した。径78㎝ほどの円形で、深さは非常に浅く、３～６㎝しかない。底面は平坦で、壁は外方に傾斜している。底面中央部にピット状の浅い落ち込みがある。

ＳＫ24（第53図、第10図版）

ＰＡ54グリッド内の地山面で検出した。径84㎝ほどの円形で、深さは６～15㎝と浅く、底面はほぼ平坦で、中央に径16㎝、深さ８㎝のピット状の落ち込みを有する。ＳＫ23に酷似する。



第53図　ＳＫ23・24土壙

②　溝

ＳＤ01～08（第54図、第12図版）

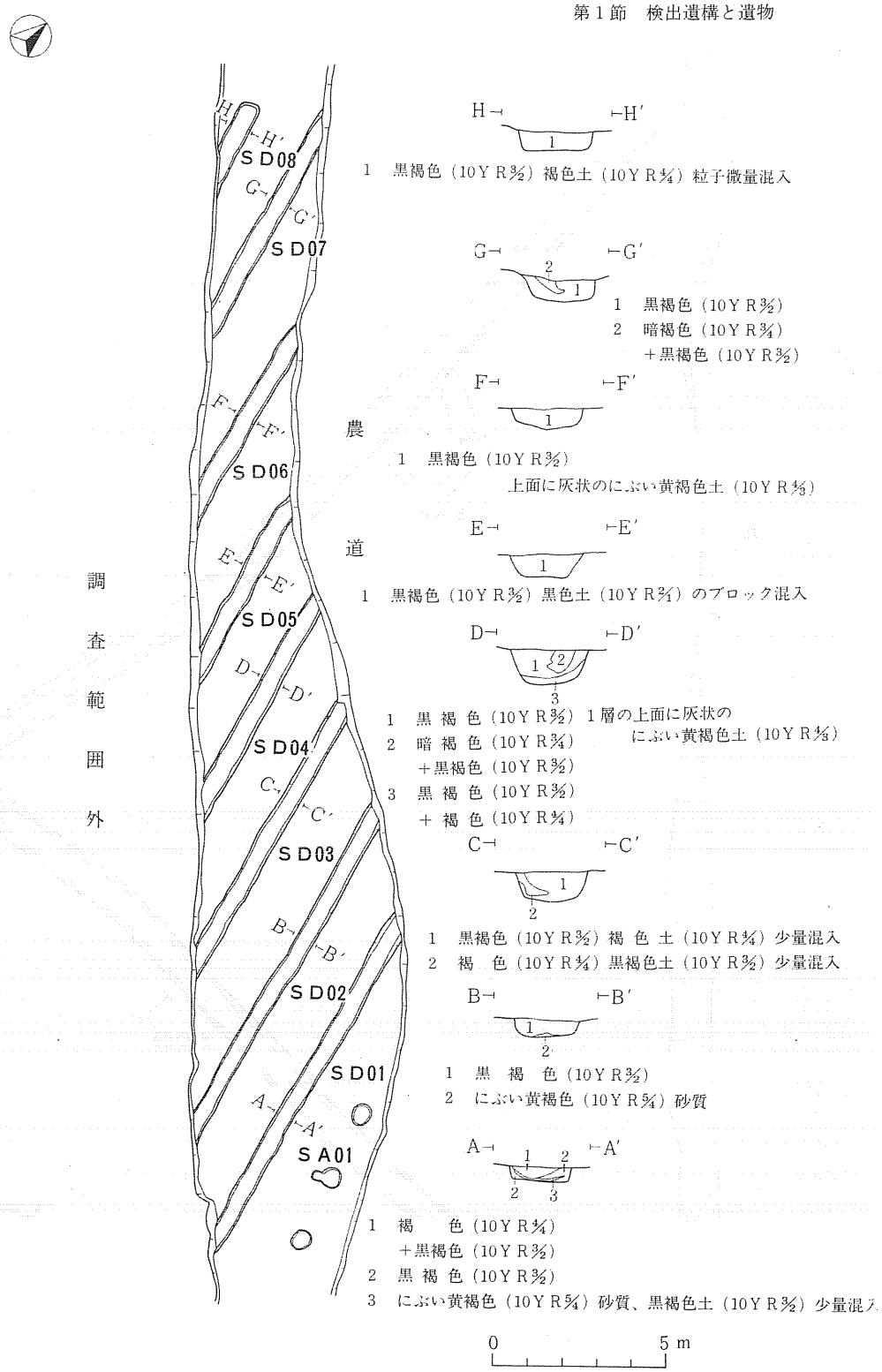
発掘区域東端に並ぶ８条の溝である。幅52～60cm、深さ10～25cm、140～180cmの間隔でＮ—20°—Ｗの同一方向に並んでいる。北側に幅4.5ｍの農道が東西に走るが、この農道の北の調査区域内には溝は検出されず、ＳＤ08末端部は農道南側に現われていることからＳＤ01～07の北端は農道の下にあるものであろう。が南端はいずれも調査区域外に延びており、全長は不明である。ＳＤ01東側のＳＡ01柱列と溝の方向は同一である。遺物はなく、ＳＤ01・02の溝底にはにぶい黄褐色砂質の火山灰状の土が薄く堆積している。

ＳＤ09・10（第55図、第12図版）

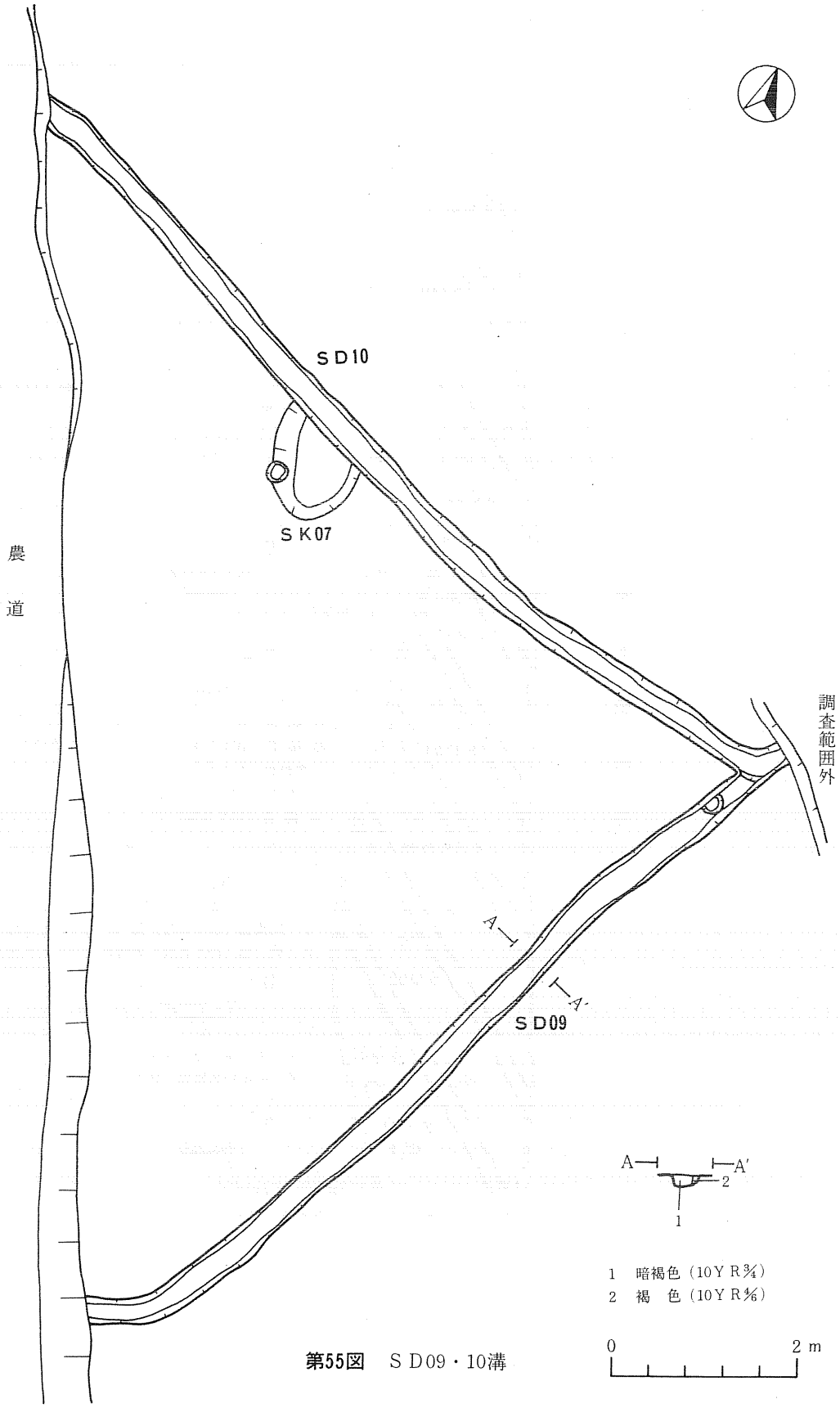
ＪＪ37～39、ＫＡ39・40グリッドの褐色土層上で確認された２本の溝であるが、全容は不明である。幅24～32cm、深さ12～20cmで、両者はほぼ直角に交わっている。交点ではＳＤ10の溝底の方が深い。ＳＤ10はＫＡ40グリッド内でＳＫ07を切っている。

ＳＤ11・12（第38図）

ＳＩ04の南壁に沿う形で幾分カーブするＳＤ11に、ＳＤ12が直角に交わっている。幅は20～30cm、深さ７～10cmほどである。ＳＤ11はＳＩ04の南壁の途中で消失するが、ＳＩ04の西壁とみなしたものがこの延長かも知れない。ＳＤ12はＳＩ04の覆土上面より掘り込んで、床面と焼土を切っている。



第54図　ＳＤ01～ＳＤ08溝



第55図 SD09・10溝

第５章　ま　と　め

第１節　遺構・遺物の検討

第４章に記したように、三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡からは、縄文時代、弥生時代、平安時代に渡る遺構、遺物が検出された。以下に時代ごとの若干の考察を行ってまとめとする。

１．縄文時代について

縄文時代の竪穴住居跡としては５棟が検出されている。住居跡は同時期のフラスコ状ピットや屋外炉も含めて、いずれも調査区域の西端部に集中している。これらの遺構内から出土した土器の多くは中期終末期の土器であり、遺構群はこの時期の遺跡として認識されている是ケ沢遺跡の一部を構成するものと考えられる。他に微量ながら中期前葉の円筒上層ａ、ｃ式土器が出土しており、これらは主として是ケ沢遺跡や、その西方の箱井銭神沢遺跡に関連を有するものであろう。

フラスコ状ピットは舌状に張り出す台地の、沢に臨んだ斜面の上部にあり、住居群のある台地縁辺部に構築される(註１)例と共通する位置にある。このことはまたフラスコ状ピットの位置が、三十刈Ⅰ及び是ケ沢遺跡の中期終末期の集落の、東側限界を示していると言えよう。実際、三十刈Ⅱで検出されたフラスコ状ピット１基は、後期に入る時期の遺構で、この方面に中期の遺構は検出されていない。

三十刈Ⅰ、是ケ沢遺跡と近似する時間帯に存在したと考えられる北浦泉野遺跡(註２)は、昭和49年に調査され、石組複式炉を有する円形の竪穴住居跡が２棟完掘されている。その柱穴の配列は三十刈Ⅰ遺跡のＳⅠ11の柱穴配置によく類似しているが、炉は小さな地床炉である。この違いが単なる個体差なのか、微妙な時間差に基づくものなのか興味が持たれるが、炉の検出された住居跡は１棟のみであるから、炉形態の違いを強調することはできかねる。

青森、秋田県における大木10式土器は、仙台湾の大木10式とは異なり、区別して独立した一型式として扱われるという指摘がある(註３)。三十刈Ⅰ遺跡出土の土器は小破片が大部分であるが、窺い知ることのできる器形には胴部が膨らみ、緩やかに外反する口縁部を有する深鉢、口縁部が大きな山形となる鉢があり、太い沈線による区画内への充塡縄文手法を駆使した流動的文様が描かれ、その構成は縦よりも横方向への展開が認められる(註４)。地文に撚糸文の使用、隆線あるいは鰭状隆線、口縁部の隆線に沿う連続刺突文も見られ、明らかな大木10式土器の表徴が看取される。千畑村内村遺跡(註５)や、秋田市湯の沢Ｂ遺跡(註６)などの調査がなされ、資料も増えていること

から、前述の指摘の検証はぜひ必要であろう。

岩手県の太平洋側では大木10式直後に門前式が編年されている。秋田県側の大木10式土器が地方色を持つとは言え、仙台湾と同一の指標によってａ～ｅに分類される(註7)ならば、その直後に門前式に類する土器も存在していて不思議はない。遺構外出土の第28図５の土器や、秋田市坂ノ上遺跡出土土器がこれに当たるであろう。連鎖隆起線が消失し、沈線のみによる文様であることから、門前式の概念規定(註9)に従うならば、「後・門前式」よりもさらに後続する土器に当たり、柳沢氏の言う「門前Ⅱ式」(註10)に概当する。貝鳥貝塚Ⅱ群２類(註11)や、八天Ⅲ群３類(註12)に相当する土器である。前記泉野遺跡では、「門前Ⅰａ式」にあたる、口縁部から垂下する連鎖隆起線のある土器も採集されているから、こうした土器はまぎれもなく存在している。該種土器は中期終末の土器と、男鹿半島内でも出土している十腰内Ⅰ式土器(註13)との間を埋める土器型式の一つとなろう。しかし、まだ資料不足であり、新型式を設定するには至っていない。

第Ⅱ章で述べたように、男鹿市五里合南浜野Ａ遺跡では下位砂丘砂の上に厚さ50～60cmの黒砂層があり、その上を現砂丘砂が覆って半島北部砂丘を形作っている。この黒砂層出土として図示された土器には大木10式ｃ、ｄ類(註14)かと判断される土器がある。このことは、少くとも縄文時代中期の最終末の時期には、既に五里合盆地が形成され、現在の地形に近い状況にあったことを示している。

２．弥生時代について

弥生時代の遺構としては土壙が５基検出されただけであり、土器もＳＫ20出土土器以外は小破片にすぎない。器形には長頸甕、壺、浅鉢、蓋が認められ、文様には横走する平行沈線文、鋭い鋸歯文、列点文、刺突文が見られる。また器面に刷毛目調整を施しており、「志藤沢式土器」(註15)に含められる土器群である。

長頸甕は二枚橋式や、宇鉄Ⅱ遺跡の土器にも見られるが、「田舎館２群」(註16)において盛行し、北海道では「恵山Ⅲ期」(註17)の土器がこれに併行する。しかし「田舎館３群」、「恵山Ⅳ期」に至ると長頸甕の頸部はほとんど失なわれ、胴部から口縁部が外傾するものへと変化する。

鋸歯文は田舎館３群において盛行する文様であることを考えると、ＳＫ20出土の長頸甕は田舎館２、３群両方の特徴を合わせ持つ土器と言うことになる(註18)。また、ＳＫ16出土の第30図２の土器は田舎館３群に多出する外傾する口縁部である。

三十刈Ⅰ遺跡出土の土器は鋸歯文が盛行するが、若美町横長根Ａ遺跡出土(註19)の土器には皆無に近い。横長根Ａ出土の土器は「志藤沢式」の特徴を多く保有してはいるが、反面、「志藤沢式」のメルクマールの一つとも言うべき鋸歯文や、沈線による連繋菱形文を伴わないという特徴がある。鋸歯文の盛行が「田舎館３群」や「恵山Ⅳ期」であることを思えば、横長根Ａ遺跡出土の土器は志藤沢遺跡出土土器の中でも古い部分にあたり、三十刈Ⅰ遺跡出土の土器はその新し

い部分を占めると言うことができよう。編年的には横長根Ａ→三十刈Ｉの序列が成り立つ。

ＳＫ20出土の土器は、田舎館２、３群や恵山式の一部（南川Ⅲ・Ⅳ群[註20]、アヨロⅡ群２ｂ類、３類[註21]）と共通点を持っており、その背後に北方との強い関連性を窺わせる土器である。しかしこの土器は外面には縄文施文前に口縁部から底部に至るまで縦位に、内面には横位に刷毛目調整を施しており、在地の土器であることは疑い得ない。また、この土器の口縁部から胴下半部に至る内、外両面及び断面に７個の籾圧痕が付着ないし封入されており、胎土内に内包されているものを加えるならば、籾圧痕の数は優に２桁を越えるであろう。これが人為的に付着ないしは胎土内に封入させたものであるならば、こうした土器がイネの豊穣を願う信仰に基づくものとする仮説[註22]は有力である。

3　平安時代について

竪穴住居跡は10棟検出したが、基本的には壁に接する柱を持ち、壁溝を有し、東壁あるいは南壁に煙道の極めて短いカマドを有する点で、各々近縁の形態的特徴を示している。が、ＳＩ05の柱穴位置と掘り込みは、他と比較して特異である。

遺物はＳＩ01を除いて非常に乏しい。ＳＩ01からは土師器、須恵器の坏、甕が出土したが、このうち坏では須恵器が圧倒的に多く、土師器で図示し得たものは１点のみである。底部切り離しには回転糸切りが10点、回転ヘラ切りが４点認められる。切り離し後の再調整の施されたものは１点もない。こうした坏は三十刈Ｉ・Ⅱ遺跡の北東5.5㎞にある海老沢窯跡[註23]出土の土器に近似している。

土師器甕にはロクロ成形が多いが、非ロクロ成形のものも含んでいる。また、第34図26の砲弾形の甕は上半はロクロ成形であるが、下部は内、外面ともにタタキによる成形である。口縁部は「く」の字状に外傾し、口唇部は直立している。この様な甕は払田柵跡第６次調査で住居内から[註24]、第７次調査でＳＫ60土壙内から嘉祥二年(849年）銘のある木簡と共に出土している[註25]。秋田城では第７次調査のＳＩ 217竪穴住居跡から回転糸切り離しでヘラケズリのある赤褐色の坏、及び回転ヘラ切り離しで無調整の須恵器坏と伴出している[註26]。後城にも類例があり、報告書では竪穴住居跡をＩ～Ⅳ類に分類しているが、このうちⅣ期に属する竪穴住居跡から出土しており、その年代を払田柵例と秋田城例を考慮して９世紀前期後葉頃とみなしている[註27]。

他に横手市物見窯跡[註28]にも例があるが、坏の年代も考慮するならば、三十刈Ⅱ遺跡ＳＩ01竪穴住居跡の年代はおおよそ９世紀前葉と推定される。ヘラミガキを外面全体に施した土師器坏の出土したＳＩ09は、これよりも遡るものであろう。また、ＳＢ03、05掘立柱建物跡は確実にＳＩ05よりも新しい時期のものであるが、柱穴より赤褐色の土師器坏が出土していることから、竪穴住居跡の年代と大差はないであろう。

こうした平安期の集落は三十刈Ⅱ遺跡のある台地のほぼ全面に広がるものと考えられる。

註１　永瀬福男「秋田県内におけるフラスコ状ピットについて」『秋田地方史論集』　半田教授退官記念会編　1981年　永瀬氏は集落内におけるフラスコ状ピットの位置を３分類し、住居群の外側に群集する例をＡパターンとし、杉沢台、大畑台Ｉ期、館下ＩにおけるＡグループ、山館上の山、宝竜前の諸例を掲げている。

註２　小(児)玉　準『泉野遺跡発掘調査概報』　男鹿市教育委員会　1976年

註３　柳澤清一「大木10式土器論」『古代探叢一滝口宏先生古稀記念考古学論集一』　滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会編　1980年　柳沢氏は、「大木10式の影響を受けて成立した地方土器は、青森・秋田・山形・新潟に広く分布する。青森・秋田にはこれの纏まった資料がある。」「これは明らかに仙台湾の大木10式の組成とは異なる。」「通常土器組成の明瞭な差異は、土器の系統差の反映とみられる。したがって青森・秋田の地方土器は大木10式と区別し、独立した一型式として扱わねばならないであろう。」と述べている。

青森県では県南地方で大木９・10式そのものの土器が、東北北部の大木系土器に伴出するのに対し、他地域では大木式そのものの土器が出土することはあまりないということも指摘されている。（鈴木克彦「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』　第８号　1976年）

註４　丹羽　茂「大木式土器」『縄文文化の研究』　第４巻　縄文土器Ⅱ　1981年　大木９式土器と10式土器の相違には、９式の場合、渦巻文、楕円文、「∩」文が縦方向への流れを示すのに対し、10式の場合、これらから変化した「Ｕ」状、「Ｓ」状、波形状の文様が、横方向へ流れるという文様構成原理上の相違があり、これが大木10式の「第Ｉ段階」から「第Ⅱ段階」へ至るにつれて強められるが、「第Ⅲ段階」に至ると文様の一部が省略され、横方向への文様展開が制限されるという。

註５　大野憲司『内村遺跡発掘調査報告書』　秋田県教育委員会　1981年

註６　高橋忠彦・他「湯ノ沢Ｂ遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　秋田市教育委員会　1983年

註７　註３柳澤論文。

註８　菅原俊行・他「坂ノ上遺跡」『小阿地　下堤遺跡坂ノ上遺跡発掘調査報告書』　秋田市教育委員会　1976年　第10類、第13類土器

註９　及川　洵・他『門前貝塚』　陸前高田市教育委員会　1974年

註10　柳澤清一「称名寺式土器論（前篇）」『古代』　第63号　1977年

註11　草間俊一・金子浩昌編『貝鳥貝塚一第４次調査報告一』　岩手県花泉町教育委員会、岩手県文化財愛護協会　1971年

註12　本堂寿一『八天遺跡』　北上市教育委員会　1979年

註13　男鹿市五里合長者森Ａ遺跡（奈良修介・磯村朝次郎「八郎潟周辺の遺跡」『八郎潟の研究』　秋田県教育委員会　1965年）、男鹿市北浦苗代沢遺跡(磯村朝次郎「男鹿半島周辺の遺跡および遺物」『男鹿半島研究』　第１号　1972年）から出土している。

註14　註３柳澤論文

註15 a 半田市太郎「志藤沢遺跡発掘調査報告」『秋大史学』　第9号　1959年

b 伊東信雄「東北北部の弥生式土器」『文化』　第24巻第1号　1960年

註16 a 伊東信雄・須藤　隆『瀬野遺跡』　東北考古学会　1982年

b 須藤　隆「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢Ⅰ』　芹沢長介先生環暦記念論文集刊行会　1983年

c 須藤　隆「北辺の弥生文化」『縄文土器大成5―続縄文』　1983年

註17　註15 b に同じ

註18　須藤　隆氏は註16 a ・ b 論文において、志藤沢式、宇津ノ台式における、田舎館2群と3群の両要素の複合する現象を指摘している。

註19　昭和57年～58年、若美町教育委員会が調査。

註20 a 高橋和樹・他『瀬棚南川遺跡』　瀬棚町教育委員会　1976年

b 羽賀憲二・他『瀬棚南川』　瀬棚町教育委員会　1983年

註21　高橋正勝編『アヨロ　恵山文化の墓』　北海道先史学協会　1980年

註22　鈴木克彦「青森県の弥生時代土器集成　Ⅳ」『考古風土記』　第6号　1981年。鈴木氏は、「筆者は従来の籾痕のある土器を分解したなら、恐らく多くはふた桁の数の籾が内蔵されている土器が存在する可能性を強くしている。そして、その行為の所産は、信仰にあるのではないかと考えている。」―略―「つまり、米を内蔵した土器を媒体とした信仰が存在するなら、それは米に対する信仰に他ならないからである。米に対する信仰とは、これも幾通りか考えられるが、米の生産、つまり豊穣と考えるのが妥当ではないかと思うのである。」と述べている。

註23　岩見誠夫・伊藤種秋・永瀬福男『城土手遺跡緊急発掘調査報告書・海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』　秋田県教育委員会　1975年

岩見誠夫「原始古代の郷土」『若美町史』　若美町　1981年

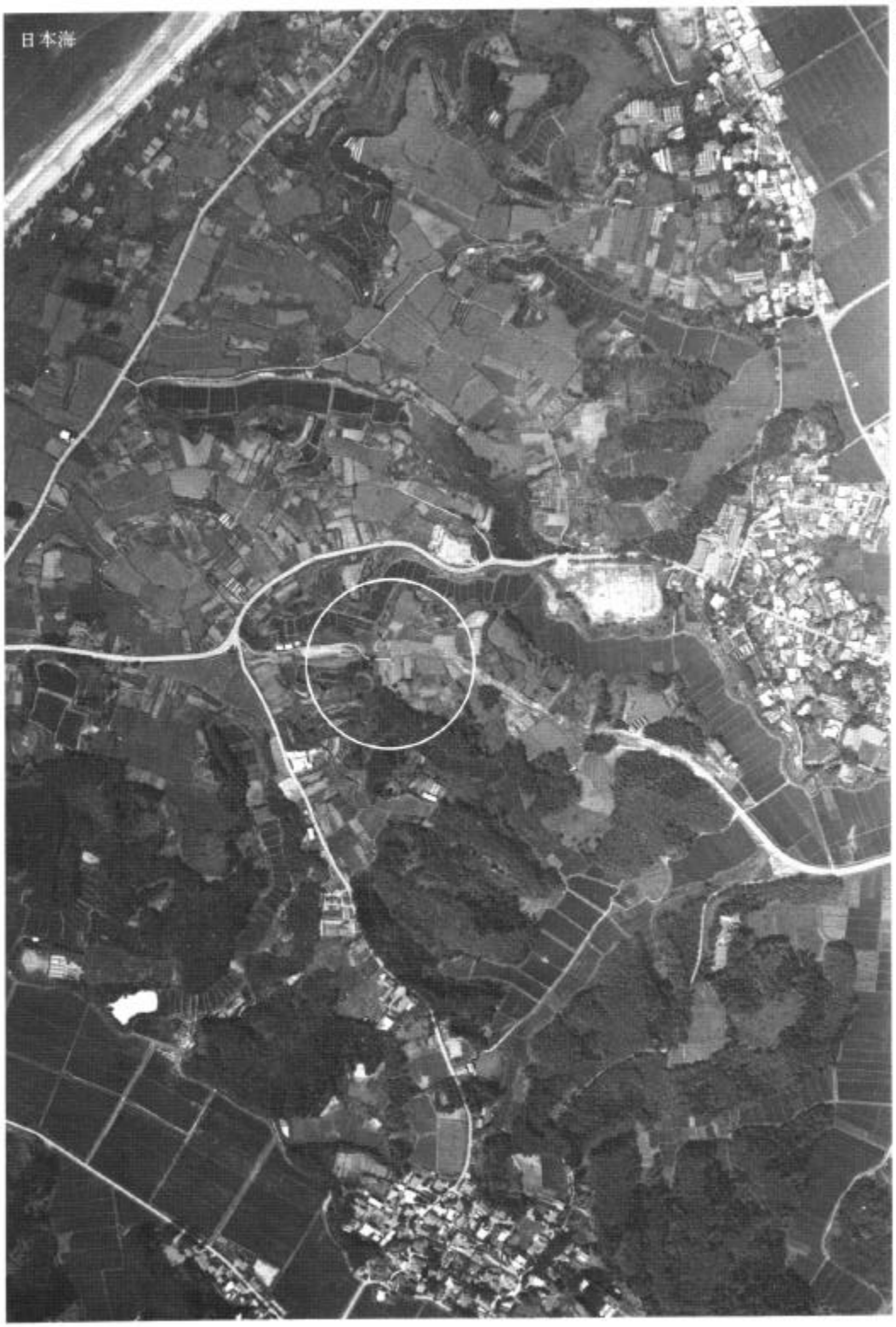
註24　船木義勝・他『払田柵跡―昭和50年度発掘調査概報―』　秋田県教育委員会　払田柵跡調査事務所　1976年

註25　註23に同じ。

註26　小松正夫・他『秋田城跡―昭和50年度秋田城跡発掘調査概報』　秋田市教育委員会　1976年

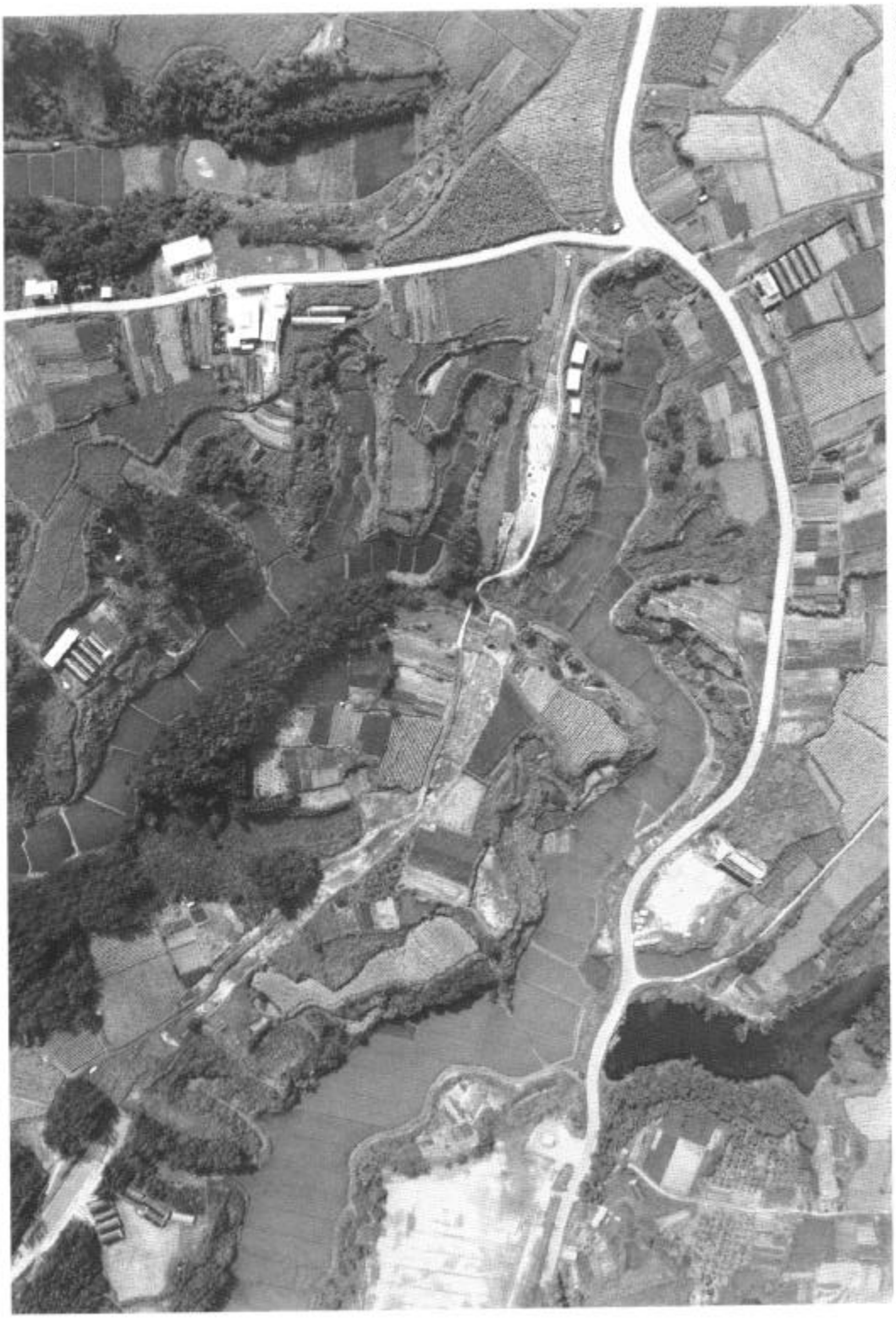
註27　小松正夫・他『後城遺跡発掘調査報告書』　秋田地所(有)　秋田市教育委員会　1981年

註28　杉渕　馨「物見窯跡について」『秋田地方史論集』　半田教授退官記念会編　1981年



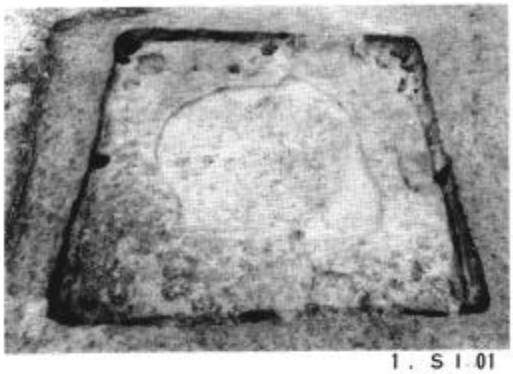
空から見た三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡　　1982年8月5日撮影

空から見た三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡　　1982年8月5日撮影



空から見た三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡　　1982年8月31日撮影

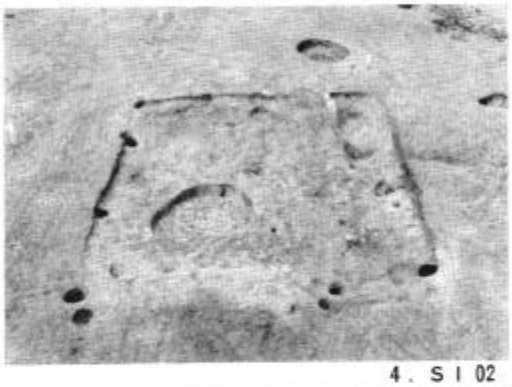
竪穴住居跡と掘立柱建物跡



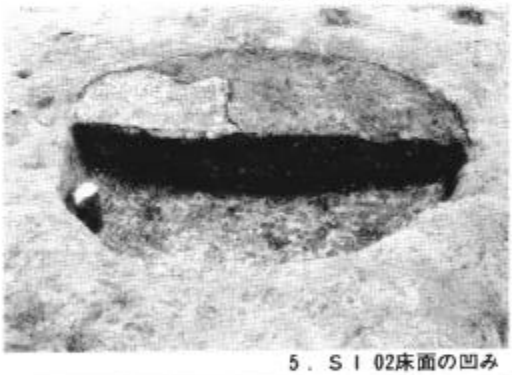
1．ＳＩ01

2．ＳＩ01遺物出土状況

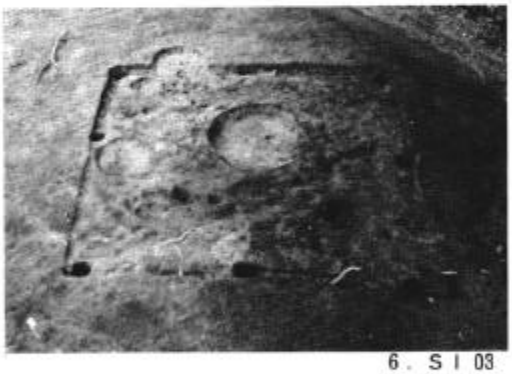
3．ＳＩ01遺物出土状況



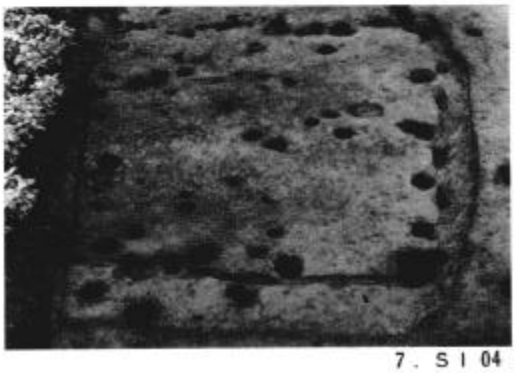
4．ＳＩ02



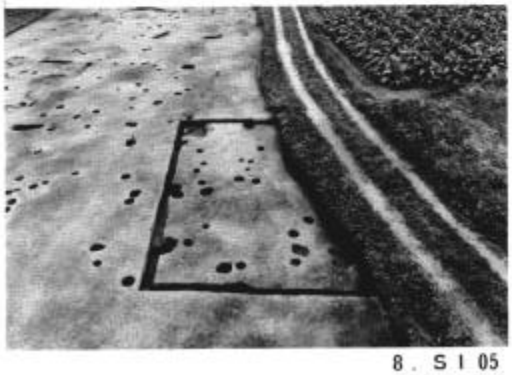
5．ＳＩ02床面の凹み



6．ＳＩ03



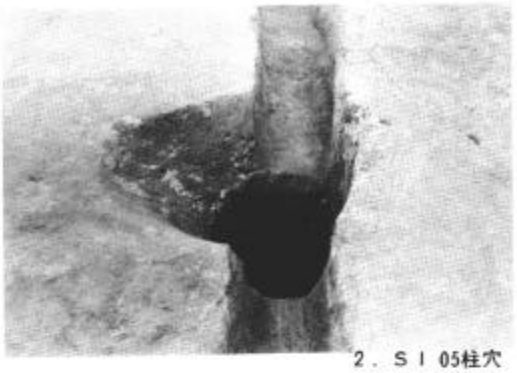
7．ＳＩ04



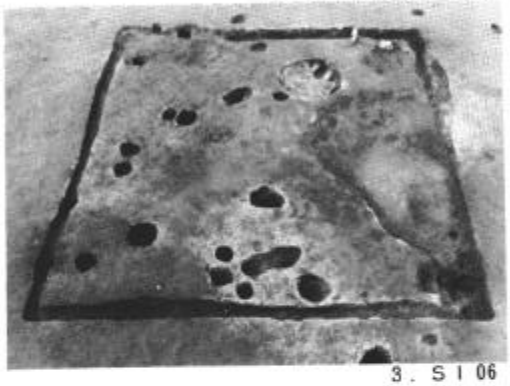
8．ＳＩ05

第六図版　遺　跡

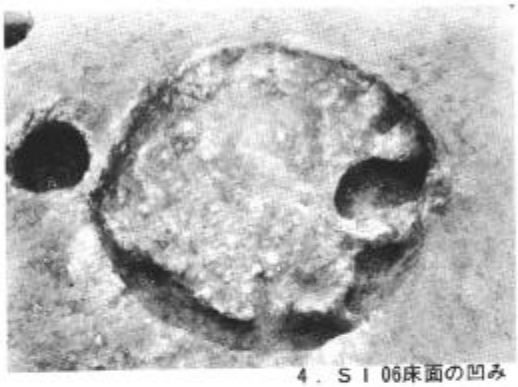
1．ＳＩ05遺物出土状況



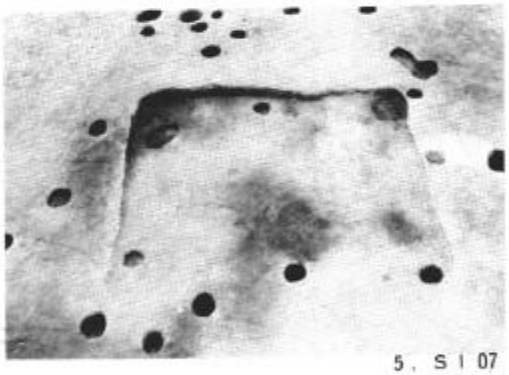
2．ＳＩ05柱穴



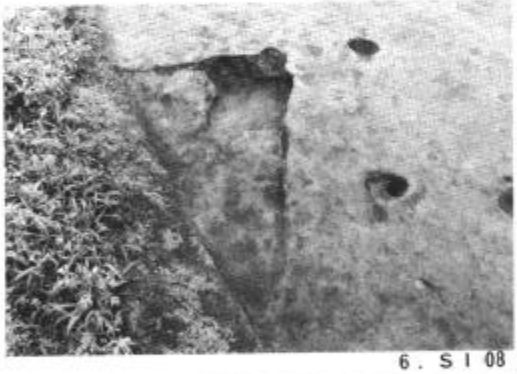
3．ＳＩ06



4．ＳＩ06床面の凹み

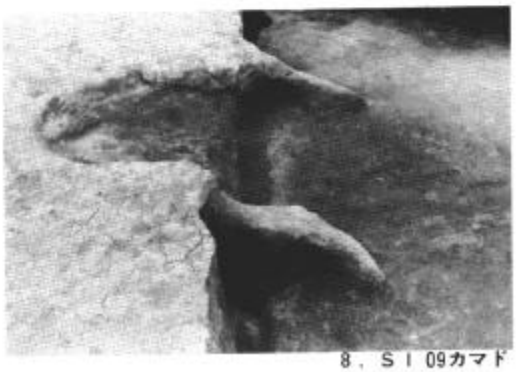


5．ＳＩ07



6．ＳＩ08

7．ＳＩ09

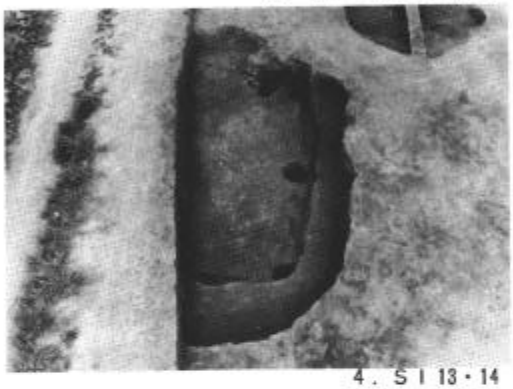


8．ＳＩ09カマド

1．SI10

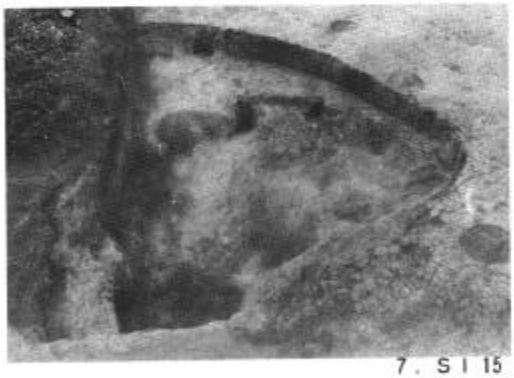
2．SI10遺物出土状況

3．SI11・12

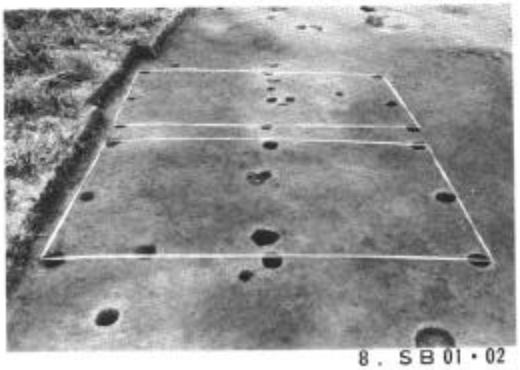


4．SI13・14

6．SI13・14土層堆積状態



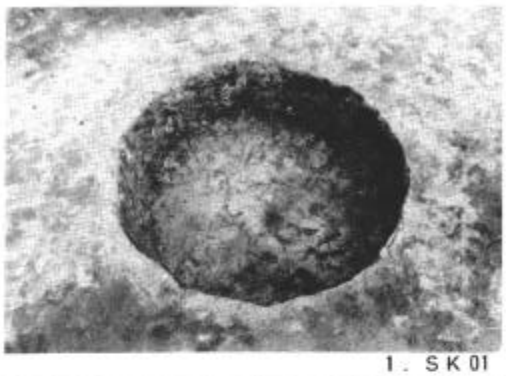
7．SI15



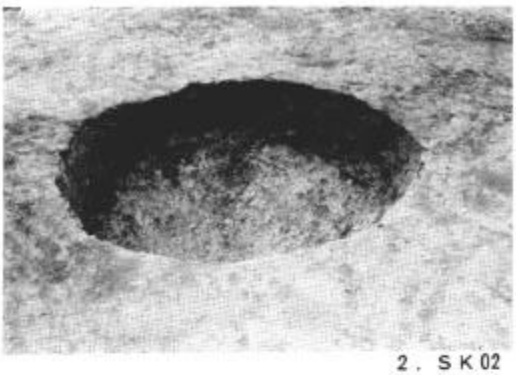
8．SB01・02

9．SB03～05

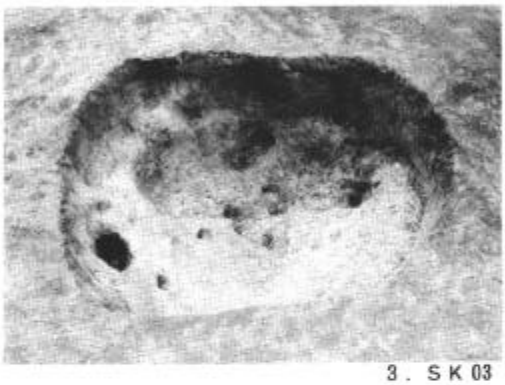
第八図版　遺　跡



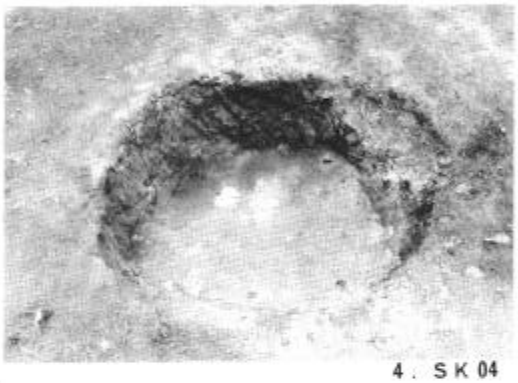
1．SK01



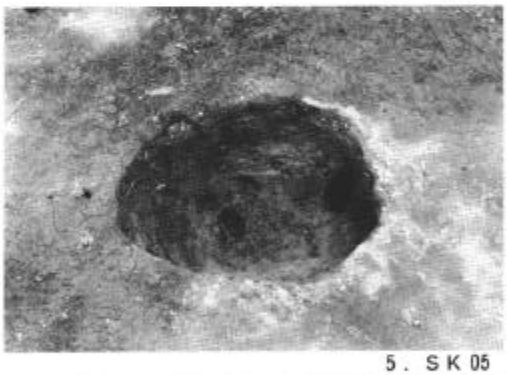
2．SK02



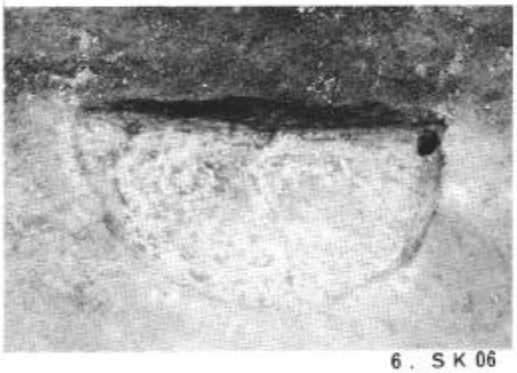
3．SK03



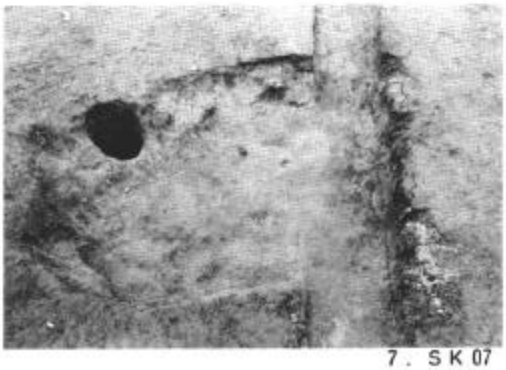
4．SK04



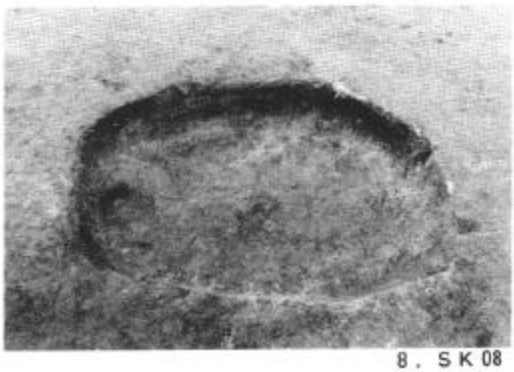
5．SK05



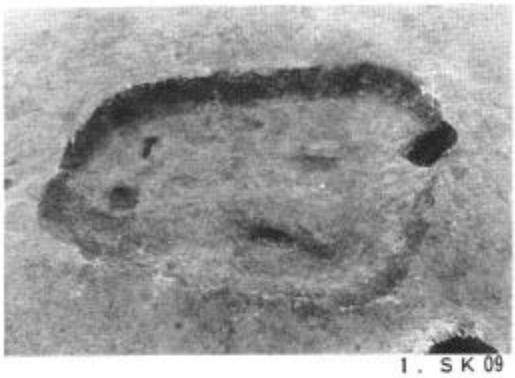
6．SK06

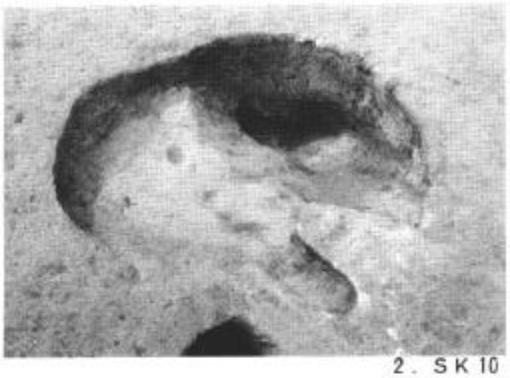


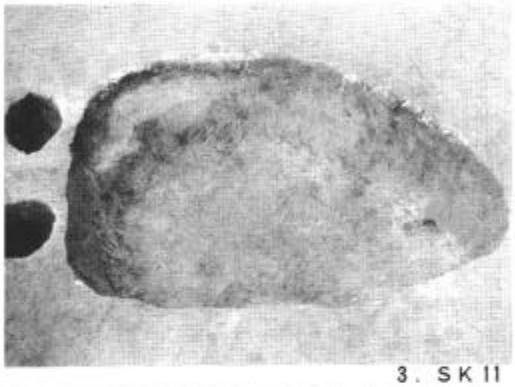
7．SK07

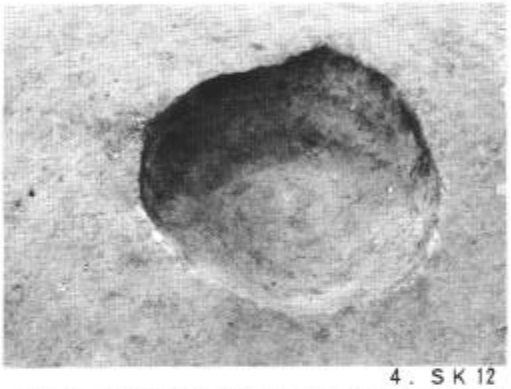


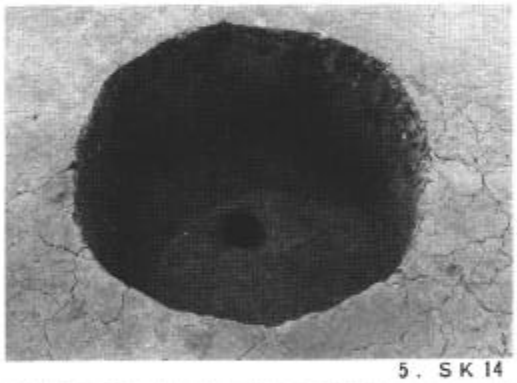
8．SK08

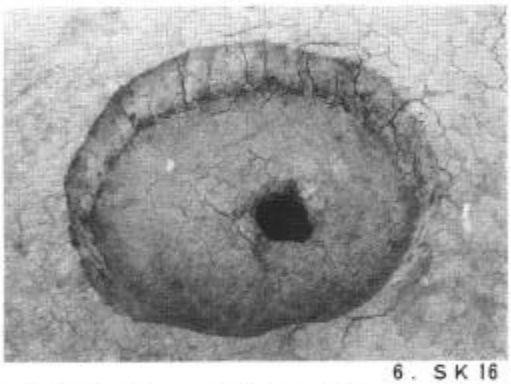

1．SK09

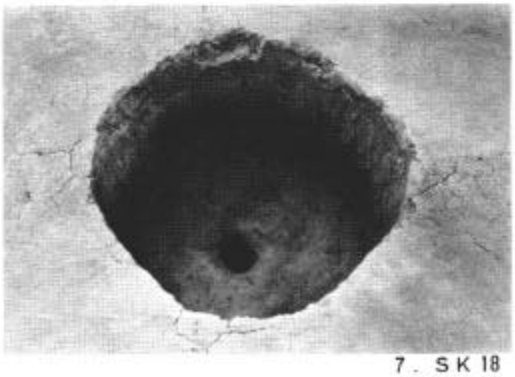

2．SK10

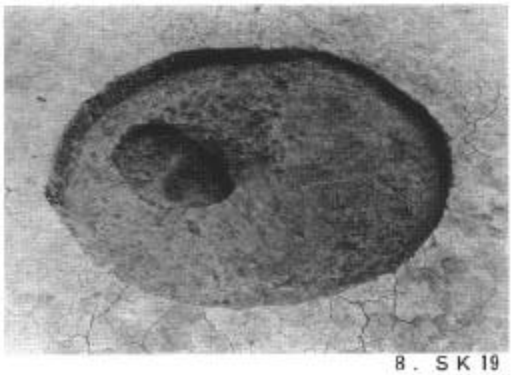

3．SK11


4．SK12

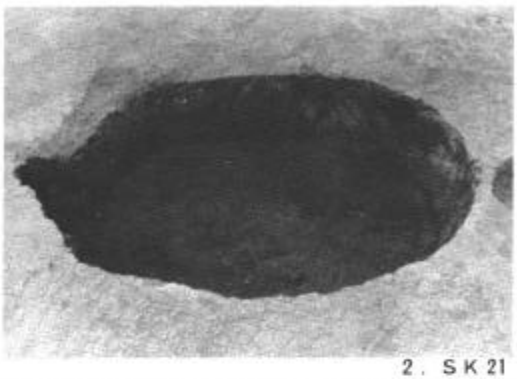

5．SK14

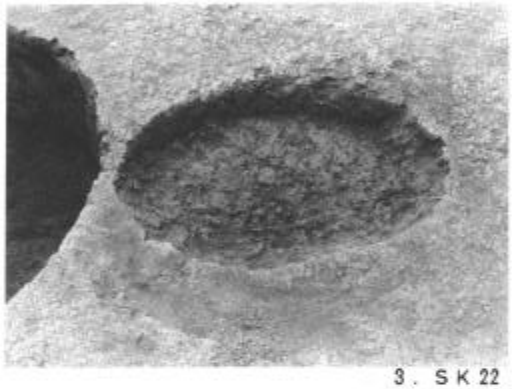

6．SK16

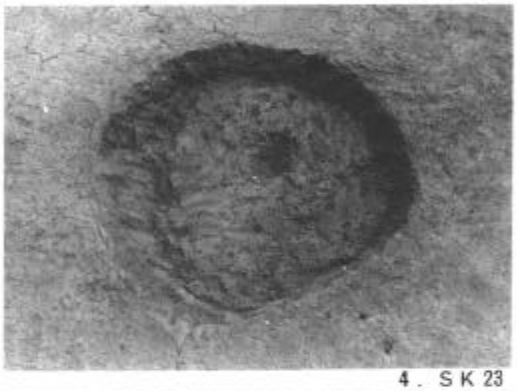

7．SK18

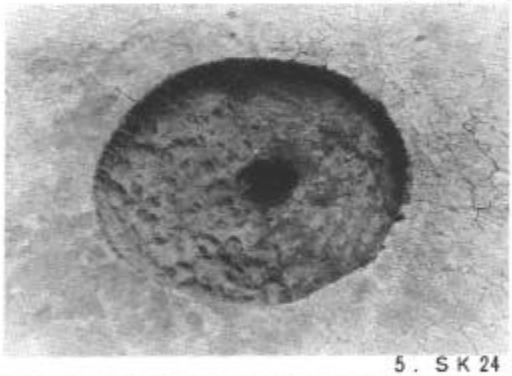

8．SK19

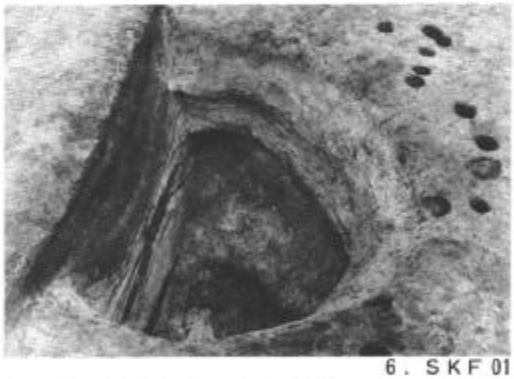
1．SK20


2．SK21

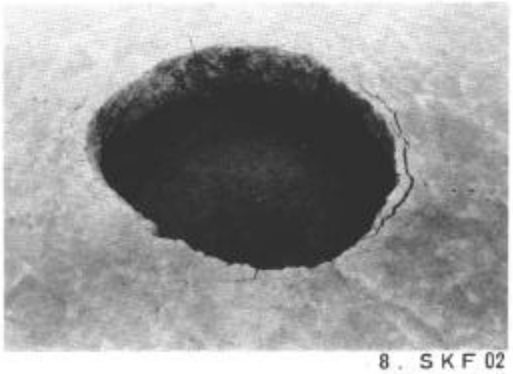

3．SK22

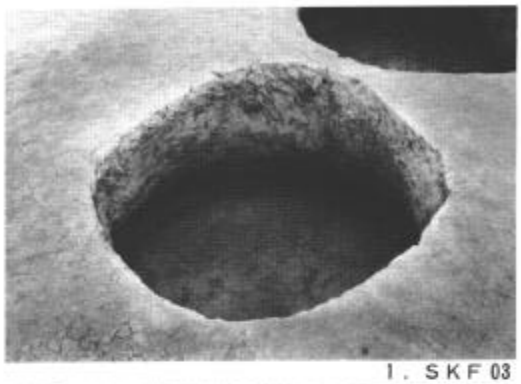

4．SK23


5．SK24

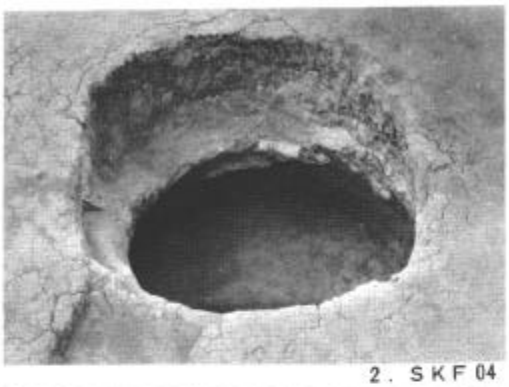

6．SKF01

7．SKF01

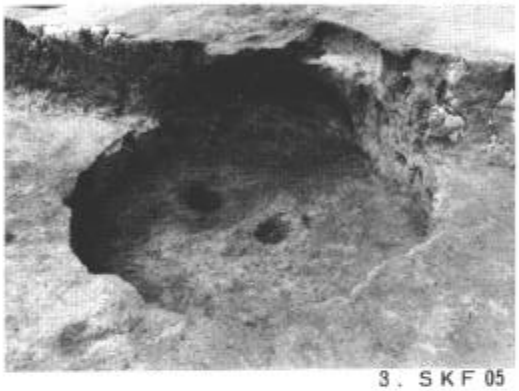

8．SKF02



1．SKF 03



2．SKF 04

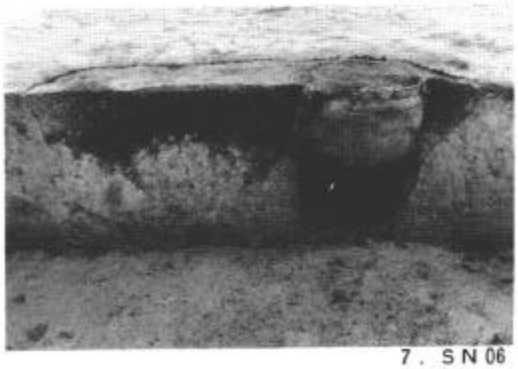


3．SKF 05

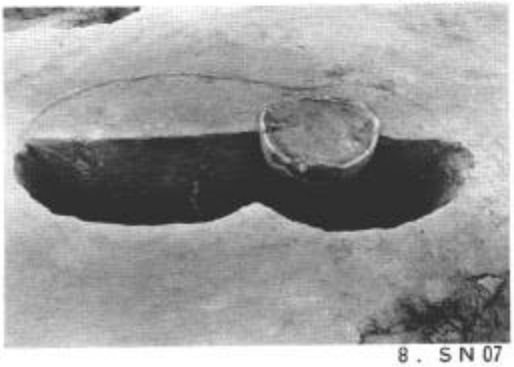
4．SN 02

5．SN 03

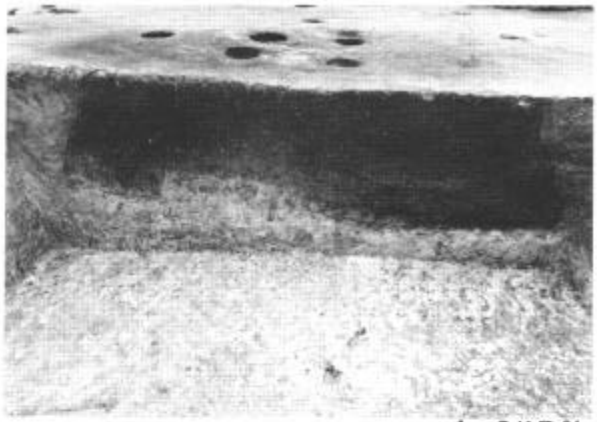
6．SN 05



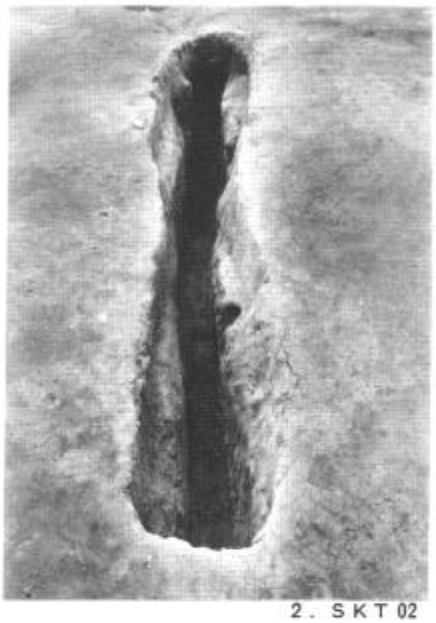
7．SN 06



8．SN 07



1．SKT01



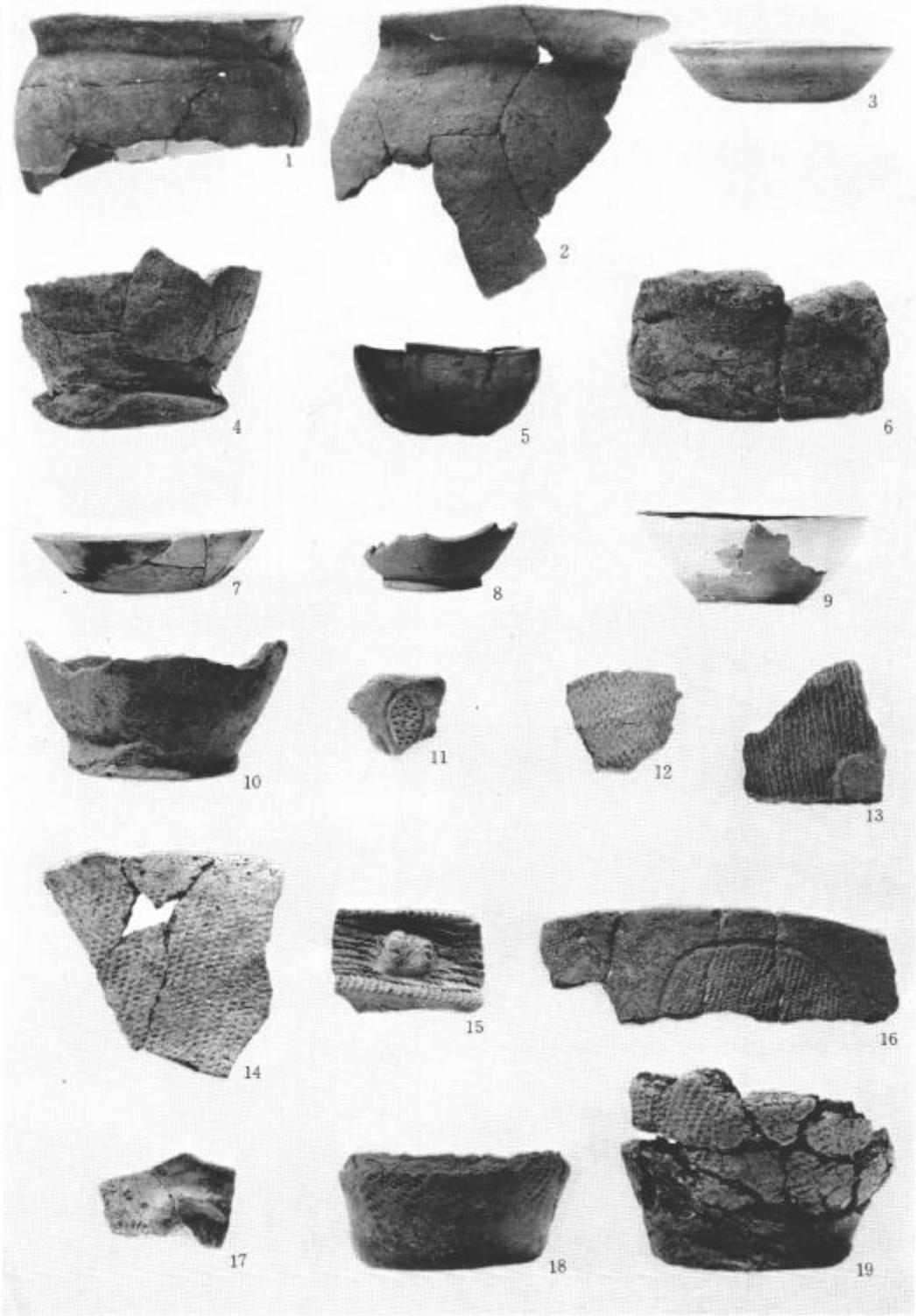
2．SKT02

3．SD01～08

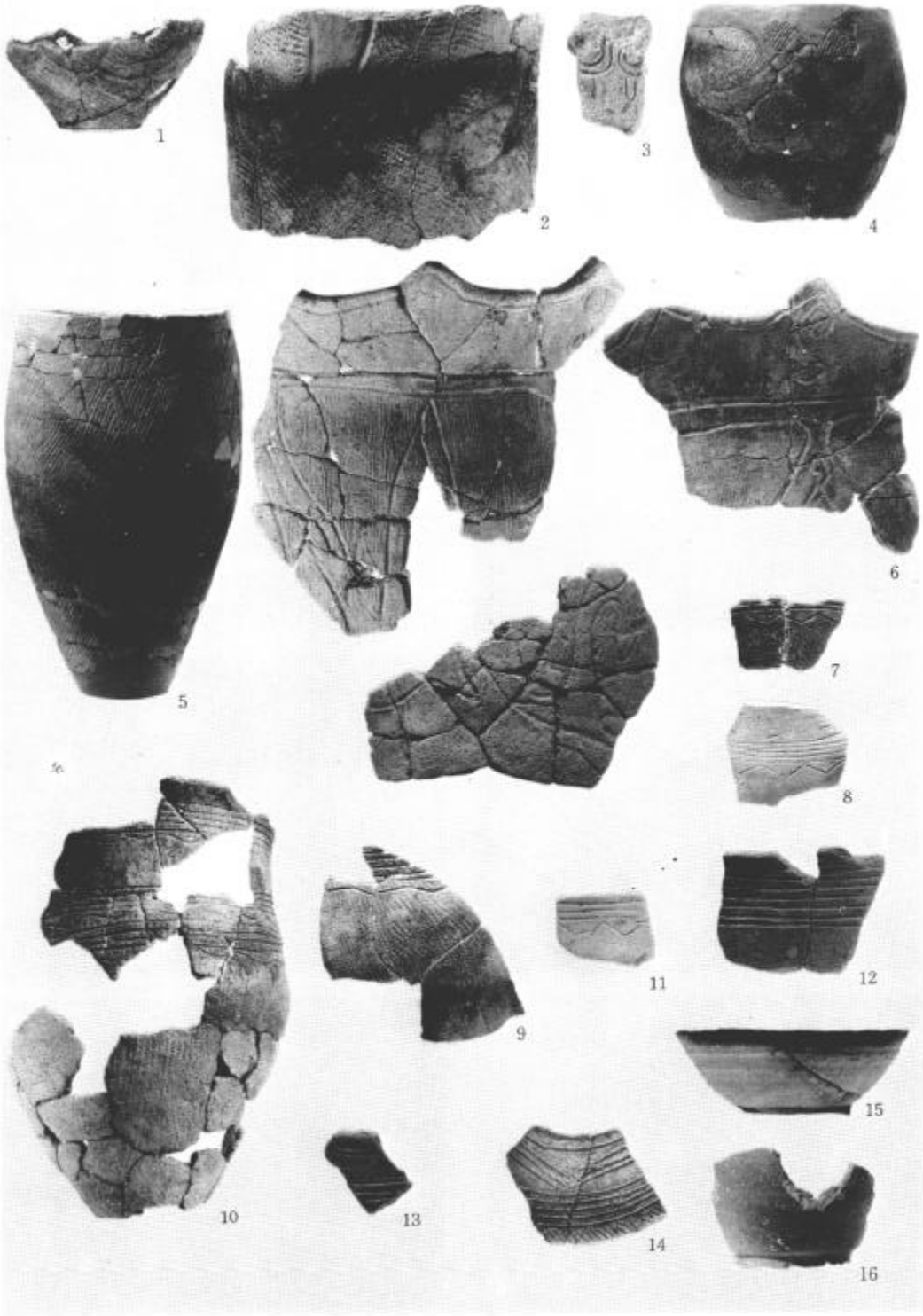
4．SA01・SD01～08

5．SD09

1～16：S I 01　17・18：S I 02



1・2：SI 02, 3：SI 05, 4：SI 06, 5・6：SI 09, 7：SI 14, 8・9：SK 04, 10：SN 03, 11～19：SI 10

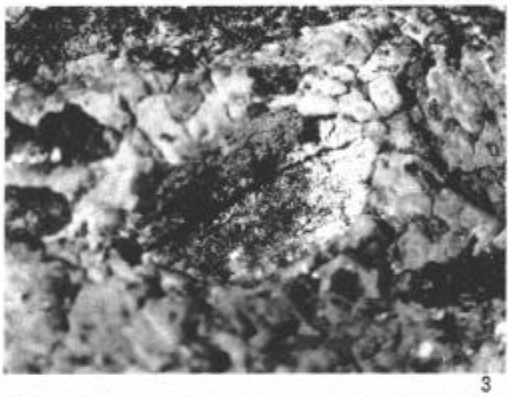


1：SI 12, 2：SK26, 3：SKF04, 4：SN05, 5：SN06, 7・8：SK16, 9：SK19, 10：SK20, 6, 11～16：遺構外

第一六図版　遺物

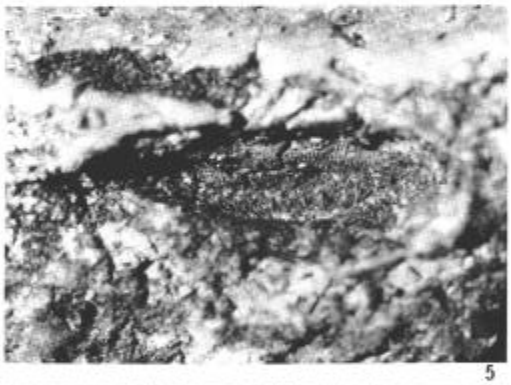
1．ＳＩ01・09出土平安時代炭化米

2



3

4



5

6

7

8

2～8：ＳＫ20出土弥生土器糞痕